

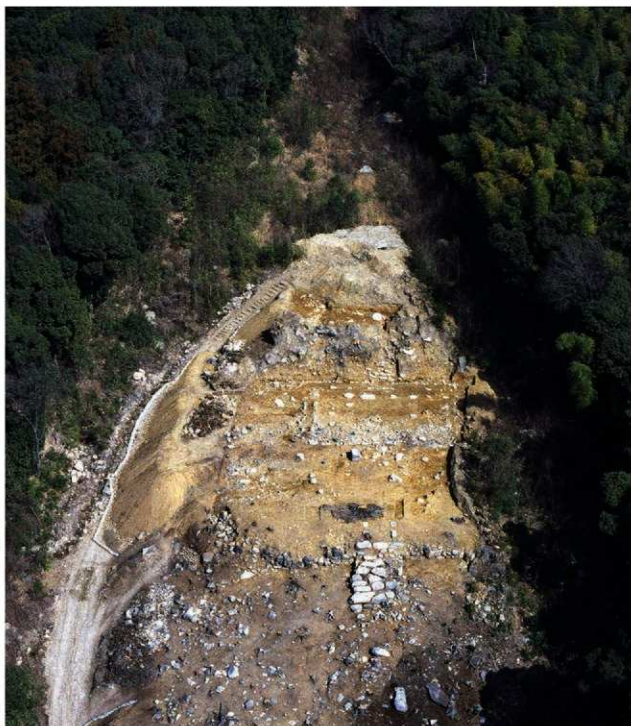
あ み だ じ
阿 弥 陀 寺

—上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査—

2018

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター



調査地全景（南西から）



調査地から防府市街地を望む（北東から）

序

本書は、防府市牟礼地内での上坂本東大川防安・通常砂防工事（砂防堰堤の建設工事）に先立ち、山口県防府土木事務所から委託を受けて、同地内に所在する阿弥陀寺において、公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整をはかりながら記録保存することとしております。

東大寺別院・周防阿弥陀寺は、俊乗房重源上人により、1187（文治3）年に建立されました。現在は、華嚴宗の寺院として、本堂・念仏堂・護摩堂・経堂のほか、鉄宝塔や仁王門等の堂宇伽藍を構えています。水晶五輪塔（国宝）を奉安する鉄宝塔（国宝）、重源上人坐像（重要文化財）や木造金剛力士像（重要文化財）、紙本墨書阿弥陀寺田畠注文並免許状（重要文化財）、湯屋（重要有形民俗文化財）などを誇る古刹として知られています。これまで、防府市教育委員会により、境内及びその周辺で3次にわたる発掘調査が実施されており、歴史的変遷過程の検証が進められています。

今回の調査地は、現在の境内地から小谷を挟んだ東側の尾根上を対象として実施しました。調査の結果、尾根の斜面を造成した境内跡や、平坦に構築した基壇を構える礎石建物のほか、その建物に至る石段、石垣、門の礎石等を確認しました。また、基壇上では、火葬遺構も確認したところです。

礎石建物の年代は、出土遺物等から、鎌倉時代後期に当たる13世紀後葉～14世紀初頭と想定されます。また、建物の性格は、礎石配置や規模等からみて、本堂様式に相当するものであり、阿弥陀寺創建期より100年程度後に、この場所に本堂クラスの建物が計画されたものと考えられます。なお、出土遺物が少量で、生活痕跡があまりみられないことから、未完成に終わった可能性もあると思われます。

このたびの調査をとおして、周防の国を代表する寺院としての阿弥陀寺が、現在よりもさらに大きな規模を誇っていたことが確認できる、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本書が、文化財保護への理解を深めるテキストになるとともに、学術研究の基礎資料として広く活用されるよう、心から期待しています。また、ふるさとの歴史や文化について考えることが、これからの地域づくりや本県の発展につながるよう、強く願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成に、御指導及び御協力くださいました関係の皆様へ、厚く御礼申し上げます。

平成30年2月

公益財団法人山口県ひとつくり財団
理 事 長 原 田 尚

例 言

- 1 本書は、平成28年度及び平成29年度に実施した阿弥陀寺（山口県防府市牟礼^{あひだご}地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所からの委託〔平成28年度契約名：上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託 第1工区〕及び〔平成29年度契約名：上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託 第2工区〕を受けて実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

調査担当（平成28年度）

調査第二課課長 岩 崎 仁 志

調査第二課主任 岡 田 裕 之

文化財専門員 小 河 泰 史

調 査 員 河 村 美 沙

（平成29年度）

調査第二課課長 岩 崎 仁 志

調査第二課主任 岡 田 裕 之

調査第一課主任 宮 下 孝 優

- 4 本書の第2図は国土地理院発行の5万分の1地形図「防府」、第3図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「防府」、第4図は防府市発行の2千5百分の1地形図「防府市地形図C-6・7」をそれぞれ複製使用し、作成した。
- 5 本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北で示した。国土座標の単位はmであり、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調標記は農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は挿図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 調査全般に関して、林寛孝氏（東大寺別院阿弥陀寺住職）、杉原和恵氏・羽鳥幸一氏・平井耕平氏（防府市教育委員会）に御教示・御協力をいただいた。調査期間中には、藤田盟児氏（奈良女子大学大学院生活環境科学系教授）と山岸常人氏（京都大学大学院工学研究科教授）に現地指導を仰いだ。とりわけ山岸氏には、礎石建物の復原案等について御教示いただくとともに、本文（第V章－1）についても御校閲いただいた。関連資料調査の際には、江上智恵氏（福岡県久山町教育委員会）、高橋一敏氏（静岡県湖西市教育委員会）に御世話になった。
- 9 出土炭化材の放射性炭素年代測定及び樹種同定については業者に委託するとともに、出土火葬骨の鑑定分析については土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの高椋浩史氏に依頼し、その成果を第IV章に掲載した。
- 10 本書の作成は岩崎・岡田・小河・河村が分担し、岡田が編集した。なお、執筆分担は次のとおりである。
Ⅰ：岡田 Ⅱ：岡田・河村・小河 Ⅲ－1・2：岡田 Ⅲ－3：岡田・岩崎・河村 Ⅲ－4：岩崎
Ⅳ－1・2：委託業者 Ⅳ－3：高椋 Ⅴ－1・3・4：岩崎 Ⅴ－2・5：岡田

本文目次

I 調査に至る経緯と調査の概要	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の概要	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
3 阿弥陀寺の歴史と過去の調査	9
III 調査の成果	
1 概要	15
2 基本層序と中段造成土	15
3 遺構	25
4 遺物	45
IV 自然科学分析	
1 阿弥陀寺出土炭化材の放射性炭素年代測定	55
2 阿弥陀寺出土炭化材の樹種同定	58
3 阿弥陀寺出土の火葬骨について	61
V 総括	
1 礎石建物の平面形式と建築計画	63
2 基壇及び平坦面の造成について	69
3 出土遺物の年代	72
4 火葬遺構の評価	74
5 礎石建物及び旧境内の歴史的位置	80

挿図目次

第1図 調査地設定図	1	第32図 方形石組平面図・見通し断面図	44
第2図 阿弥陀寺周辺の地質分布	5	第33図 方形石組平面図（石組除去後）	45
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡	7	第34図 出土遺物（1）	46
第4図 現在の阿弥陀寺伽藍と今回及び過去の調査地	13	第35図 出土遺物（2）	47
第5図 遺構配置図	16	第36図 出土遺物（3）	48
第6図 土層確認位置及びトレンチ設定図	17	第37図 出土遺物（4）	49
第7図 調査地上段・中段土層断面図	18	第38図 暦年校正結果	57
第8図 トレンチ1・2平面図・土層断面図	19	第39図 阿弥陀寺出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	60
第9図 トレンチ3平面図・土層断面図	20	第40図 礎石建物の礎石配置平面図	63
第10図 トレンチ4平面図・土層断面図	21	第41図 礎石建物平面案（A1・2案）	64
第11図 中段造成土土層及び石垣断面図	22	第42図 礎石建物平面案（B案）	64
第12図 トレンチ6平面図・土層断面図	22	第43図 和歌山県道成寺本堂平面図	65
第13図 トレンチ5平面図・土層断面図	23	第44図 阿弥陀寺現存建物略測図	66
第14図 中段造成状況模式図	24	第45図 本堂と礎石建物の比較	67
第15図 石段1平面図・立面（正面）図	26	第46図 阿弥陀寺調査地の建築計画	68
第16図 石段1立面（側面）図・断面図	27	第47図 調査地の断面模式図	70
第17図 石段1及び石垣平面図・立面図	28	第48図 山寺における平坦面造成の例	71
第18図 石垣構築状況模式図	29	第49図 年代検討のための比較資料	72
第19図 門礎石平面図・断面図	29	第50図 阿弥陀寺出土の土師器杯	73
第20図 基壇をもつ礎石建物平面図	30	第51図 土師器杯比較資料	73
第21図 基壇をもつ礎石建物立面図・礎石断面図	31	第52図 山口県内の火葬遺構の分布	74
第22図 基壇をもつ礎石建物礎石断面図	32	第53図 山口県内の火葬遺構（1）	75
第23図 基壇及びその周辺トレンチ設定図	33	第54図 山口県内の火葬遺構（2）	76
第24図 基壇及びその周辺土層断面図（1）	34	第55図 山口県内の火葬遺構（3）	77
第25図 基壇及びその周辺土層断面図（2）	35	第56図 山口県内の火葬遺構（4）	78
第26図 礎石配置図	36	第57図 主要堂宇の変遷（上）とその配置（下）模式図	81
第27図 礎石及びその周辺平面図・土層断面図（1）	37	第58図 遺構配置図（オルソン画像）	84
第28図 礎石及びその周辺平面図・土層断面図（2）	38	第59図 石段1平面図・立面図（オルソン画像）	85
第29図 石段2平面図・立面図・断面図	40	第60図 石段1及び石垣平面図・立面図（オルソン画像）	86
第30図 火葬遺構平面図・見通し断面図（1）	41	第61図 基壇をもつ礎石建物平面図・立面図（オルソン画像）	87
第31図 火葬遺構平面図・見通し断面図（2）	42	第62図 石段2平面図・立面図（オルソン画像）	88

表目次

第1表 阿弥陀寺関連事項略年表	10	第6表 土器・陶磁器観察表（2）	51
第2表 阿弥陀寺堂塔・僧坊等変遷表	12	第7表 土器・陶磁器観察表（3）	52
第3表 遺構名・トレンチ名等新旧対照表	15	第8表 土器・陶磁器観察表（4）	53
第4表 礎石一覧表	36	第9表 瓦・土製品観察表	53
第5表 土器・陶磁器観察表（1）	50	第10表 金属製品観察表（1）	53

第11表	金属製品調査表(2).....	54
第12表	測定資料および処理.....	55
第13表	放射性炭素年代測定及び放射性炭素の結果.....	56

第14表	阿努陀寺出土炭化材の樹種判定結果一覧.....	58
第15表	山口県内の火葬遺構一覧.....	75

図 版 目 次

巻頭図版	1	調査地全景(南西から)
巻頭図版	2	調査地から防府市街地を望む(北東から)
図版 1	1	調査地遠景(北西から)
	2	現在の阿努陀寺境内(左)と調査地(右)(南西から)
図版 2	1	調査地全景(上が北東)
図版 3	1	上段南東壁土層(土層A.西から)
	2	中段北 南東壁土層①(土層B.西から)
	3	中段北 南東壁土層②(土層B.北西から)
	4	中段北東隅土層(土層C.南西から)
	5	トレンチ3掘下り状況(北西から)
	6	トレンチ3土層断面(北から)
	7	トレンチ2掘下り状況(北から)
	8	トレンチ2掘下り状況(南西から)
図版 4	1	中段南西隅(北から)
	2	中段南西隅(北東から)
	3	トレンチ4掘下り状況(南東から)
	4	トレンチ4土層断面(北東から)
	5	土層D確認トレンチ掘下り状況(南西から)
	6	土層D断面(西から)
	7	トレンチ5掘下り状況(北東から)
	8	トレンチ5土層断面(南東から)
図版 5	1	石段1と石垣(南西から)
	2	石段1(南西から)
図版 6	1	石段1と石垣(西から)
	2	石段1(西から)
図版 7	1	石段1と石垣の結合状況(南西から)
	2	石段1と石垣の結合状況(南東から)
図版 8	1	石段1踏石除去後(西から)
	2	石段1構築状況(西から)
図版 9	1	石段1断面(西から)
	2	石段1最上段及び門礎石構築状況(北西から)
図版 10	1	石垣西側全景(南西から)
	2	石垣東側全景(南西から)
図版 11	1	石垣西側①(西から)
	2	石垣西側②(南西から)
図版 12	1	石垣西側③(南西から)
	2	石垣西側断ち切り状況(北西から)
図版 13	1	石垣西側構築状況(北から)
	2	石垣西側構築状況(南東から)
図版 14	1	石垣東側(南西から)
	2	石垣東側構築状況(南東から)
図版 15	1	門(礎石)検出状況(北東から)
	2	門(礎石)検出状況(南東から)
図版 16	1	門(礎石)西側掘り状況(南西から)
	2	立方体状石(西から)
図版 17	1	基壇をもつ礎石建物全景(上が北東)
図版 18	1	基壇正面(南西から)
	2	基壇(西から)
図版 19	1	基壇西辺(北西から)
	2	基壇東辺(南東から)
図版 20	1	基壇南西隅(南から)
	2	土層F確認トレンチ掘下り状況(北から)
	3	礎石8・9周辺掘下り状況(西から)
	4	トレンチ7掘下り状況(北東から)
図版 21	1	トレンチ7土層断面(北から)
	2	土層E断面(南西から)
	3	土層G断面(北東から)

	4	土層I断面(北東から)
	5	土層H断面(南西から)
図版 22	1	基壇土器出土状況(北から)
	2	基壇西辺付近土器出土状況(北から)
	3	基壇正面石積み検出状況(南東から)
	4	基壇正面石積み検出状況(西から)
図版 23	1	礎石建物全景(北東から)
	2	礎石建物全景(北から)
図版 24	1	礎石建物全景(北東から)
	2	礎石6掘付状況(南西から)
	3	礎石6及び周辺集石検出状況(北西から)
	4	礎石7掘付状況(南西から)
	5	礎石2-7間土層断面(手前.北西から)
図版 25	1	礎石8及び周辺集石検出状況①(南東から)
	2	礎石8及び周辺集石検出状況②(北東から)
	3	礎石3-8間土層断面(北西から)
	4	礎石8持上げ風景(北から)
	5	礎石14検出状況(南西から)
図版 26	1	礎石12掘付状況(北東から)
	2	礎石9掘付状況(南西から)
	3	礎石9除去後①(北西から)
	4	礎石9除去後②(北から)
	5	礎石10周辺掘下り状況(南東から)
図版 27	1	石段2検出状況①(南西から)
	2	石段2検出状況②(南西から)
図版 28	1	火葬遺構検出状況(北東から)
	2	火葬遺構検出状況(東から)
	3	火葬遺構上部礎石断面(北西から)
	4	火葬遺構下部遺構検出状況(北西から)
	5	火葬遺構下部遺構検出状況(北東から)
図版 29	1	火葬遺構半截状況(北西から)
	2	火葬遺構配石検出状況(北西から)
	3	火葬遺構配石検出状況(南から)
	4	火葬遺構骨出土状況①(東から)
	5	火葬遺構骨出土状況②(東から)
図版 30	1	火葬遺構棺台検出状況(北西から)
	2	火葬遺構棺台検出状況(南西から)
	3	火葬遺構棺台除去後(北西から)
	4	火葬遺構棺台除去後(南西から)
	5	火葬遺構完掘状況(南西から)
図版 31	1	方形石組検出状況(南西から)
	2	方形石組検出状況(東から)
図版 32	1	方形石組 石組除去状況①(南西から)
	2	方形石組 石組除去状況②(南東から)
	3	方形石組 立石検出状況(南西から)
図版 33	1	方形石組完掘状況(南西から)
	2	方形石組完掘状況(北東から)
	3	方形石組付近開口出土状況(南から)

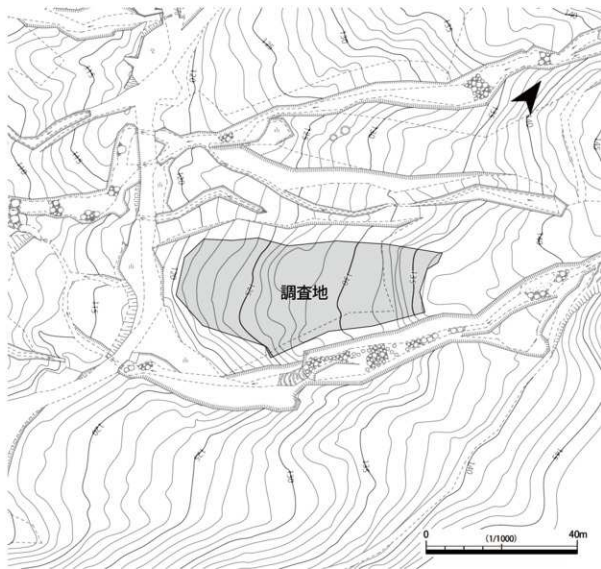
図版 34	出土遺物(1)
図版 35	出土遺物(2)
図版 36	出土遺物(3)
図版 37	出土遺物(4)
図版 38	出土遺物(5)
図版 39	出土遺物(6)
図版 40	出土遺物(7)
図版 41	出土遺物(8)

Ⅰ 調査に至る経緯と調査の概要

1 調査に至る経緯（第1図）

山口県防府土木建築事務所では、平成21年の豪雨による土石流災害を受け、防府市大字牟礼において、砂防堰堤の建設を目的として、上坂本東大川防安・通常砂防工事を計画した。事業の対象となる範囲には、阿弥陀寺僧坊跡の存在が推定されていることから、山口県教育委員会では、平成24年度に堰堤工事により掘削を受ける部分、及び堰堤設置後に土石流堆積物で充填されると予測される範囲について、埋蔵文化財の取扱いに係る情報を得るための試掘調査を実施した。その結果、当該地区に寺院関連遺構が残存することが確認されたため、工事に先立って記録保存の措置をとることが必要となった。

山口県防府土木建築事務所の委託を受けた、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターでは、工事で影響を受ける1,500㎡の範囲について、平成28年度に、上坂本東大川防安・



第1図 調査地設定図

通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託 第1工区として発掘調査を実施し、平成29年度に、上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査業務委託 第2工区として、発掘調査報告書を作成することとなった。

2 調査の概要

平成28年度は、6月7日付けの委託契約締結を受けて調査準備を開始し、8月1日に山口県防府土木建築事務所との初回業務打合せ、8月17日に同事務所との現地協議を行った。9月1日から



重機による表土除去



人力による遺構検出



国土座標杭設置

6日にかけて、調査地内の立木伐採を防府土木建築事務所の受託業者が実施することとなったが、伐採により遺構に影響が及ぶ可能性があったため、随時、センターの担当職員が立会を行った。

現地調査に先立って、東大寺別院阿弥陀寺、近隣の自治会や小中学校、農業高等学校のほか、警察署、消防署に、調査期間中の安全確保のための理解と協力を要請した。9月27日に、発掘作業員説明会を開催し、9月28日から30日にかけて、仮設事務所等、器材庫、仮設トイレを順次設置した。なお、仮設事務所の電気配線工事は10月17日に行った。

現地調査は、10月3日から重機による表土除去作業を開始し、10月14日に完了した。その間の10月11日から、発掘作業員の稼働を開始するとともに、同日に発掘器材の搬入を行い、環境整備に取り掛かった。10月17日から、清掃作業や安全確保のための木の根除去を行った後、10月24日からは遺構検出作業を開始した。調査地が山林にあるため、木の根が多いことと、主な遺構は石で作られていることから、木の根除去、遺構検出、清掃作業をくり返ししながら調査を進めた。そして、12月上旬までには、調査地下段、及び下段と中段間の石垣・石段については、遺構検出及び清掃作業等をほぼ終了した。その間の11月16日には、業務委託による国土座標杭設置を実施した。

調査地中段の基壇は、重機による表土除去作業中に確認していたが、基壇上の礎石配列等が判然としなかったため、11月28日から確認のためのトレンチを設定し掘削を行った。その結果、想定より土石流が厚く堆積しており、表土除去で取り除いた後の面より、さらに50～70cm程度下層に礎石が存在することがわかったため、12月15日から17日まで基壇上を中心に、再度重機による表土除去を実施した。12月21日には、調査地内の立木伐採の業務委託を実施したが、天候不順等により、年内の現地調査はそのまま終了した。なお、12月7日には、福岡県久山町首羅山遺跡での関連資料調査を実施した。

1月5日から、現地調査を再開し、基壇を中心に遺構検出や清掃作業を継続した。それにより、1月下旬には、基壇の範囲や、基壇上面の礎石配列等が明らかとなってきた。2月4日には、地元住民向けの現地説明会を開催し、110人の参加者があった。2月16・17・21日には、空中写真撮影と空中写真測量及び立面測量を実施した。その後は、調査地中段を中心に、造成方法等を確認するためのトレンチの掘り込みを行い、2月24日に器材搬出の後、仮設事務所、器材庫、仮設トイレ、事務所等物品を撤去し、2月28日で発掘作業員の稼働を終了した。記録関係については、遺構配置図は空中写真測量及び立面測量の業務委託によるため、担当職員は、個別遺構の実測図や、調査地及びトレンチの土層断面図の作成、記録写真撮影等を中心に、随時行った。

なお、基壇をもつ礎石建物等の貴重な遺構を確認したことから、2月21日に建築史の専門家である奈良女子大学教授の藤田盟児氏、3月7日に寺院建築史の専門家である京都大学教授の山岸常人氏を招聘し、現地指導をいただいた。

3月1日に、防府土木建築事務所による現地調査終了の立会があった後、3月3日から伐根および産業廃棄物の処分と埋め戻し作業を実施した。それと併行して、担当職員による遺構実測図作成、及び記録写真撮影等の補



立木伐採



基壇周辺作業



現地説明会



調査指導



抜根作業



表土埋め戻し

足を行い、3月17日にすべての現地作業を終了した。3月24日には、防府土木建築事務所において、完了検査を受検した。

出土遺物については、随時山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を進めたほか、遺構図面や写真等の記録類の整理を進め、次年度刊行予定の発掘調査報告書を作成するための資料準備を行った。

平成29年度は、4月3日付けの委託契約締結を受けて調査準備を開始し、4月11日に山口県防府土木建築事務所との初回業務打合せを行った。年度当初は、昨年度に引き続き、出土遺物の洗浄、接合、復元等の整理作業のほか、遺構図面や写真等の記録類の整理を進めた。併せて、炭化材の放射性炭素年代測定や樹種同定、オルソ画像作成等の業務委託契約を行った。骨片については、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに分析・鑑定を依頼した。

出土遺物の整理作業の目途がついたところで、遺物実測図の作成、写真撮影による記録化を行った。遺構図面は、実測原図のデジタルトレースのほか、業務委託した空中写真測量及び立面測量図面の整理等を行った。これらの記録資料をもとに、挿図及び写真図版を作成した。

一方で、関連資料の収集を行いながら、文章の執筆を進めていった。7月25日には、関連資料調査として、静岡県湖西市教育委員会

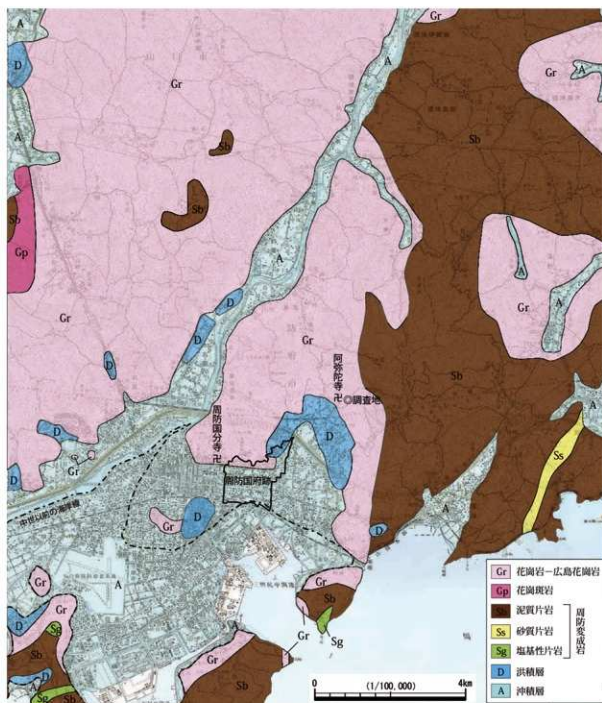
において、同市所在の大知波峠廃寺跡に関する参考図書を受領した上で、現地を視察した。翌26日には、昨年度に現地指導をいただいた、京都大学教授の山岸常人氏の研究室を訪問し、阿弥陀寺の基壇をもつ礎石建物のプラン案を中心に、直接調査指導をいただいた。同日には、この建物とプランが共通する、和歌山県日高郡日高川町所在の道成寺本堂を視察した。

以上の成果をまとめて、今年度、発掘調査報告書を刊行するに至った。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第2図）

阿弥陀寺は、山口県防府市大字牟礼に所在する。防府市は、山口県の中部にあり、周防灘に面している。市域の北東から南西にかけて、一級河川である佐波川が流れ、下流には県下最大の平野である防府平野が形成される。平野の南縁には、江泊山、向島、田島山等、平野の発達により陸繋島化した陸繋島嶼群が点在する。現在の防府平野のおよそ半分は、近世以降の干拓によって拡大したものであ



第2図 阿弥陀寺周辺の地質分布

り、それ以前の海岸線は、桑山南麓付近にあったと推定されている。

南縁を除く平野の三方には、北東部に大平山地、北部に右田ヶ丘山地、西部に楞嚴寺山地といった、標高 300 ～ 600 m 級の中起伏山地がとりまく。これらの地質の大部分は、白亜紀の黒雲母花崗岩（広島花崗岩）からなるが、大平山地は西半部が花崗岩、東半部及び北東部が泥質片岩（周防変成岩）からなる地質である。

現在の阿弥陀寺の中心伽藍は、この大平山地の主峰である大平山（標高 631 m）の西側斜面にあり、標高約 80 ～ 120 m に位置する。今回の調査地は、現在の念仏堂より東側に約 100 m の地点、標高 121 ～ 135 m の範囲に当たる。大平山頂から東半部及び北東部にかけては、泥質片岩の風化土層に覆われ、緩やかな起伏面が広がるが、調査地のある西側斜面の標高 200 ～ 600 m 付近では、急傾斜となることから、風化による堆積土は残らず、高所で泥質片岩、低所で花崗岩の露頭がみられる。調査地周辺は、比較的緩やかな斜面となっており、基盤である花崗岩が一部で露出するほかは、その上は土石流性の垂角礫層や厚いくさり礫層によって覆われている。調査地のある斜面の両側は、比較的急な侵食谷によって削られて、調査地のある尾根は段丘化している。

このような傾斜の強い地形と、風化しやすい花崗岩を基盤とする地質に加えて、当地域が温暖・少雨な瀬戸内型の気候の中でも、降雨量が多い瀬戸内西部に当たることと、近年の温暖化による豪雨の頻発によって、調査地周辺は土石流災害の危険性の高い場所といえる。

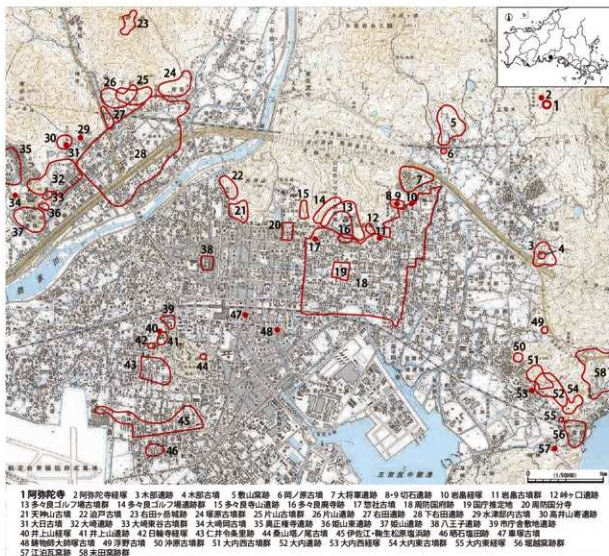
2 歴史的環境（第3図）

旧石器～縄文時代 防府市域では、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、山口市との市境にある長沢池遺跡では、細石器が表採されている。縄文時代では、多々良山東尾根の大將軍遺跡（7）、佐波川下流右岸地域の奥正権寺遺跡、同中流右岸地域の小野中学校敷地遺跡等で、縄文時代早期の押型文土器が出土している。縄文時代前期から後期にかけての遺跡はみられないが、縄文時代晩期には、先述の奥正権寺遺跡や小野中学校敷地遺跡、佐波川下流右岸地域の右下田遺跡（28）で、遺構や遺物が確認されている。そのうち、奥正権寺遺跡では、晩期中頃の貯蔵穴とみられる土坑群が検出され、土坑内から縄文土器がまとまって出土した。

弥生時代 弥生時代の遺跡として、先述の右下田遺跡は、佐波川の沖積作用による沖積平野上に位置しており、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴建物と土坑、溝からなる集落域と、集落近くに壺棺墓や甕棺墓、箱式石棺墓等の墓域を確認した。とりわけ、弥生時代後期を中心とする 100 棟近くの堅穴建物が出され、大規模な集落であることが判明した。また、土器焼成坑群や、黒曜石や安山岩の石屑及び石器未成品が出土しており、集落内で土器や石器の製作を行ったことがうかがえる。遺物としては、弥生土器、打製石斧・叩き石・石鎌等の石器、鉄斧等が出土している。

佐波川下流左岸地域の井上山遺跡（41）と同右岸地域の大崎遺跡（32）は、いずれも丘陵上に営まれた中期を中心とする高地性集落であり、佐波川を挟んで対峙している。両遺跡とも、堅穴建物群と貯蔵用堅穴群、環濠等が検出され、土器や石器、分銅形土製品が出土するなど、ほぼ共通した遺構・遺物の内容を示している。

古墳時代 前期の古墳は、防府市域では確認されていない。最も古いのは、防府平野西南部の陸繁島



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

嶺地域に築かれた黒山1号墳である。墳丘形態は円墳で、埋葬主体は組合せ式箱式石棺と推定される。出土遺物として、六神六乳鏡、勾玉・管玉、鉄鏃等があり、5世紀代の首長墳と考えられている。

後期の6世紀以降、佐波川下流域を中心に多くの古墳が築かれる。この頃には、桑山塔ノ尾古墳(44)や天神山古墳(21)等の首長墳、片山古墳(25)や車塚古墳(41)、大日古墳(31)等の前方後円墳も築かれるが、多くは、岩島古墳群(11)や塚原古墳群(24)、大内古墳群(51・54)等といった防府平野周縁の山麓斜面に築かれる群集墳である。

佐波川下流左岸地域の桑山塔ノ尾古墳では、鏡、鉄矛、甲冑、蛇行状鉄器、金銅製飾履、馬具等が副葬されていたことが、江戸時代の記録に残されており、6世紀中葉に比定される。天神山古墳では、副葬品として、半鳳凰頭及び素鳳頭の大刀把頭飾と大刀の一部、鉄鏃と胡録金具、甲の小札、雲珠・辻金具・鞍金具等の馬具が伝えられており、6世紀後半に比定される。

一方、佐波川下流右岸地域の片山古墳は、全長約41mの前方後円墳であり、銀製鏡板・杏葉・辻金具・鞍金具等の馬具類、耳環が出土し、6世紀後半に比定される。大日古墳は、7世紀中頃に比定される前方後円墳であるが、埋葬主体として奈良県岩屋山古墳に類似した横穴式石室をもち、石室内には兵

庫県竜山石製の刳拔式家形石棺を納めることから、近畿地方の豪族との関わりをもつ被葬者が想定される。その被葬者層について、都怒国造あるいは周防凡直国造下の沙摩（サバ）県主に相当し、後に周防地域において、政治的中心を占めるようになる階層とする見解もある。

古 代 防府平野には、周防国府（18）が設置される。1961（昭和36）年度から発掘調査が継続されており、国府と推定される築地で囲まれた一画（19）、国府推定地から南に延びる朱雀路（築地、妻戸地区）、朱雀路に直交する道路（馬屋田地区）、国府推定地の北方で国司館と推定される建物群とそれに付属する庭園跡（草園地区）、津と関連する可能性のある施設（船所・浜宮北方地区）、国府工房と推定される遺構（宗常、妻戸地区）等が確認されている。

741（天平13）年の国分寺建立の詔を契機として、全国各地で国分寺が建立され、周防国でも国府の北西に周防国分寺（20）が造営される。発掘調査によって、南門と中門の位置が推定されたほか、東塔跡の礎石が確認され、寺域の南北東限を確定した。さらに、現金堂の礎石の下層から、創建当初の礎石掘り込み穴が発見され、現金堂が奈良時代の基壇をそのまま踏襲していることが判明した。

都と国府とを結ぶ交通として、現防府市域に相当する旧佐波郡内を山陽道が通っていたが、『延喜式』によれば、勝間駅家（現防府市勝間）と大前駅家（現防府市右田大前）の2つ駅家が確認できる。勝間駅家は、国府推定地の南南西にある小字名である「馬屋田」に比定される可能性があり、山陽道は国府の前方を通るルートであったと考えられる。これまでの発掘調査では、山陽道や駅家等に関する遺跡・遺構は見えていない。

一方、海上交通は、佐波川河口付近が、瀬戸内航路の良好な津として、古来知られており、佐波浦や勝間浦の名が史料にもみられる。そのうち勝間浦は、周防国府付属の海津であり、先述の勝間駅家とともに、海陸の公的交通施設として大きな役割を果たしたと推測される。

生産遺跡として、防府市域東部の牟礼地域において、敷山窯跡群（5）や末田窯跡群（58）等、古墳時代から古代にかけての須恵器窯跡群を確認したほか、江泊瓦窯跡（57）では、周防国府や周防国分寺の建物補修を目的として、平安時代の10～11世紀に操業した瓦窯群を検出した。防府市域西部の金山山麓にある切畑南遺跡では、平安時代後期（11世紀）の銅精錬工房と考えられる建物や精錬炉等を検出したほか、鞆羽口や埴壇、銅製品、銅塊、銅滓等が出土しており、金山が『続日本紀』に記載のある「達理山」に当たる可能性も指摘されている。

中 世 院政期以降、周防国府のあった方八町の領域は「国衛土居八町」と称され、方格の条里地割りが行われた可能性がある。そして、鎌倉時代に周防国が東大寺の知行国となって以降、「府中」は東大寺に掌握され、松崎天満宮の門前町である宮市、国府津とみられる勝間津、港町の三田尻等、国府の周縁に都市的機能が分布し、次第に国府は解体されるに至った。

また、院政期の周防国では、「院の近臣」が国司やその目代となったため、国司権力が強く、国内に多くの国衛領が分布するのに対して、荘園名はあまり知られていない。その中で、周防国の在庁官人として、国衛領を自己の所領としながら勢力を伸ばしたのが、旧佐波郡内を本貫とする多々良氏であり、後にその一派が大内氏となるとされる。しかし、防府市内では、多々良氏または大内氏と関わる居館跡等は確認されていない。

一方で、中世の村落である下右田遺跡の発掘調査では、大きな成果が得られた。すなわち、平安時

代から室町時代に至る掘立柱建物約 250 棟、建物群を取り巻く溝、石組みの井戸、墓、土坑、耕地とみられる空閑地を検出したほか、土師器、陶器、瓦質土器、木器、石臼、鉄製品等の生活用具が多く出土した。遺構群や出土遺物の検討から、この集落が、条里地割に沿って、散村形態から疎状な塊村へ、そして集村形態へという変遷を示すことが明らかとなった。

中世の山口を特徴づける土器として瓦質土器があるが、その生産地として防府市域西部の楞嚴寺山西南麓に位置する岩淵遺跡と原遺跡がある。前者では鎌倉時代後期から室町時代中期、後者では室町時代後半の瓦質土器窯跡を確認している。県内に広く流通する足鋼も生産されており、合物売りの長である兄部職を担う兄部氏が販売特権をもつ商品として、その商圏を介して普及したとされる。

近 世 1557（弘治 3）年に大内義永が追討され、毛利氏による防長支配が始まるが、1600（慶長 5）年の関ヶ原の戦いを契機として、毛利氏の領国は防長二国に滅封されるとともに、萩に拠点を移す。防府市のある旧佐波郡は、防府宰判と徳地宰判に分かれて支配されていたが、正徳期には、三田尻宰判の呼称がほぼ定着する。

防府市域では、中世以来、商業を中心に発展してきた宮市が、引き続き発展する。古代から国府の港があり、中世には「国府津」、「国府浜」等と呼ばれた三田尻も、1611（慶長 16）年、下松から御船倉が移設され、さらに発展する。三田尻と萩城下を結ぶ萩往還道が整備されるに伴い、三田尻には藩主が宿泊するなど、萩藩の公館であった御茶屋が築かれたほか、萩往還沿いの宿場町である宮市には本陣が置かれ、それぞれ賑わいをみせた。

防府平野では、近世以前から塩業が盛んであったが、近世になると、三田尻六カ所浜と呼ばれる広大な入浜塩田地帯が成立し、播州赤穂に次ぐ、国内第二の規模の塩田となっていた。窯業では、瓦質土器以来の窯業の地である、市域西部の佐野村で佐野焼の生産が行われた。佐野焼は、火抜湯瓶・谷瓦・水壺・火蓋等の器種について、塩浜で大きな需要があった。江戸時代後期には、佐野焼の分窯として、市域東部の牟礼村で末田焼（堀越焼）が生産されるようになり、江泊浜等に提供された。

以上のように、阿弥陀寺のある防府市域は、古代に周防国府が設置されて以来、陸海交通の要衝であり、それとともに諸産業が発展をみせてきた。こうした背景が、古代末～中世において、現在の地に東大寺別院である阿弥陀寺が建立され、その後も歴代の有力者が増え、重要視されてきた理由の一つといえよう。

3 阿弥陀寺の歴史と過去の調査（第 4 図、第 1・2 表）

（1）阿弥陀寺の歴史

東大寺別院・周防阿弥陀寺は、俊乗房重源により建立された、現在は華嚴宗と真言宗を兼ねる寺院である。その歴史は、1180（知承 4）年に、東大寺が平氏による焼き討ちに遭い、大仏殿を含む主要伽藍が焼失したことに端を発する。東大寺大勧進職に任命された俊乗房重源は、東大寺造営料国である周防国に downward するとともに、再建用木材を調達し、民衆への勧進活動を行う拠点である「別所」として、1187（文治 3）年に周防阿弥陀寺の建立を開始した。そして、1197（建久 8）年までには、浄土堂・鉄宝塔・経藏・鐘樓・護法神社・食堂・浴室が、1200（正治 2）年までには、薬師堂・舍利殿が完成した。この時の記録から、浄土堂と薬師堂はともに 7 間 4 面の建物で、鉄塔および仏舍利

第1表 阿弥陀寺関連事項略年表

年	主な出来事（下線は堂塔等の建物、ゴシック体は僧坊に関する記載）	出典等
1180（治承4）	東大寺焼失	
1181（養和元）	俊成坊重源、東大寺大勧進職となる	
1186（文治2）	周防国が東大寺造司料国となり、重源が周防に下向する	重源上人誓願之記
1187（文治3）	阿弥陀寺を創建する	重源上人誓願之記
1197（建久8）	阿弥陀寺鉄宝塔が鋳造される。鉄塔路から、浄土堂・多宝十三輪鉄塔・経蔵・鐘樓・護法神社・食堂・浴室の存在が確認できる	鉄塔路
	俊成坊重源、阿弥陀寺の四方境界を定める	阿弥陀寺西至
1200（正治2）	新たに、七間四間の薬師堂と、方丈の舍利殿の記載あり。「浄土堂宇七間四間 薬師堂宇同 舍利殿宇方丈 安置高五尺鉄塔一基 其中奉納舍利五粒」「鐘一口高 三尺」「厨屋一宇 五間四間」	（周防国経）在庁官人等宣機札路
1206（建永元）	重源入寂	
1281（弘安4）	「因茲本堂安置無量寿仏・・・此外経塔鐘樓塔婆舍利殿並鐘樓・・・」	大政官儀
1449（宝徳元）	阿弥陀寺諸坊に、国庁御願経番料田として矢田舎ほかの地が返付される。 宝樹坊・大覚坊・般若坊・一心坊・成就坊・證誠坊・安養坊・寂光坊・実相坊・戒行坊の諸坊の名の初見	阿弥陀寺諸坊国庁経免返付状
	阿弥陀寺御監焼失する	
1484（文明16）	「去年冬依不慮之儀、堂舎僧坊悉令焼失訖」 「文明十六年甲辰十一月五日巳時出火・・・御監堂舎鐘樓護法社経殿御監堂舎利殿薬師堂僧坊成就坊般若坊一心坊證誠坊寂光坊宝樹坊大覚坊安養坊実相坊戒行坊所願堂普濟庵其外三時計都滅訖」	大内政弘下知状（1485） 御監堂棟札路（1485）
1485（文明17）	大内政弘、阿弥陀寺再興に尽力するよう下知する	大内政弘下知状
	御監堂を再興する	御監堂棟札路
1494（明応3）	「般若坊御宿御中」	盛徳書状
1507（永正4）	「仍本堂退屋并諸堂坊舎已下、于今無建立之通・・・」 「依戒行坊寛済堂行」「阿弥陀寺大覚坊寛海」	関田弘胤奉書
1511（永正7）	「阿弥陀寺之般若坊願寺、前住退転之以後未盡之由候・・・」（寛海僧都御宛て） 幸寛海は、大覚坊または浄林坊	大内家奉行衆奉書
1514（永正10）	阿弥陀寺の免田散在方検見勘文が作成される。 「年行事成就坊源有（花押）」「年行事安養坊勢思（花押）」	阿弥陀寺免散在方検見勘文
1531（享祿4）	「戒行坊願坂本并免田」事「般若坊寛海 在刊」	戒行坊願坂本并免田坪付
1532（享祿5）	寛海、阿弥陀寺般若坊職を弟子内御専心に譲与する。 「防府阿弥陀寺般若坊職事」	阿弥陀寺般若坊職譲状
1533（天文2）	般若坊専海と成就坊周清が、坂本内の溝と清水の利用につき取り決めをする。 「（般若坊職）専海判」「成就坊専」	般若坊専海書状
1545（天文14）	目代宗芸、般若坊と実相坊との確執を厳しく戒める。 「殊今度般若坊と実相坊物忌之次第・・・」	周防国目代宗芸下知状
1548（天文17）	「就阿弥陀寺願之内普濟庵相向名田職之儀」「從前々有子細般若坊知行之題」	周防国目代宗芸下知状
1565（永祿8）	仁王門が損壊する	仁王門棟札（1685）
1589（天正17）	「一、三八石 成就坊願」「一、廿六石 般若坊願」「一、廿七石五斗 證誠坊願」	阿弥陀寺寺願目録
1599（慶長4）	般若坊	阿弥陀寺般若坊願坪付
1602（慶長7）	成就坊・般若坊・宝樹坊・寂光坊	阿弥陀寺般若坊給坪付
1662（寛文2）	鉄宝塔を修理する	鉄宝塔履跡修理路
1673～1681（延宝年間）	浴室を再興する	護摩堂本堂棟札（1731）
1685（貞享2）	仁王門を再興する	仁王門棟札
1693（元禄6）	念仏堂（即浄土堂）を修理し、常念仏を再興する	護摩堂本堂棟札（1731）
1709（宝永6）	開山堂（即御監堂）を再興する	開山堂棟札
	食堂と経蔵を再興する	護摩堂本堂棟札（1731）
1719（享保4）	地蔵堂を再興する	周防佐波郡牟礼村草宮山阿弥陀寺略縁起（1756）
1722（享保7）	護法社の祠（鎮守堂）を再興する	護摩堂本堂棟札（1731）
1731（享保16）	護摩堂（即経蔵堂）・本堂・厨座を再興する。	護摩堂本堂棟札
1755（宝暦5）	「古来之由緒今以本堂護摩堂東庫方丈開山堂経蔵常念仏堂食養護法神社山門浴室等之諸堂并二念仏之諸堂等数多相抱」、「佐波郡牟礼村真言宗 阿弥陀寺（黒印）」	開山五百五十年忌托鉢願出書
1756（宝暦6）	「是塔頭大覚坊ノ總事務ニ補任セシナリ。今ハ本坊ノミニテ鑑坊一宇モナシ」	周防佐波郡牟礼村草宮山阿弥陀寺略縁起（1756）
1828（文政11）	実相坊・成就坊・安養坊・般若坊・證誠坊が大風で倒れる。「右文政十一年ノ大風吹倒置置相成」	防長風土注進書 第9巻 三田尻宛 上
1846（弘化3）	開山堂を再興する	古社寺取調書（1895）
1862（文久2）	大願堂（即影堂）を再興する	阿弥陀寺大師堂棟札
1863（文久3）	「般若坊音代」	仁王門花宮山掲額
1871（明治4）	国庁寺惣門（高麗門）を修築する	国庁寺附属寄附物目録
1902（明治35）	念仏堂が焼失し、再興する	
1958（昭和33）	東大寺より六蔵論が恩賜される。鐘樓を再興する	
1962（昭和37）	旧収蔵庫を竣工する	
1993（平成5）	土石流災害	
2009（平成21）	新収蔵庫を竣工する	

を納める舍利殿は方丈の建物であったことがうかがえる。

僧坊に関する記載は、1449（宝徳元）年に、宝樹坊・大覚坊・般若坊・一心坊・成就坊・證誠坊・安養坊・寂光坊・実相坊・戒行坊の諸坊の名がみられ、それに、1484（文明16）年にみられる所願院と普濟庵を加えた少なくとも12坊が存在したと考えられる。阿弥陀寺の住持職は、周防国司を兼ねるため、寺内に常時在住せず、諸坊が輪番で年行事や日常の事務を取り仕切っていた。

1484（文明16）年には、堂宇や僧坊等の伽藍を悉く焼失する火事が発生したが、翌1485（文明17）年には、守護大内政弘により再興に尽力する旨の下知があり、まず御影堂（開山堂）を再興させた。しかし、その後、順調に再興が行われたとはいえ、1507（永正4）年の時点でも、本堂や湯屋、諸堂や坊舎は建立されないままであった。その後、1565（永禄8）年に、仁王門が損壊したとの記録を除けば、伽藍に関する記録はみられず、後の記録に照らせば御影堂も再び損壊したと思われる。

江戸時代に入り、1600年代末の延宝年間に浴室を再興したのを皮切りに、その後100年に満たない間に、仁王門、念仏堂（浄土堂）、開山堂（御影堂）、食堂、経蔵、地蔵堂、護法神社、護摩堂（薬師堂）、本堂、厨庫が順次再興され、現在の伽藍となったと考えられる。

一方で、焼失後の僧坊については、建物自体の存在は確認できないが、坊号のみが記録の中に散見される。いずれも後世に書かれたものながら、天正・慶長年間までは諸坊があり、慶長以後、本坊（大覚坊か）を残して断絶したとする記録（「周防佐波郡牟礼村華宮山阿弥陀寺略縁起」）と、1828（文政11）年に、実相坊・成就坊・安養坊・般若坊・證誠坊が大風により倒壊したとする記録（「防長風土注進案」）があり、相互に矛盾している。前者の記録の書かれた1756（宝暦6）年には、本坊しか存在しないとされること、1863（文久3）年に「般若坊」の坊号がみられることから、前者の記録に信憑性があると考えられる。ただし、本坊が「大覚坊」を指すのか「般若坊」なのかははっきりしない。

なお、阿弥陀寺の宗派は、東大寺「別所」という位置からみて、創建当初は華嚴宗であったと想定できる。現在の阿弥陀寺は真言宗（御室派）を兼宗するが、その初見は、1755（宝暦5）年の「佐波郡牟礼村真言宗阿弥陀寺（黒印）」の記録で（「開山五百五十年忌托鉢願出書」）、江戸時代後期までには真言宗寺院を兼ねる形へと変化したものと考えられる。

（2）現在の阿弥陀寺伽藍と過去の調査

現在の阿弥陀寺の伽藍は、鐘樓・念仏堂（旧浄土堂）・経堂のある東の一画、開山堂・収蔵庫のある中央の一画、本堂・庫裏・護摩堂（旧薬師堂）のある西の一画の3つの区画に分けられ、参道の入口には仁王門と湯屋がある。平成5（1993）年の土石流災害により、本堂と収蔵庫との間を土石流が貫流し、その後の復旧整備で流れに挟まれた部分を水路として残す工法をとったため、本堂・護摩堂等と開山堂・念仏堂等は、水路を挟んで東西に隔てられることとなった。堂宇は、いずれも山麓の尾根筋に建立されており、土石流の流路が地形本来の谷筋をたどったため、建物への直撃を避けることができたと考えられる。

創建時の阿弥陀寺において、もっとも重要な堂宇は、行業のための浄土堂（現念仏堂）と、温浴・保養のための浴室（湯屋）であった。そのため、仁王門及び湯屋から、念仏堂や鐘樓のある一画に至

第2表 阿弥陀寺堂塔・僧坊等変遷表

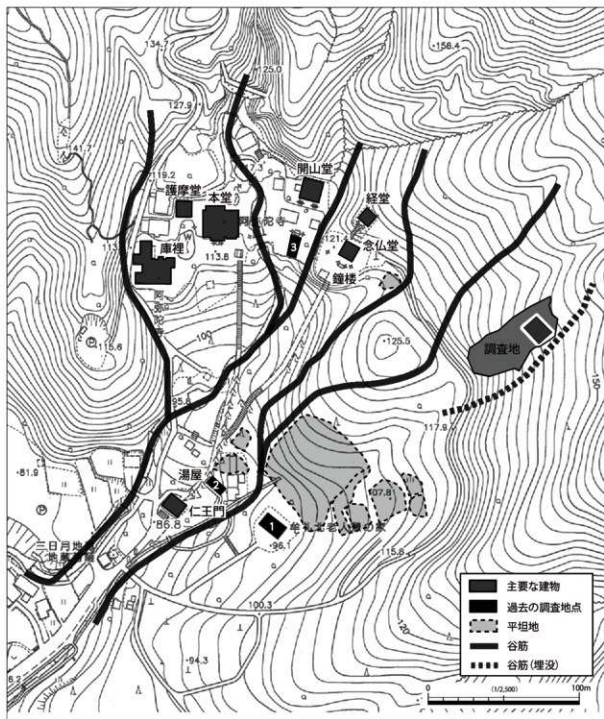
	本堂	(念仏堂)	(浄土堂)	(護摩堂)	(藥師堂)	(開山堂)	御影堂	地藏堂	舍利殿	鉄宝塔	経蔵	鐘樓	(鎮守堂)	農法神社	食堂	庫裡	(浴室)	湯屋	仁王門	僧坊											
																				宝樹坊	般若坊	成就坊	安養坊	実相坊	大覺坊	一心坊	證誠坊	寂光坊	戒行坊	所願院	普濟庵
建久 8 1197		●								●	●	●	●	●	●		●														
正治 2 1200		●		●				●	●			△	△				●														
弘安 4 1281	●	△	△					●	●		●		△																		
宝徳元 1449																				●	●	●	●	●	●	●					
文明 16 1484		△	●	●		●	●	△		●	●		●							●	●	●	●	●	●	●					
文明 17 1485						●																									
明応 3 1494																				○											
永正 4 1507	×	×	×					×				×	×				×			×	×	×	×	×	×	×					
永正 7 1511																				○											
永正 10 1514																					○	○									
享祿 4 1531																					○										
享祿 5 1532																					○										
天文 2 1533																					○	○									
天文 14 1545																					○										
天文 17 1548																					○					○					
永祿 8 1565																			●												
天正 17 1589																					○	○				○					
慶長 4 1599																					○										
慶長 7 1602																					○	○	○			○					
寛文 2 1662									●																						
延宝年間 1673～81																		●													
貞享 2 1685																			●												
元禄 6 1693		●																													
宝永 6 1709						●																									
享保 4 1719							●				●				●																
享保 7 1722													●																		
享保 16 1731	●			●												●															
宝暦 5 1755	●	●	●	●						●		●	●	●	●	●	●	●	●												
宝暦 6 1756																						●									
文政 3 1820																		●													
文政 11 年 1828																		●			●	●	●	●		●					
弘化 3 1846				●																											
文久 3 1863																				○											

●：建物の存在が推定できるもの △：建物が存在する可能性があるもの

×：記録の時点で、建物は存在しないと考えられるもの

○：「・・坊」の記録が、僧坊の建物を指すのか、坊号のみを指すのか、判断できないもの

※ 1828（文政 11）年の僧坊に関する記録は、信憑性に欠けると考える。



第4図 現在の阿弥陀寺伽藍と今回及び過去の調査地

る参道を含む東側の尾根筋が、当初の阿弥陀寺の主要伽藍であり、後に現在の本堂のある尾根筋へと伽藍を移していったと考えられる。念仏堂とそこに至る参道より東側にも、今回の調査地を含めて、複数の平坦地や石垣の跡が存在しており、これらが僧坊等の施設の跡に相当する可能性がある。

阿弥陀寺では、防府市教育委員会を調査主体として、過去に3次の発掘調査が実施されている。

1983（昭和58）年度の第1次調査は、「牟礼北老人憩いの家」建設に伴い、仁王門東方の緩斜面に拓かれた約200㎡の平坦地を対象として実施された。調査の結果、方形壇状石囲遺構5基をはじめ、掘立柱建物1棟、掘立柱塼等を検出したほか、土師器杯・皿、瓦質土器の足鍋・播鉢・焙烙や香炉・

風炉・火鉢、中国産陶磁器、朝鮮王朝陶磁、備前系大甕、平瓦・丸瓦・雁振瓦等が出土した。遺構面を焼土や炭化物が覆い、焼けた壁土と考えられる土塊が出土したことなどから、中世後半期に火災で焼失した施設と考えられている。

2000（平成12）年度の第2次調査は、国指定重要民俗文化財「阿弥陀寺の湯屋」の解体修理に伴い、切石風呂屋形の創建時期及び建替えを確認する目的で実施された。その結果、切石風呂屋形と現存する覆屋（2000年時点）に先行する覆屋が、ともに延宝年間（1673～1681年）に再興されたものであること、先行覆屋から現存覆屋への建替えが1841（天保12）年から1880（明治13）年までの間に行われたことが明らかとなった。そして、先行覆屋から現存覆屋への建替えの間に、蒸気浴から取り湯形式へと入浴様式が変化した可能性も指摘されている。

2005（平成17）年度の第3次調査は、1993（平成5）年の土石流災害による旧収蔵庫の劣化を受け、収蔵庫を新築するのに伴い、開山堂（旧御影堂）の約30m南にある平坦地及びその南石垣を対象として実施された。調査の結果、南石垣と石垣造成に伴う整地土や、南石垣の南側に狭い平坦面及び石積みが検出されたほか、整地土から棧瓦が普遍に出土しており、開山堂正面の南側平坦地が近世後半期以降に造成・拡張されたことが明らかとなった。

今回の調査地は、念仏堂や鐘楼のある一画を含む尾根筋から、小谷を挟んでさらに東側の尾根筋に位置しており、防府市教育委員会による第1次調査地と同じ尾根筋のさらに高所に当たる。このことから、阿弥陀寺創建当初の主要伽藍の一部や、僧坊跡等の施設が存在する可能性がある。

主要参考文献

防府市教育委員会 1979『阿彌陀寺文書』防府史料第28集

防府市教育委員会 2012『周防阿弥陀寺発掘調査報告書』

防府市史編纂委員会編 1994『防府市史』資料Ⅰ、自然・民俗・地名、防府市

防府市史編纂委員会編 2004『防府市史』資料Ⅱ、考古資料・文化財編、防府市

防府市史編纂委員会編 2004『防府市史』通史Ⅰ、原始・古代・中世、防府市

山口県文書館編 1983『防長寺社由来』第3巻

山口県文書館編 1964『防長風土注進案』第9巻・三田尻宰判 上、山口県立山口図書館

Ⅲ 調査の成果

1 概要（第5・6図、第3表）

今回の調査地は、大平山（標高 631 m）の西側斜面にあり、侵食谷によって両側を削られた標高 121 ~ 135 m の尾根上に位置する。

調査の結果、斜面を造成して平坦にした整地面と、斜面下方から整地面に至る石段 1、石段 1 の両側に石垣を確認した。石段 1 を上った整地面の入口には、門（礎石）があり、整地面の奥には、基壇をもつ礎石建物 1 棟を確認した。さらに、建物奥の斜面には、上方に向かう石段 2 を確認した。

調査にあたっては、調査地を大きく 3 つに区分して実施した。すなわち、造成された整地面を中段とし、整地面に至る石段 1 の下側の緩斜面地を下段、整地面奥の急斜面より上側の緩斜面地を上段とした。さらに中段では、基壇以北を中段北、基壇より南側を中段南と呼ぶこととした。調査地のうち、遺構を確認できたのは、下段の石段部分を除けば、ほぼ中段に限られる。

中段では、整地面の東西範囲を確認するため、トレンチ 1 ~ 3 を設定したほか、造成方法や石垣の構築方法等を確認するため、トレンチ 4 ~ 6 を設定し、土層 D で断面を観察した。さらに、基壇及び礎石の構築方法等を確認するため、基壇上にトレンチ 7 を設定し、土層 E ~ J で断面を確認した。

なお、調査段階と報告書作成段階で、便宜的に遺構名及びトレンチ名を変更したものがあるので、第 3 表に遺構名・トレンチ名等の新旧対照表を掲載しておく。

2 基本層序と中段造成土

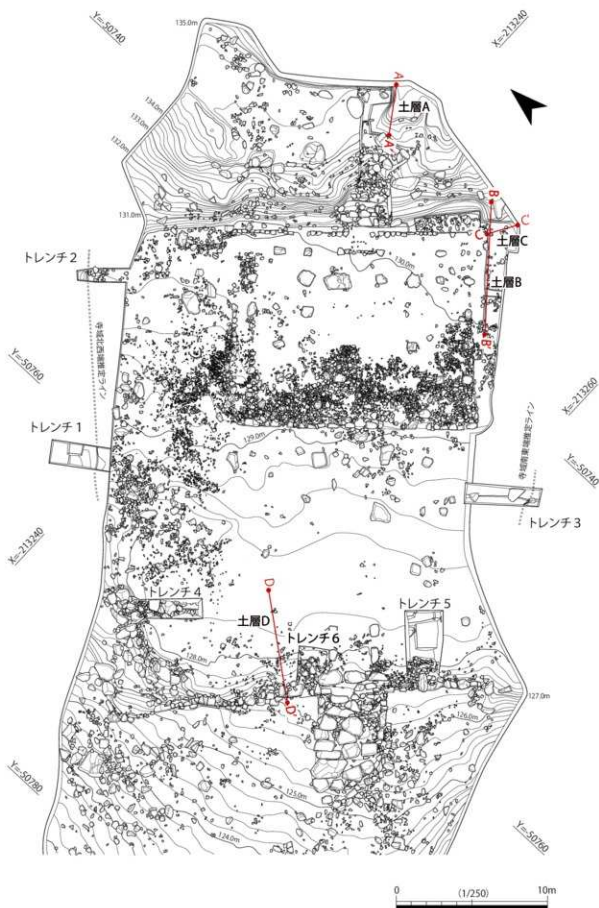
(1) 基本層序（第 7 図、図版 3）

調査地の土層は、上段南東壁（土層 A）と中段北・南東壁（土層 B）及び中段北東隅（土層 C）において、表層から遺構検出面及び基盤層に至る堆積状況を観察した。加えて、中段のトレンチ 1 ~ 3 でも、土層堆積状況を確認できた。

上段南東壁の土層観察から、表土下には、花崗岩の風化による黄褐色系砂質土からなる土石流（2 層）が厚く堆積し、表面は斜面を形成していた。2 層は分層できないことから、1 回の土石流により

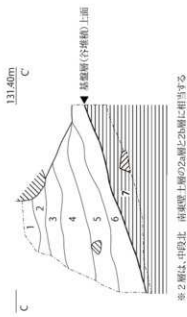
第 3 表 遺構名・トレンチ名等新旧対照表

新	旧	新	旧
石段 1	石段、下～中段間石段	トレンチ 7	トレンチ 12
石段 2	中～上段間石段	土層 A	上段南東壁土層
方形石組	SX01	土層 B	中段北 南東壁土層
火葬遺構	SX02	土層 C	中段北 北東隅土層
礎石 8・9（据付状況）	トレンチ 1	土層 D	トレンチ 15（南東壁土層）
礎石 9・10（据付状況）	トレンチ 20	土層 E	ベルト 3、トレンチ 11（北東壁土層）
礎石 6（据付状況）	トレンチ 19	土層 F	トレンチ 3（南東壁土層）
トレンチ 1	トレンチ 9	土層 G	ベルト 1
トレンチ 2	トレンチ 10	土層 H	ベルト 4
トレンチ 3	トレンチ 14	土層 I	ベルト 5、トレンチ 13（南西壁土層）
トレンチ 4	トレンチ 17	土層 J	トレンチ 18（南東壁土層）
トレンチ 5	トレンチ 16	抹消	池状遺構、トレンチ 4～8、ベルト 2
トレンチ 6	トレンチ 20		



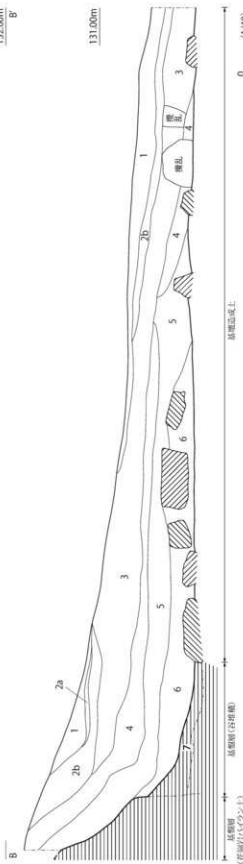
第6図 土層確認位置及びトレンチ設定図

中段北東壁土層(土層C)



※2層は、中段北 南東壁土層の2層と2層に相当する

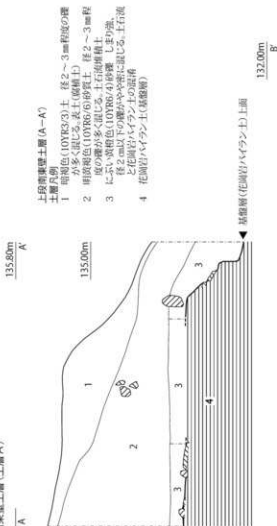
中段北 南東壁土層(土層B)



中段北 南東壁(B・B')及び中段北東壁(C・C')土層断面

- 土層凡例
- 1 切戻褐色(10YR7/6)砂粘土 径2~5mmの礫が多く混じる。土石流堆積土(6回H)
 - 2a 灰褐色(10YR7/2)粘土 径1mm以下の礫が少しく混じる。土石流堆積土(2回H)
 - 2b 灰褐色(10YR7/2)粘土 径1mm以下の礫が少しく混じる。土石流堆積土(2回H)
 - 3 灰褐色(10YR8/6)粘土 径2~5mmの礫が少しく混じる。土石流堆積土(4回H)
 - 4 褐色(7.5YR6/6)粘土 径1mm以下の礫が少しく混じる。佐野地盤片出土。土石流堆積土(3回H)
 - 5 灰褐色(10YR8/8)粘土 径1mm以下の礫が多く混じる。土石流堆積土(4回H)
 - 6 灰褐色(10YR8/8)粘土 径1mm以下の礫が多く混じる。土石流堆積土(4回H)
 - 7 灰褐色(10YR8/8)粘土 径5~30mmの礫が多く混じる。基礎層土と類似する

上段南東壁土層(土層A)

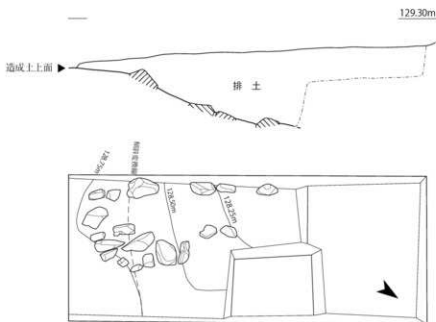


上段南東壁土層(A-A')

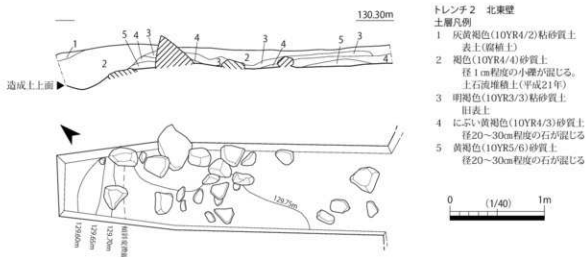
- 1 暗褐色(10YR3/3)土 径2~3mm程度の礫が多く混じる。表土(腐植土)
- 2 相対褐色(10YR6/6)砂質土 径2~3mm程度の礫が多く混じる。土石流堆積土
- 3 灰褐色(10YR8/4)砂礫 しまり強。径2mm以下の礫がやや密に混じる。土石流と花崗岩パイラン土の混雑
- 4 花崗岩パイラン土(腐植層)

第7図 調査地上段・中段土層断面図

トレンチ1 平面図・南西壁土層断面図



トレンチ2 平面図・北東壁土層断面図

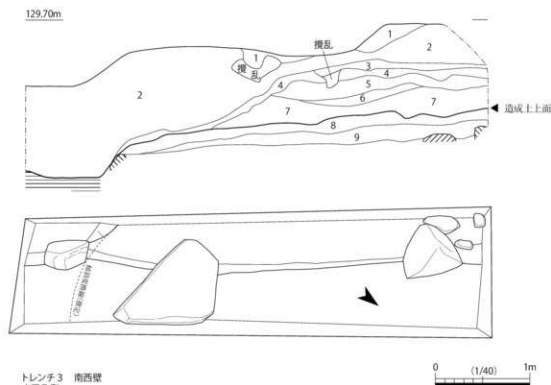


第8図 トレンチ1・2平面図・土層断面図

堆積したものと推定する。基盤層はいわゆる花崗岩パイラン土（4層）であり、2層と4層との間の3層は、両層の混淆層である。3層及び4層の表面は緩やかな傾斜から南西部分で急傾斜に変わることから、尾根の先端に相当すると考える。

中段北・南東壁及び北東隅の土層観察から、遺構面（基壇）の上層に、黄褐色～黄橙色系の花崗岩風化土からなる土石流堆積土が6層堆積することから、遺構形成後、少なくとも6回にわたる土石流の堆積があったことが確認できる。このうち、1層（6回目）は、平成21年の土石流による堆積土であり、4層（3回目）中からは、江戸時代後期に比定される土師器（佐野焼）の裏片が出土したことから、その頃の堆積土と推定する。近世末以降、4回以上の土石流堆積がみられることから、本調査地では、およそ40年に1度のペースで土石流堆積が起こったと考える。7層は、粗砂の多い壤

トレンチ3平面図・南西壁土層断面図



トレンチ3 南西壁

土層凡例

- 1 褐色(10YR4/4)砂質土 表土(腐植土)
- 2 黄褐色(10YR5/6)砂質土 径10cm大の花崗岩及び片岩礫を少し含む。上石流堆積土(平成21年)
- 3 褐色(10YR4/4)砂質土 旧表土(腐植土)
- 4 オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土 上石流堆積土
- 5 黄褐色(10YR5/6)砂質土 上石流堆積土
- 6 明黄褐色(10YR6/6)粘砂質土
- 7 黄褐色(10YR5/8)砂質土 しまり岩、径5mm大の花崗岩粒が多く混じる。上石流堆積土
- 8 オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土 径5～10cm大の片岩、花崗岩礫が混じる。中段造成土
- 9 黄褐色(10YR5/6)砂質土 径10～30cm大の片岩礫が混じる。中段造成土

第9図 トレンチ3平面図・土層断面図

質砂土で、大小の礫が多く混じる。北東隅の土層観察から、調査地東側にある谷部からの緩やかな地形的傾斜を伴う自然堆積とみられる。この7層は、基壇造成土と同質である。

以上のように、調査地の土層堆積状況から、基本層序は次のように整理できる。

I層：表土、II層：土石流堆積土、III層：灰黄褐色壤質砂土（礫混じり）、IV層：基盤層（花崗岩パイラン土）

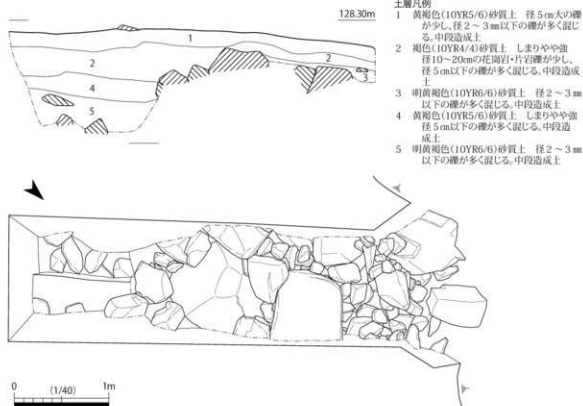
（2）中段造成土（第8～14図、図版3・4）

平坦面の範囲 平坦面（整地面）及び中段造成土の範囲を確認するため、中段の北西側でトレンチ1・2、南東側でトレンチ3を設定した。

トレンチ1における造成土の状況を見ると、トレンチ南東隅から約0.8m北西側の位置まで、標高128.75m付近の平坦面が続いており、そこからトレンチ北西隅側（谷側）に向かって約20°の傾斜面となる。この平坦面が造成土上面（整地面）であり、傾斜変換線をもって寺域の北西端と考える。

トレンチ2では、造成土の上層に土石流堆積土である4・5層と旧表土（3層）があり、その上

トレンチ4平面図・南西壁土層断面図



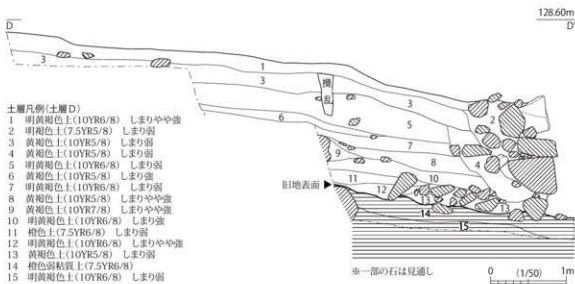
第10図 トレンチ4平面図・土層断面図

に平成21年の土石流堆積土（2層）が堆積し、トレンチの北西隅付近（谷側）では3～5層を押し流している。造成土上面は、標高129.70～129.75m付近の平坦面（整地面）となるが、トレンチ北西隅より約0.6m南東側の位置に傾斜変換線があり、そこから北西側に向かって、地形的に急傾斜となることから、この位置が寺域の北西端と考える。整地面は、トレンチ2よりトレンチ1の方が、標高が1m程度低いことから、基壇奥側から基壇正面側に向かって、約5°の傾斜で緩やかに下ることがわかる。

トレンチ3では、8・9層が造成土であり、その上層に土石流堆積土である4～7層と旧表土（3層）があり、さらに平成21年の土石流堆積土（2層）が堆積する。4層は5～7層を南東側（谷側）で押し流して堆積する。2層は、4層を南東側（谷側）で押し流して堆積した可能性があり、厚さが最大で約1mにもなる。造成土上面（8層上面）は、標高が128.4～128.7mのほぼ平坦面（整地面）となり、トレンチ南東隅から約1.0mの位置で段落ちがみられ、その南東側は谷堆積となる。この段の位置が寺域の南東端と考える。そして、整地面の標高は、トレンチ1で確認した整地面の標高とほとんど同じである。

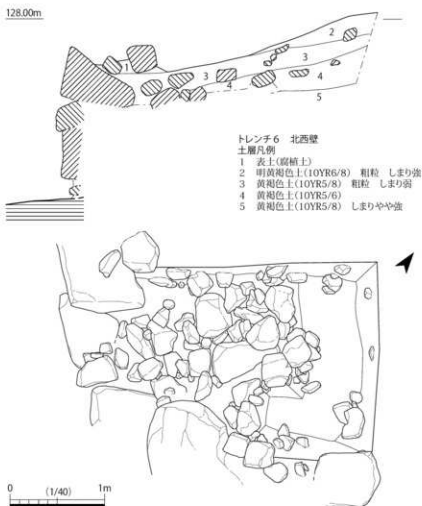
造成土の築造状況 中段造成土の築造状況を確認するため、中段西隅付近にトレンチ4、石段1の東側と西側の石垣にほぼ直交する形で、それぞれトレンチ5とトレンチ6を設定した。トレンチ6のすぐ西側には、石垣を断ち切る土層Dを設定し、土層断面の観察を行った。

中段造成土及び石垣(土層D)



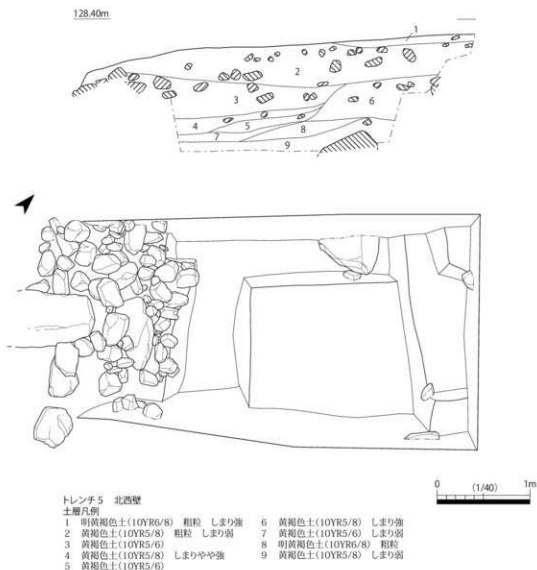
第11図 中段造成土土層及び石垣断面図

トレンチ6平面図・北西壁土層断面図



第12図 トレンチ6平面図・土層断面図

トレンチ 5 平面図・北西壁土層断面図



第 13 図 トレンチ 5 平面図・土層断面図

トレンチ 4 では、直径が 1 m を超える大石を含む大小の石が積まれており、とくにトレンチの北西側半分で高く積まれていた。その上に 1 ～ 5 層までの造成土を盛るが、4 ・ 5 層はトレンチ南東隅付近で、石積みの上位レベル付近まで埋められており、その上から 2 層を盛って石積みの表面を覆っていた。最上層の 1 層上面が遺構面及び整地面で、表面を整地し、平坦面をつくっていた。これらの造成土は、いずれも土石流堆積土を由来とする黄褐色系砂質土を主体とし、2 ・ 4 層でしまりがやや強い。各層は厚さが 20 ～ 30 cm の水平的な堆積で、2 層には、直径が 10 ～ 20 cm 程度の石が多く混じっている。この石積みは、中段造成に伴う造成土の土留めであったと考える。

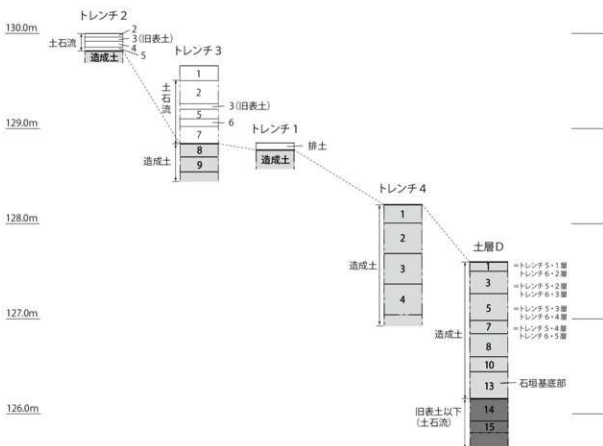
中段造成土及び石垣の断面（土層 D）から、花崗岩バイラン土の基盤層の上に形成された旧地表面の上に、各層の厚さが 10 ～ 40 cm 程度の造成土を水平的に積み上げ、中段の平坦面（整地面）をつくることを確認した。旧地表面から中段平坦面までの高さは 1.5 ～ 1.6 m 程度である。いずれも土石流堆積土を由来とする黄褐色系または橙色系の砂質土であるが、14 層は粘質土である。13 層には石

が密に混じることから裏積みの基底部分とみられるほか、14層中から石垣の構築が始まることから、14層の上面が旧地表面であったと考えられる。なお、この旧地表面は、基盤層の上に土石流堆積土が自然堆積し形成されたと推定する。また、12層及び13層から5層までを水平的に造成した後、5～10層の南端を壊して4層が堆積し、その上に3層を造成した後、その南端を壊して2層が堆積する。これは石垣の構築と関わりと考える。1層上面は、石垣付近での標高が127.5m付近であることから、中段平坦面は基壇の南側付近から4～5°の傾きで緩やかに傾斜することがわかる。

トレンチ5では、南西隅から約1.2mの範囲で石垣の裏積みを確認できた。裏積みは、直径20～30cm程度を主体とする石を、標高約127.8mの高さまで積み上げていた。中段の造成は、この裏積み及び石垣を土留めとして行われている。造成土はいずれも土石流堆積土由来の黄褐色系砂質土で、2層に直径20cm以下の石が多く混じる。7～9層までは、水平的に積み上げるが、その上の6層は、トレンチ北東側で厚く盛られ、しまりが強いことから、6層を造成した後、裏積みとの間の3～5層を水平的に埋めて充填したと考える。その上の2層及び1層は整地土で、裏積み上面を覆っていた。

トレンチ6では、石垣の裏積み上面の標高は約127.4mであり、石垣最下段及び旧表土の標高は約126.1mである。2～5層は、それぞれトレンチ5の1～4層と対応する造成土である。

以上、土層を観察した結果、中段造成状況について模式化したのが第14図である。



第14図 中段造成状況模式図

3 遺 構

(1) 石段1 (第15・16図、図版5～9)

下段から中段整地面への昇降施設として築かれる。全部で9段が確認できるが、現存する最下段の石より下方の石や、石段上方東側の石は一部流失したと推定する。踏石の大きさは、最小で踏面の幅が0.4 m、奥行きが0.3 m、厚さが0.2 m程度、最大で踏面の幅が2.5 m、奥行きが1.3 m、厚さが0.4 m程度であり、不均等な大きさの花崗岩及び泥質片岩の未加工自然石を各段数個ずつ並べて築かれる乱石積の石段である。現存最下段から最上段までの残存平面長は約8.0 m、最大幅が約4.7 mを測り、石段の始まる旧地表面から最上段の石の上面までの比高差は約2.6 mである。各段の蹴上げは10～20cm程度であり、石の大きさに対して蹴上げは低い。最上段を除くほとんどの石の踏面は水平ではなく、1～2°程度下方に傾斜し、最上段から最下段にかけての勾配は15°となる。主軸方向は、N-48°-Eであり、基壇の主軸方向と一致する。

石段の構築は、旧地表面上に直接踏石を置くか、直径が数十cm程度の石を並べて、高さを調節し、その上に踏石を置く。5段目以上の側面は、角石1～2個を耳石状に用いて、外側が水平面となるようにした上で、その間に直径が数十cm程度の石を並べる。石垣とは組み合っていないが、石垣に対してほぼ直角となるように取り付けられており、石段の西側では石垣→石段の順で、東側では石段→石垣の順で築かれることから、両者が一連の作業で構築されたと考えられる。

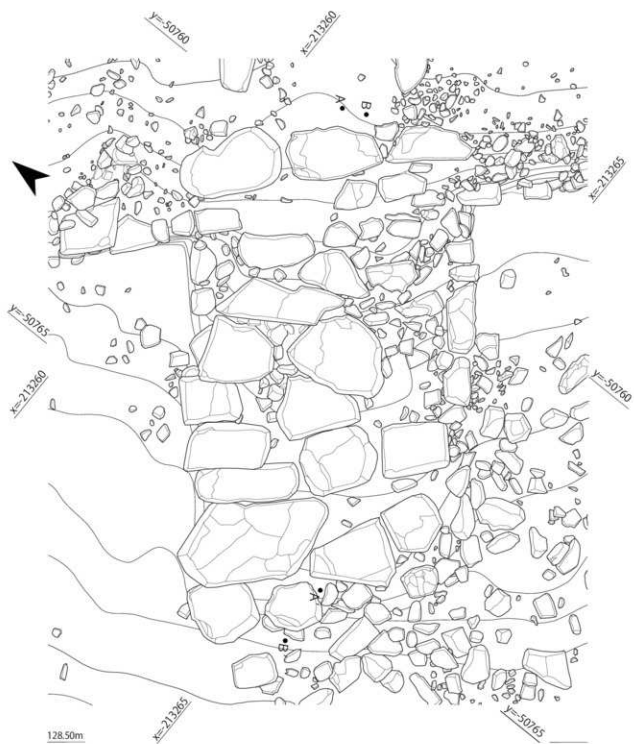
(2) 石垣 (第17・18図、図版5～7・10～14)

中段南西側を限る遺構であり、中央東寄りに石段1が取り付け付く。尾根筋が東寄りとなる自然の尾根を横断するかたちで構築されるため、中段平坦面に対応して、石垣の高さは、西が高く東が低い構造となる。基本的に、壁体上部は崩落しており、残存部分も土圧により上位がせり出す状況がみられる。遺存状況のよい部分で判断すれば、本来は垂直に近い壁面であったとみられる。石垣の規模は、石段の東側で確認できる長さが6.2 m、高さが最大1.3 mで、石段の西側での長さが14.0 m、高さが最大2.0 mとなる。石段を含めた総延長は現状で24.9 mとなり、西側隅角部は約3 mの高さに復元できる。東側隅角部は流失する。石垣の西端は崩落し、その構築状況は不明であるが、本来石垣の西側部分は、北東側へ10 m程度連続していたと考えられる。使用石材は、泥質片岩及び花崗岩の未加工自然石であり、量的には前者が多数を占める。石材の大きさには統一性はなく、幅が1.6 m、高さが0.5 mのものから人頭大のものまでが混在する。必ずしも大型の石を最下段に据えておらず、壁体に縦の目通しが散見するなど、石積み技術は未発達な段階にあると判断される。

土層Dの断面観察により、構築に先立つ地盤を行わず、旧地表面に直に石を積み上げていること、排水機能をもつ渠石は用いないこと、裏込めには人頭大程度の角礫を入れること、一部に鰐鯨石の使用が認められることなどが判明した。

(3) 門 (第19図、図版15・16)

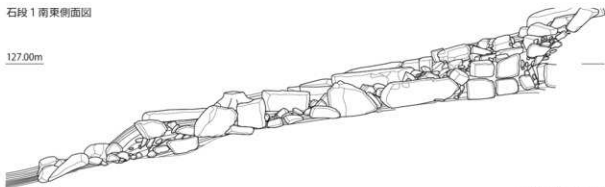
石段1の最上段の踏石列より、約50～60cm北東側に平行して石2個が並び(前列)、さらに北東



第15図 石段1平面図・立面(正面)図

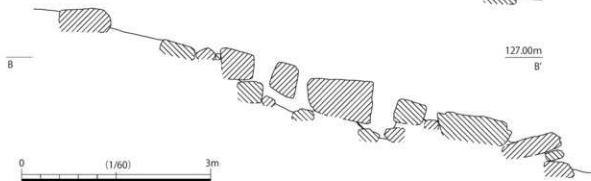
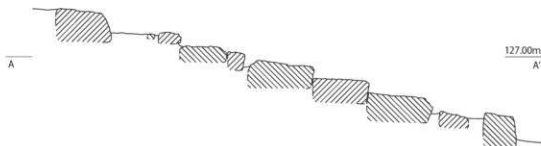
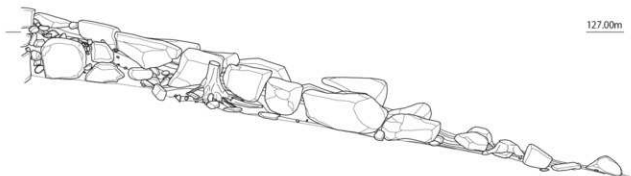
石段 1 南東側面図

127.00m



石段 1 北西側面図

127.00m



0 (1/60) 3m

第 16 図 石段 1 立面（側面）図・断面図

側にも平行して石 2 個が並ぶことから（後列）、桁行 1 間、梁行 1 間の礎石と考えられる。柱間寸法は、桁行が 2.70 m、梁行が 1.52 m を測る。主軸方向は $N-48^{\circ}-E$ で、基壇の主軸方向と一致する。

礎石の規模（最大長×最大幅）は、前列北西側から南東側の順に $76 \times 68\text{cm}$ 、 $112 \times 54\text{cm}$ 、後列北西側から南東側の順に $86 \times 52\text{cm}$ 、 $84 \times 65\text{cm}$ を測り、いずれも平面が桁方向に長い長方形となる。礎石上面のレベルは、いずれも 128.15 m 程度でありほぼ一定の高さとなるが、前列の礎石の方

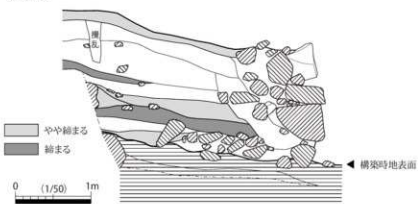


第 17 図 石段 1 及び石垣平面図・立面図

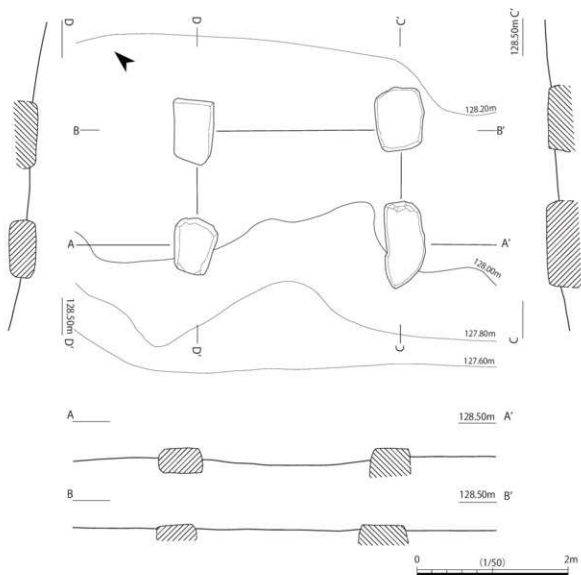
が中段整地面からの露出が多い。

礎石の配置から、門の形式は、前列を親柱、後列を控柱とする薬医門であったと推定する。なお、親柱の両側に築地塀や板塀等の痕跡は確認できなかった。

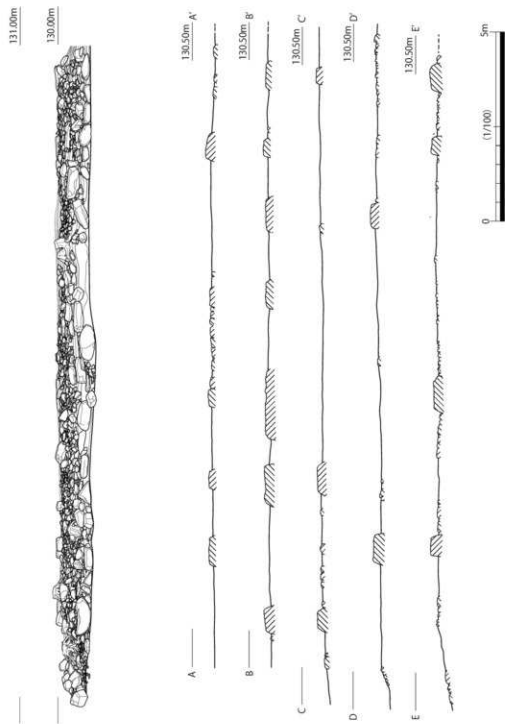
石垣構築状況
(土層D)



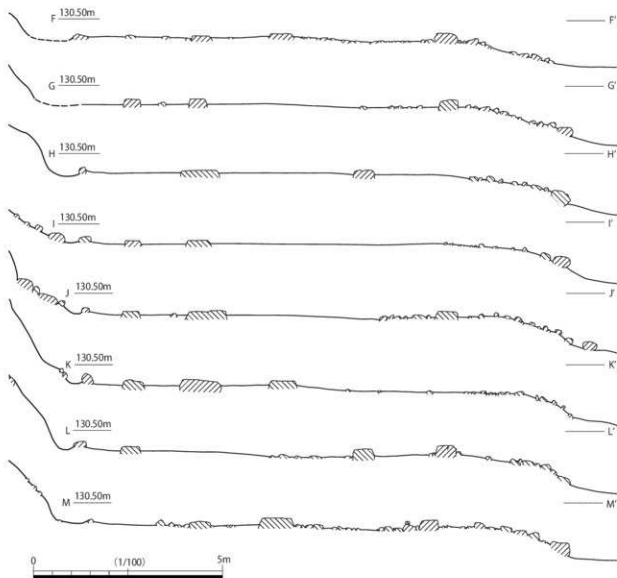
第18図 石垣構築状況模式図



第19図 門礎石平面図・断面図



第 21 図 基壇をもつ礎石建物立面図・礎石断面図



第 22 図 基壇をもつ礎石建物礎石断面図

(4) 基壇 (第 20～25 図、図版 17～22)

基壇は、平面プランが北西－南東方向に長い長方形を呈する。基壇の範囲は、正面に石積み、背面と北西側に 1 列の石列を築いて周囲と区画する。南東側にも石列 1 列が存在したと推定するが、ほとんどが流失する。正面の石積みの最下段は、長方形の角石を主体とする地覆石を長軸方向に一列に並べる。基壇の正面と北西、南東側の 3 面は、後述する礎石建物の礎石設置面（基壇上面）と周辺地形との間に高低差を設けるが、北西、南東側は背面に向かうにつれ高低差が小さくなる。基壇上面と中段整地面（基壇下面）との高低差は、基壇正面側で最大約 80cm である。基壇の規模は、基壇上面で長軸が 14.9 m、短軸が 10.5 m で、基壇下面で長軸が 16.7 m、短軸が 13.0 m を測り、主軸（短軸）方向は、 $N-48^{\circ}-E$ である。

基壇の構築方法を確認するため、トレンチ 7 のほか、土層 E～J において、土層を観察した。

トレンチ 7 では、基壇上面中央付近から基壇正面及び中段整地面にかけての造成状況を確認した。5 層を確認したうち、1～4 層は基壇造成土であり、5 層は調査地東側谷部からの谷堆積由来の基盤



第23図 基壇及びその周辺トレンチ設定図

層である。この谷堆積は本来の自然堆積とみるが、部分的には、堆積層を人為的に移動させてきた可能性もある。基盤層（5層）は、基壇正面側に向かって緩やかに傾斜しており、その上に造成を行うことで基壇上面の平坦面をつくることから、造成土の厚さは、基壇背面側で20cm程度、正面側で40～50cm程度と正面側が厚くなる。造成土である4層は、径5cm大の礫が混じる黄褐色系砂質土である。2層では、径30cm以上の礫を積み上げて土留めとした上に、基壇正面の石積みをつくる。基壇上面は、4層の低い部分に1層を補って平坦に整える。

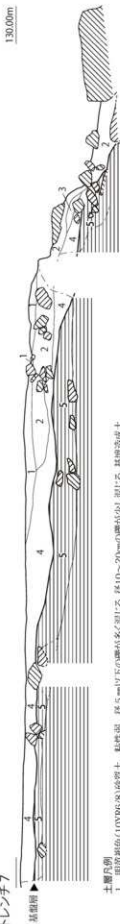
土層Eでは、基壇北西側石列付近から中段整地面にかけたの造成状況を確認した。8層を確認したうち、1・2層は基壇造成土、3～5層は中段造成土、6～8層は谷堆積由来の基盤層である。基盤層の上に、褐色または黄褐色系の砂質土を盛って、中段を造成した上で、さらに基壇を造成する。土層Eの3層に相当する層は、トレンチ7では確認できないことから、中段の造成は基壇中央より北西半分を中心に行われたと推定する。これは、谷堆積由来の基盤層が、調査地東側から基壇正面側及び北西側にかけて傾斜するためと考えられる。

土層Fでは、基壇上面の南東寄りにおける造成状況を確認した。谷堆積由来の基盤層の上に、礫混じりの黄褐色砂質土（1層）を30cm程度盛って、基壇を造成する。

土層I・Hでは、いずれも基壇南東辺付近の造成状況を確認した。土層Iでは、谷堆積由来の基盤層（4層以下）の上に、基壇造成土（3層）を約20cm盛って、造成することを確認した。基盤層は、基壇の東側から緩やかに傾斜する。基壇造成土と基盤層の段差を埋めて土石流（1・2層）が堆積する。土層Hでも、基壇造成土（1層）と基盤層（3層）との段差を埋めて土石流（2層）が堆積する。

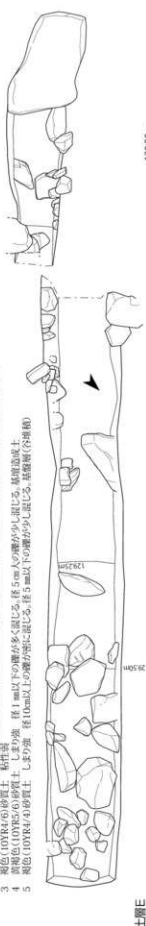
土層Gでは、基壇南西隅から中段整地面にかけたの造成状況を確認した。1層が土石流堆積土、2

トレンチ7

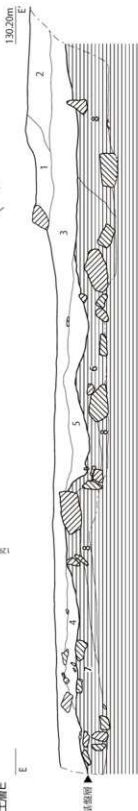


土層凡例

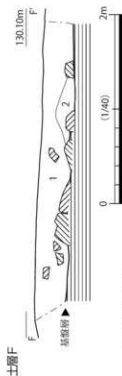
- 1 明灰褐色(10YR6/8)砂質土 粘性弱 径5mm以下の礫が多く混じる。径10～20mmの礫が少し混じる。基壇造成土
- 2 明灰褐色(10YR6/8)砂質土 径30mm以上の礫が密に混じる。径1mm以下の礫が少し混じる。基壇造成土(人中礫は正面図参照)
- 3 褐色(10YR4/6)砂質土 しまり強 径1mm以下の礫が多く混じる。径5mmの礫が少し混じる。基壇造成土
- 4 黄褐色(10YR5/6)砂質土 しまり強 径10mm以上の礫が密に混じる。径5mm以下の礫が少し混じる。基壇造成土(谷埋積)
- 5 褐色(10YR4/4)砂質土 しまり強 径10mm以上の礫が密に混じる。径5mm以下の礫が少し混じる。基壇造成土



土層E



土層F



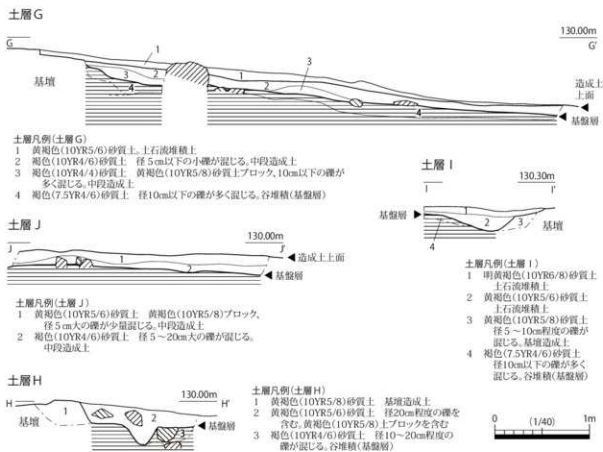
土層凡例(土層F)

- 1 黄褐色(10YR5/6)砂質土 明灰褐色(10YR6/8)ブロック 径5～10mmの礫、径30～70mmの石片が、基壇面が混じる。トレンチ7の4層と対応
- 2 明褐色(7.5YR5/8)砂質土 径5～10mmの礫が混じる

土層凡例(土層E)

- 1 明灰褐色(10YR6/6)砂質土 しまり強 径5～10mmの礫が多く混じる。基壇造成土
- 2 黄褐色(10YR5/6)砂質土 しまり強 径5～10mmの礫が多く混じる。基壇造成土
- 3 褐色(10YR4/6)砂質土 しまりやや強 径2～3mm以下の礫が多く混じる。径10mm以下の礫が少し混じる。基壇及び中段造成土
- 4 黄褐色(10YR5/6)砂質土 しまり弱 径2～3mm以下の礫、径5mmの礫が少し混じる。中段造成土。5層と同一層か
- 5 黄褐色(10YR5/6)砂質土 しまり弱 径5～10mmの礫が少し混じる。中段造成土。6層と同一層か
- 6 黄褐色(10YR5/6)砂質土 しまりやや強 径2～3mm以下の礫が少し混じる。径20～30mm以上の礫が多く混じる。谷埋積(基壇層)
- 7 黄褐色(10YR4/3)砂質土 しまりやや強 径5～30mm以下の礫が密に混じる。6層と同質の谷性堆積(基壇層)
- 8 赤褐色(5YR4/6)砂質土 しまり強 径2～3mm以下の礫が少し混じる。径20～30mm以上の礫が多く混じる。谷埋積(基壇層)

第24図 基壇及びその周辺土層断面図(1)



第 25 図 基壇及びその周辺土層断面図(2)

～3 層が中段及び基壇造成土である。基壇南西隅付近では、基壇北西辺の石列の内外で、同様な堆積状況が認められることから、中段から基壇の造成が一連の作業で行われたと考える。

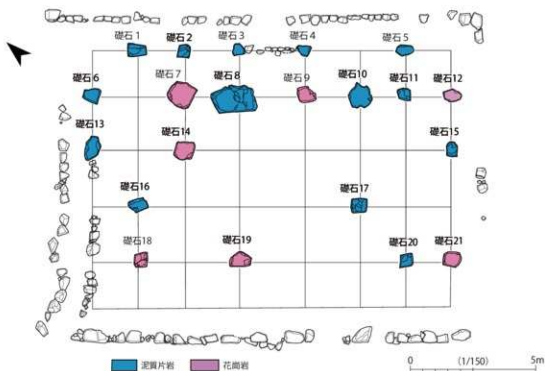
土層 J では、基壇北西隅付近における中段造成土の造成状況を確認した。基盤層から約 20cm 造成して、中段の整地面をつくる。

(5) 礎石建物(第 20～22・26～28 図、第 4 表、図版 17・23～26、)

当初、残存する 21 個の礎石から 7 間×4 間の建物を想定したが、京都大学の山岸常人教授の指導により桁行 7 間、梁行 5 間の建物として紹介する(V 総括 1 を参照)。

建物の棟方向は、北西—南東(N—42°—W)であり、東西及び南北を志向しない。柱間寸法は、桁行で西から 1.8 m (6 尺)、1.9 m (6 尺)、2.2 m (7 尺)、2.7 m (8.5 尺)、2.2 m (7 尺)、1.8 m (6 尺)、1.8 m (6 尺)、梁行で北から 1.9 m (6 尺)、2.1 m (7 尺)、2.2 m (7 尺)、2.3 m (7.5 尺)、1.8 m (6 尺)と推定する。建物規模は、桁行が 14.3 m (46.5 尺)、梁行が 10.3 m (33.5 尺)、面積が約 150㎡である。なお、1 尺は 31cm と推定する。

想定される 48 個の礎石のうち 21 個の礎石が残存するが、欠失部分において礎石抜き取り痕及び根石は確認できない。礎石は周囲ないし下部に礫を配して据え付けた後、基壇造成土で周囲を埋めており、基壇上面から 15～20cm の標高差をもって露出する。この据付方法により、各礎石とも掘方を伴わない。いずれの礎石も柱痕跡や柱据付けに関わる加工痕は確認できず、被熱痕跡も認められな



第 26 図 礎石配置図

第 4 表 礎石一覧表

番号	法量 (cm)			中央部 標高 (m)	石材	備考	番号	法量 (cm)			中央部 標高 (m)	石材	備考
	長軸 (長辺)	短軸 (短辺)	最大厚					長軸 (長辺)	短軸 (短辺)	最大厚			
1	78	56	—	130.06	泥質片岩		12	77	55	—	130.08	花崗岩	
2	56	50	推定 35	130.06	泥質片岩		13	103	64	—	130.05	泥質片岩	
3	50	48	—	130.04	泥質片岩		14	78	77	—	130.06	花崗岩	
4	50	47	—	130.05	泥質片岩		15	62	45	—	130.09	泥質片岩	
5	73	47	—	130.11	泥質片岩		16	75	53	—	130.05	泥質片岩	
6	65	62	33	130.05	泥質片岩		17	64	60	—	130.05	泥質片岩	
7	105	100	推定 50	130.04	花崗岩		18	62	54	—	130.04	花崗岩	割れる
8	175	133	65	130.05	泥質片岩		19	84	62	—	130.01	花崗岩	
9	72	67	55	130.06	花崗岩		20	55	53	—	130.06	泥質片岩	
10	105	90	推定 40	130.07	泥質片岩		21	73	63	—	130.08	花崗岩	
11	55	51	—	130.11	泥質片岩								

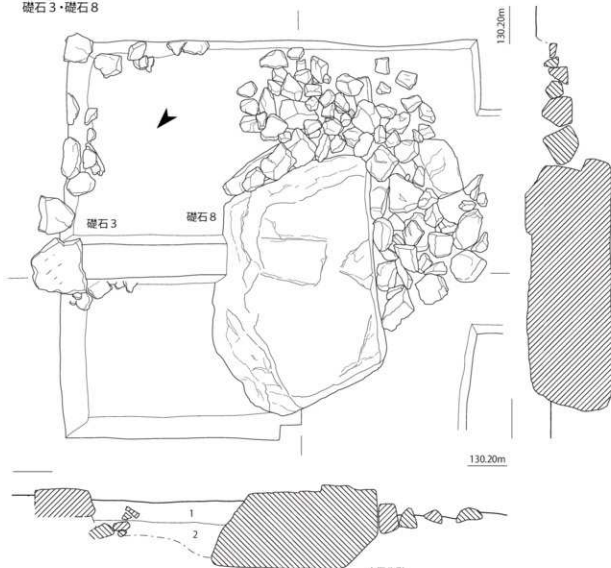
い。礎石上面中央部における標高の平均値は 130.06 m であり、21 個中 15 個の礎石が平均値の上下 2 cm の範囲に収まる。なお、標高の最大差は 6.4 cm である。

以下、残存する礎石に個別の番号を付けて呼び分ける（第 26 図。礎石 1～礎石 21）。

礎石には未加工の泥質片岩及び花崗岩の自然石が混用され、前者が 14 個（礎石 1～6・8・10・11・13・15～17・20）、後者が 7 個（礎石 7・9・12・14・18・19・21）であり、両石材とも、遺跡の立地する山体や付近の渓谷から産出する。厚い板状の石材として産する泥質片岩は、上面の水平確保は比較的容易であるが、花崗岩は通常不整形の石材であるため、その石材の最大となる平坦面を礎石上面として設置し、下部の詰め石で調整することで上面の水平化を図っている。

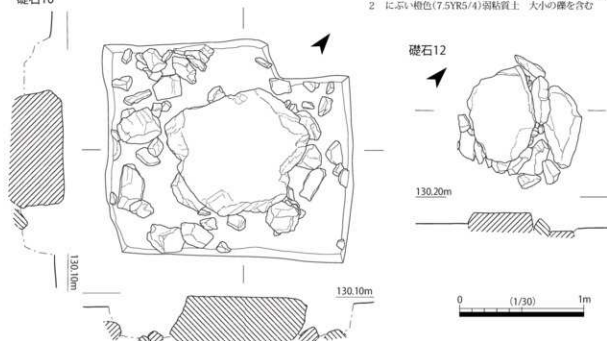
また、桁行の中央間に当たる礎石 3 と礎石 4 の間には、最大長が 20～30 cm 程度の角礫が柱筋に沿っ

礎石3・礎石8



土層凡例
 1 橙色(7.5YR6/6)弱粘質土 径5~10cm程度の礫を含む
 2 にふい・橙色(7.5YR5/4)弱粘質土 大小の礫を含む

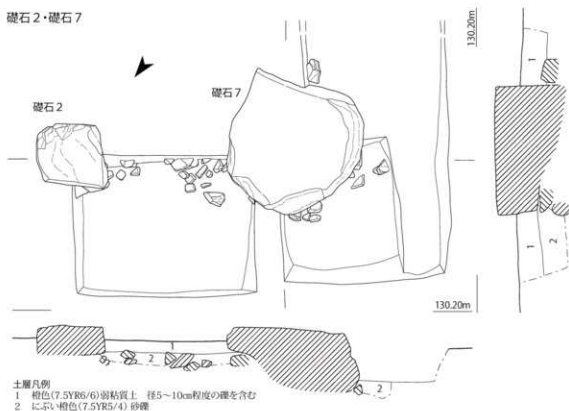
礎石10



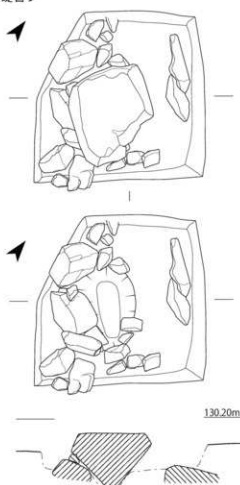
0 (1/30) 1m

第27図 礎石及びその周辺平面図・土層断面図(1)

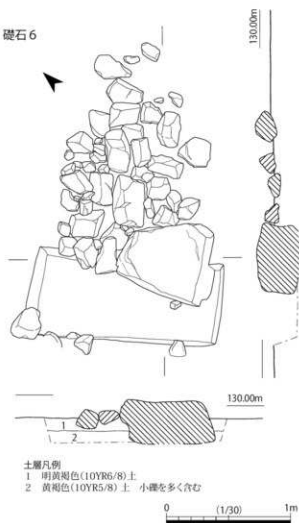
礎石2・礎石7



礎石9



礎石6



第28図 礎石及びその周辺平面図・土層断面図(2)

て並べられてあり、後戸が存在したと推定する。

主な礎石については、第 27・28 図にその据え付け状況を示した。

礎石 8 (第 27 図、図版 25) 最大の礎石であり、上部平坦面は約 1.5m²に及ぶ。最大長が約 1.75 m、最大幅が約 1.33 m、厚さが約 0.65 m の泥質片岩の自然石であり、推定重量は約 3 t である。詰め石をせず、基壇に埋め込むことにより据え付けられる。礎石の東及び南に接して広がる角礫は礎石の据え付けではなく、基壇の地業に関わるものと考えられる。なお、礎石中央付近にみられる溝状の凹部は人為的なものではない。最大の礎石であるため、下部に他の遺構や埋納物を想定したが、調査の結果いずれも存在しないことを確認した。

礎石 7 (第 28 図、図版 24) 礎石 8 に次ぐ大きさの礎石であり、上部平坦面は約 0.7m²である。最大長、最大幅ともに約 1.00 m、最大厚が 0.45 m の花崗岩の自然石を利用する。厚みが不均一であるため、北側では下部に詰め石を行い、礎石上面の水平化を図る。

礎石 9 (第 28 図、図版 26) 底辺の一边が 70cm 前後の角錐状の花崗岩自然石を、尖った部分を下にして据え付ける。沈み込み等を防ぐため、下部の周囲に角礫を埋め込み安定化を図る

礎石 6 (第 28 図、図版 24) 最大長が 76cm、最大幅が 64cm、最大厚が 34cm の泥質片岩の自然石である。礎石下部には詰め石をせず、直接基壇に埋め込んで据え付けている。礎石の北東側に接して角礫が約 1 m²の範囲で広がるが、基壇の北西側辺と対応しており、建物北西側柱筋からの基壇の出と関わる地業と考える。

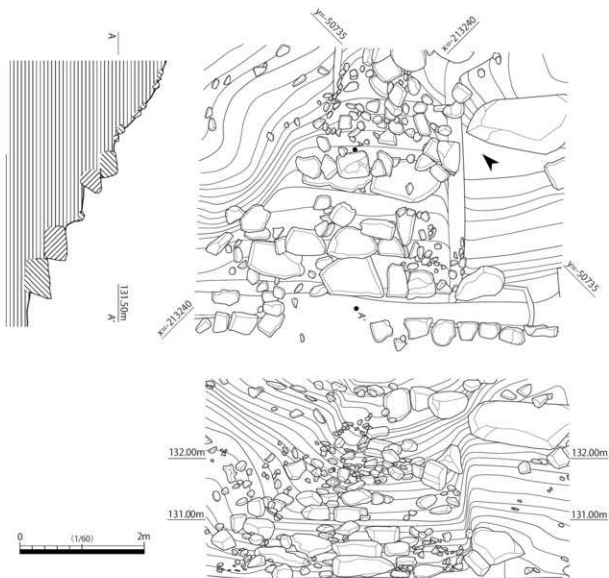
(6) 石段 2 (第 29 図、図版 27)

基壇をもつ礎石建物の背面側、建物桁行の中央間で、後戸が存在したと推定される部分に対応して築かれており、中段から上段方向への昇降施設と考えられる。5 段が確認できるが、最上段より上方は残存せず、花崗岩パイラン土の基盤が露出することから、石段が崩落したのではなく、元々築かれていなかった可能性が高い。

踏石は、最大幅が 30 ～ 110cm の不均等大きさの花崗岩及び泥質片岩の未加工自然石を各段数個ずつ並べて築かれる乱石積の石段であり、最下段中央の踏石では、踏面の幅が 85cm、奥行きが 60cm、厚さが 30cm 程度である。3 段目及び最上段の踏石は、ほとんどが崩落している。最下段から最上段までの残存平面長は約 2.3 m、最大幅が約 3.0 m を測り、基壇上面から最上段の石の上面までの比高差は約 1.4 m である。各段の蹴上げは 15cm 程度である。最上段から最下段にかけての勾配は 28° となり、石段 1 よりも勾配が急である。

(7) 火葬遺構 (第 30・31 図、図版 28 ～ 30)

基壇中央南西寄りの位置に、東西約 2.5 m、南北約 2.2 m の範囲で広がる礫敷きの約 10cm 下層で検出した土坑状の遺構である。この礫敷きは、基壇前面の礫敷きと用材や配石法、構築レベルが近似しており、相接するかたちで基壇造成土上面に広がる。土坑は、礫敷き中心からやや北東に偏した位置にあり、平面形は長楕円形で、規模は長軸が 131cm、短軸が 67cm、深さが最深部で 28cm を測る。主軸方向は N-34°-E で、礎石建物の主軸方向と斜交する。検出面での標高は 129.7 m である。



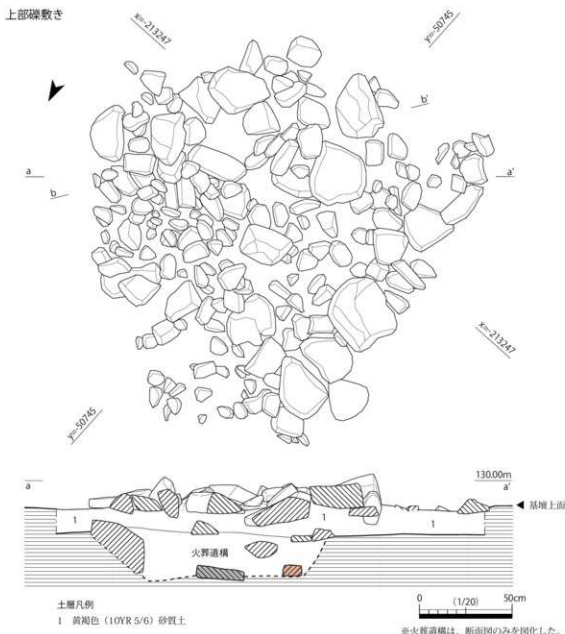
第 29 図 石段 2 平面図・立面図・断面図

礎石建物の床下の位置に当たる。

土坑底面及び壁面には自然石が据えられており、北東側に塊状の石を配するほかは、長さが 15 ～ 30cm、厚さが 5 ～ 25cm の扁平な石が用いられる。底面および壁面の石は内面側が被熱により赤変しており、一部の石では赤変が上面にも及ぶ。使用された石材には、花崗岩と泥質片岩があり、いずれも近辺で採取可能なものである。

土坑埋土は全般に木炭を含んでおり、土師器小片、鉄釘 14 本、骨片、焼土塊、炭化材が出土した。鉄釘は、土坑の南西側で 10 本、北東側で 2 本が出土し、骨片は、南西側に集中して出土した。木炭は 2 層の北東寄りで集中するのに対して、南西隅付近では木炭及び焼土塊が少ない。土坑検出面と埋土中から土師器片が出土したが、小片のため図化していない。

遺構の性格は、土坑埋土に骨片、木炭、鉄釘を含むこと、土坑壁面や石に被熱痕がみられること等からみて、火葬遺構と考える。なお、後述するように、残された骨片は微量であり、ほぼ全身の骨が拾骨されたと推定する。



第 30 図 火葬遺構平面図・見通し断面図 (1)

北東側の石は火葬後に移動されたと考えられ、現状では土坑主軸とのずれが大きい。また、この石に接する土坑北西側壁面が崩れ、赤変もみられない点から、石の移動とともに拾骨が行なわれたと判断する。同様に、土坑南西側壁面が赤変せず、埋土に被熱痕のある石が混入していたことから、この部分でも拾骨に伴う攪乱が想定される。

骨片の鑑定分析の結果、人骨であることは判明したが、多くが長管骨の破片で、頭蓋片や歯牙は全く確認できず、部位の特定も困難であった。そのため、出土人骨の個体数のほか、性別や年齢等についての情報は得られなかった。人骨の表面観察から、被熱温度は 300℃から 600℃前後であったことが推定されているが、これは、野焼きに近い温度といえる。

また、炭化材は最大のもので直径が 10cm 程度であり、それほど大きな熾はみられない。炭化材 3

点の樹種同定の結果、サクラ属が2点とコナラ属アカガシ亜属1点の広葉樹であった。いずれも薪炭材として多く利用され、近辺で入手できるものを使用したことが判明した。これは、人骨の被熱温度が、野焼きと同等の低い温度を示すことも関係する結果であろう。

遺構の年代については、出土土器からの比定はできなかったが、炭化材2点の放射性炭素年代測定(AMS法)の結果、試料No.1が2δ暦年代範囲(95.4%)で1257-1288calAD、試料No.2が1263-1294calADであり、いずれも13世紀中頃～末の暦年代を示していた。このことから、火葬遺構は、基壇が造成された13世紀後葉～14世紀初頭の年代に含まれることがわかった。

この遺構は基壇造成土中にあり、礫敷きによって表面を覆われるほか、礎石建物の内側につくられている。このことから、基壇造成途中に火葬を行った後、礫で覆い隠して建物を築いたか、または建物の廃絶後、火葬を行い、礫で覆い隠した可能性がある。一方で、建物自体が未完成であった可能性もあり、不要となった基壇上で火葬を行ったことも想定される。

(8) 方形石組(第32・33図、図版31～33)

中段の中央付近、基壇北西隅から約2m南西側に位置する石組である。平面形は正方形を呈し、規模は北東-南西、北西-南東両方向ともに148cmを測る。主軸方向は、N-36°-Eで、基壇の主軸方向よりやや北西側にずれる。

石組は、平面形がほぼ正方形の土坑に埋め込まれていた。土坑の規模は、検出面で北東-南西方向が149cm、北西-南東方向が154cm、底面でそれぞれ135cm、137cmを測り、深さは底面最深部で41cmとなる。底面は中央に向かって傾斜しており、中央には平面形が楕円形の小土坑が掘られていた。この小土坑の規模は、長軸が76cm、短軸が61cm、深さが17cmを測る。

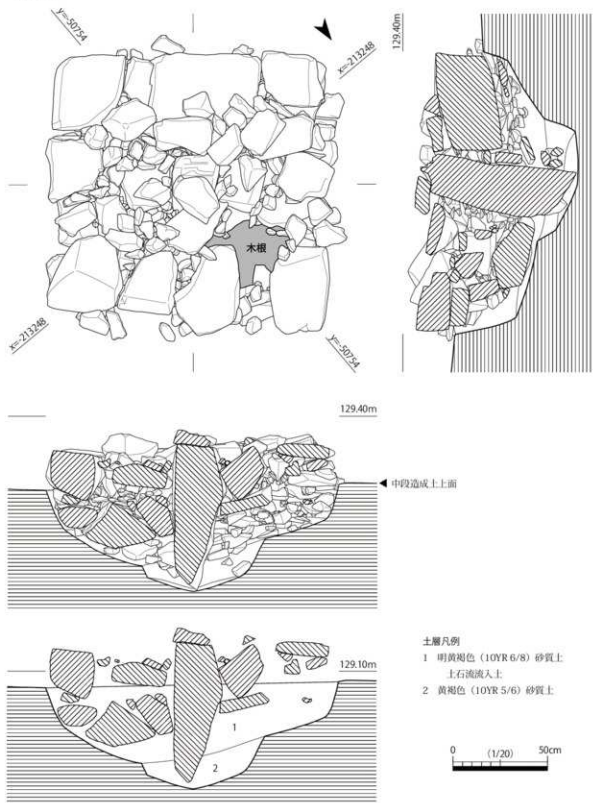
中央小土坑には、四辺が25cm、高さが80cm程度で、下端側がやや尖る四角柱状の石を据え立て、方形土坑の底面レベルまで黄褐色砂質土で充填していた。方形土坑内は、長さが20cm程度の石を詰めて四角柱状の石を固定し、四辺には、長さが40～50cm程度の角石を、外側面が揃うように3～4個並べていた。このとき、四辺の石の上面レベルが揃うように、薄い石の下には詰石を敷いて高さを調節していた。さらに、四辺の石と四角柱状の石との間には、5～25cm程度の小石を流し込み、上面全体には、水平になるように、長さが30cm程度の扁平な石を置いていた。

石組に使用された石材は、ほとんどが花崗岩と片岩の自然石で、石英やチャートの小礫を少量含んでいた。いずれも近辺で採取可能なものである。石材による使用箇所の区別はないが、石の形が使用箇所に影響すると考える。四角柱の石は片岩で、石の上端と下端は、片理に直交して粗く割れており、片理面が石組の主軸と揃うことから、石組の基礎となると考える。

また、石組の南西辺の4個の石は、いずれも上面と外側面が平坦で、上面及び外側面の隅が直角となるものを選ぶのに対して、他の3辺の石は不揃いである。そして、南西辺中央の石は、四辺の石の中でも最大であり、比較的良好で滑らかな花崗岩を使用しており、南西辺の石と四角柱状の石との間は、他の3辺と比べて隙間なく石を組んでいる。これらのことから、石組の南西辺が正面であったと考える。

出土遺物は、南西辺中央の石の周辺、及びこの石と他の石との隙間の腐植土中や、土坑埋土中等

方形石組



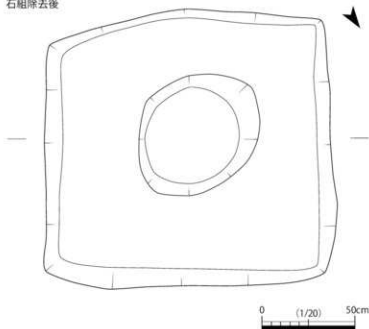
第 32 図 方形石組平面図・見通し断面図

から、土師質土器の皿2点以上が集中して出土した。

遺構の時期は、中段造成土である中世の土石流由来土の上から掘り込まれることと出土遺物から、近世後期と考える。

遺構の性格は不明であるが、福岡県京都郡みやこ町蔵持山遺跡の例から、囲炉裏の基礎に当たる可能性がある（みやこ町教委2016）。ただ、石組南西側が正面となることから、参拝のための祭壇のような施設の可能性もある。

石組除去後



参考文献

みやこ町教育委員会 2016『蔵持山遺跡群Ⅱ』みやこ町文化財調査報告書第14集

第33図 方形石組平面図（石組除去後）

4 遺物（第34～37図、第5～11表、図版34～41）

今回の発掘調査において出土した遺物は、須恵器・土師器・瓦質土器・陶器・鉄釘・銅銭・瓦・輪羽口・鉄滓他であり、古墳時代後期から江戸時代後期にかけての年代幅をもつ。土器類の中心となるのは土師器杯・皿であり、中世の陶磁器類は全く出土していない。また、中世寺院に通有の仏具類・茶道具・火鉢・硯等も全くみられない。

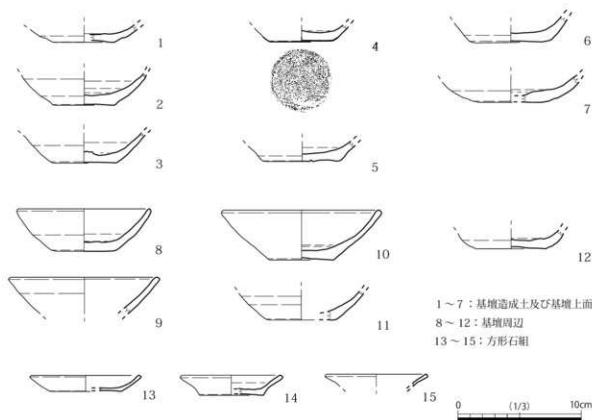
1～12は基壇とその周辺から出土した土器である。基本的に土師器杯の小片で、意図的な埋納品を含まず、完形に近く復元できる個体もない。

1～7は基壇上面及び造成土中から出土した。図化可能な個体はいずれも底部片であり、底径5.2cm前後のものと6.3cm前後のものがある。8～12は基壇を覆う土石流堆積層の最下層からの出土品である。基本的に基壇上面出土の一群との大きな差異はない。

13～15は、方形石組から出土した土師器皿であり、いずれも小片である。江戸時代後半期の遺物と考えられる。

16～25は、土石流堆積土中から出土した平安時代以前の土器である。須恵器の短頸壺蓋・杯蓋・杯身・皿、土師器の皿・椀がある。須恵器短頸壺蓋（16）は、今回の調査で出土した最古の遺物であり、古墳時代後期にさかのぼる。土師器椀（24・25）は、平安時代後期の遺物である。このうち、24は底部内面に暗文をもち、重ね焼きの痕跡が認められる。

26～57は、土石流堆積土中から出土した鎌倉時代の土器である。土師器皿・杯であり、基本的



第34図 出土遺物（1）

に基壇とその周辺から出土した一群との大きな差異はない。これらのうち、26～34は上段、35～56は中段、57は下段から出土したものである。

58～62は、土石流堆積土中から出土した室町時代以降の土器類及び瓦である。58・59は江戸時代後期の瓦質土器（佐野焼）の蓋及び土瓶であり、セットで使用された可能性がある。土瓶外面には型押しにより竹の文様が施される。60は江戸時代後期の肥前系陶器擂鉢である。内面は使用により平滑化する。61は江戸時代後期の土師器（佐野焼）大甕の口縁部である。内面は当て具痕跡及びハケ目が顕著である。

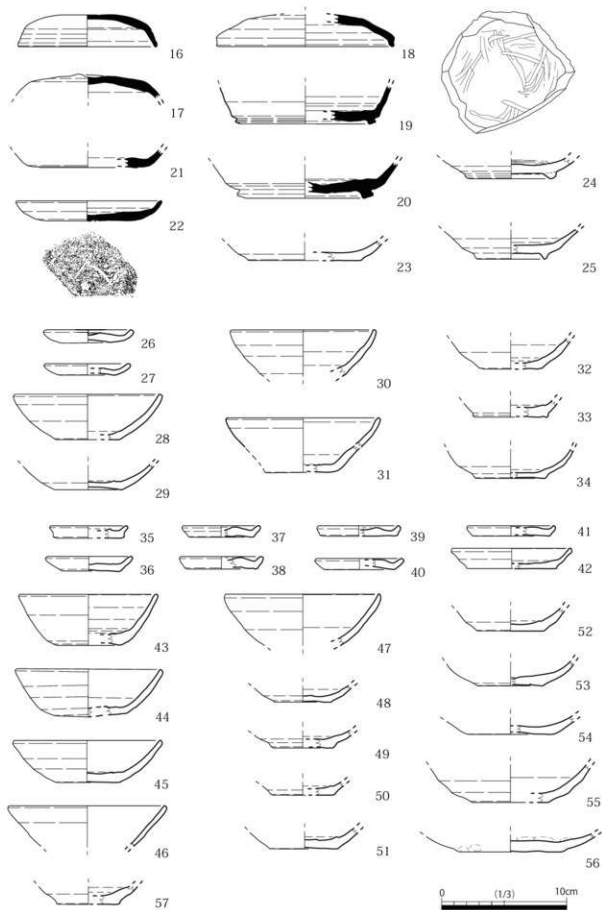
62は平瓦片である。一枚造りで凸面にはコビキ痕跡と離れ砂が残る。凹面はヘラナデされ、端部側はヘラケズリされる。周防阿弥陀寺第1次調査の際に出土した中世後半期とされる瓦に近似する（防府市教委2012）。瓦はこの1点のみが出土した。

63～65は、土石流堆積土中から出土した冶金関連遺物である。63・64は輪羽口片であり、63は先端部を残す。両者は外径・孔径とも異なる。

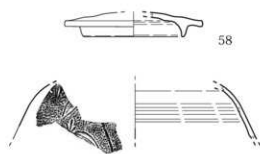
65は鉄滓（梃形滓）であり、付近に鍛冶工房が存在したことを示唆する。

66～87は鉄釘である。66～73は基壇直上から出土した一群であり、66と67、70と71は重なって錆着する。

74～87は火葬遺構出土の一群である。全体を残す2例（74・86）で長さや太さが異なることから、複数の規格の釘を含むとみられる。現状でほとんど曲がりのないもの（74・75・79～85）、わずか

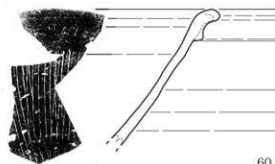


第 35 図 出土遺物 (2)

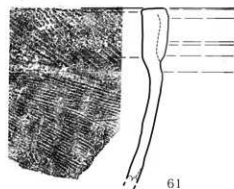


58

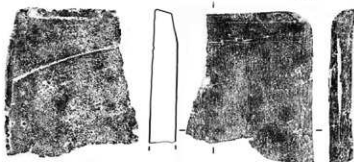
59



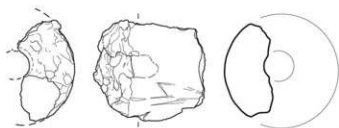
60



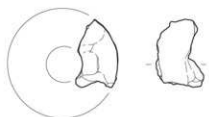
61



62



63



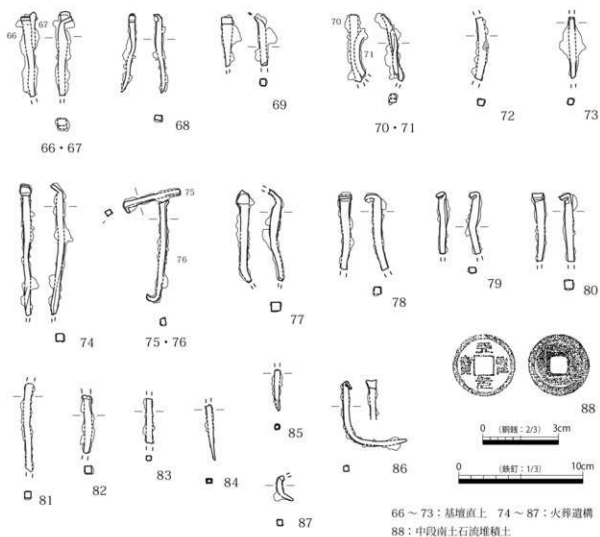
64



65



第 36 図 出土遺物 (3)



第37図 出土遺物（4）

に曲がるもの（76～78）、直角に近く曲がるもの（85・86）がある。

88 は土石流堆積土中から出土した天聖元宝（1023年初鑄）である。

参考文献

防府市教育委員会 2012『周防阿弥陀寺発掘調査報告書』

第5表 土器・陶磁器観察表(1)

No	棟号	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	(9) (%)	主な調整	(内) (%)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)							
1	34	34	中段基壇上面	土師器	杯	-	(5.0)	(1.4)	やや粗	不良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6		回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
2	34	34	中段基壇 トレンチア	土師器	杯	-	5.0	(2.6)	粗	やや良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
3	34	34	中段基壇上面 Po.61	土師器	杯	-	5.4	2.4	やや精良	やや良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
4	34	34	中段基壇上面 Po.62	土師器	杯	-	4.8	(1.4)	精良	やや良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
5	34	34	中段基壇上面 Po.55	土師器	杯	-	6.3	(1.6)	やや精良	やや良	にぶい・黄褐色 10YR7/4 にぶい・黄褐色 10YR7/4		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
6	34	34	中段基壇 灰褐色砂礫土	土師器	杯	-	6.6	(2.2)	やや粗	不良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転か?
7	34	34	中段基壇上面	土師器	杯	-	(5.4)	(2.2)	やや粗	やや良	黄褐色 7.5YR7/8 黄褐色 7.5YR7/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
8	34	34	中段基壇北側 土石流堆積土	土師器	杯	(10.5)	5.1	3.4	やや精良	良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
9	34	34	中段基壇南東隅 土石流堆積土	土師器	杯	(11.5)	-	(3.0)	やや粗	やや良	褐色 5YR7/6 褐色 5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		ロクロ左回転か?
10	34	34	中段基壇南東隅 土石流堆積土	土師器	杯	(12.4)	(5.4)	(4.0)	やや粗	やや良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
11	34	34	中段基壇 北東列の外側 褐灰色土 Po.50	土師器	杯	-	(5.5)	(2.3)	やや精良	やや良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転か?
12	34	34	中段基壇 北東隅の外側	土師器	杯	-	(5.6)	(1.5)	粗	不良	黄褐色 7.5YR7/8 黄褐色 7.5YR7/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
13	34	34	中段方形石組 南西隅	土師器	皿	(8.4)	(5.7)	1.3	精良	良	にぶい・褐色 7.5YR7/4 にぶい・褐色 7.5YR7/4		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
14	34	34	中段方形石組 南西隅 中央石の東側	土師器	皿	(7.8)	(5.0)	1.6	精良	やや良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
15	34	34	中段方形石組 南西隅 石組の間	土師器	皿	(7.9)	-	(1.0)	精良	良	にぶい・褐色 7.5YR7/4 にぶい・褐色 7.5YR7/4		回転ナデ 回転ナデ		ロクロ右回転
16	35	35	中段西側排土遺場	須恵器	杯蓋	(11.0)	-	2.5	精良	良	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1		ヨコナデ後ナデ、 ヨコナデ ヘラ切り後ナデ、 ヨコナデ		内外面に指痕・左 右回転
17	35	35	中段南 土石流堆積土	須恵器	杯蓋	-	-	(1.9)	やや粗	不良	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5Y8/1		ヨコナデ後ナデ、 ヘラ切り後ヨコナデ、 ヨコナデ		右回転
18	35	35	中段南 土石流堆積土	須恵器	杯蓋	(13.8)	-	(2.5)	やや粗	やや良	灰色 10Y6/1 灰色 10Y6/1		ヨコナデ 回転ヘラケズリ後ナ デ、ヨコナデ		右回転

第6表 土器・陶磁器観察表(2)

No	押図	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	(内) (外)	主な調整	(内) (外)	備考
						口径 (複元値)	底径 (複元値)	器高 (複元値)							
19	35	35	中段基壇上 土石流堆積土 最下層	須恵器	杯身	-	(11.0)	(3.0)	やや 精良	良	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1		ヨコナデ後ナデ、ヨ コナデ ヨコナデ		底部ヘラ切り 貼付高台 右回転
20	35	35	中段基壇上 土石流堆積土	須恵器	杯身	-	(9.3)	(2.8)	やや 粗	良	青灰色 5BG5/1 青灰色 10BG5/1		ヨコナデ後ナデ、ヨ コナデ ヘラ切り後ヨコナデ、 ヨコナデ		左回転
21	35	35	排土置場 (中段基壇上土石 流堆積土中か)	須恵器	皿	-	(9.7)	(1.5)	粗	良	灰白色 N7/ 灰白色 N7/		ヨコナデ ヨコナデ		底部ヘラ切り 右回転か?
22	35	35	石段1 腐植土中	須恵器	皿	(11.3)	(8.3)	1.6	やや 粗	不良	灰白色 5Y8/2 灰白色 5Y8/2		ヨコナデ ヨコナデ		底部ヘラ切り 器面磨減する
23	35	35	中段南 土石流堆積土	土師器	杯	-	(9.0)	(1.5)	やや 粗	不良	淡黄色 2.5Y8/4 淡黄色 2.5Y8/4		ナデ 回転ナデ		底部ヘラ切りか
24	35	35	上段 表土	土師器	碗	-	6.4	(1.6)	やや 精良	良	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y7/3		ヨコナデ後ミガキ ヨコナデ後ナデ、ヨ コナデ		貼付高台 内面に輪状の垂ね 残る
25	35	36	中段南 土石流堆積土	土師器	碗	-	(5.5)	(2.2)	精良	やや 良	淡黄色 2.5Y7/4 淡黄色 2.5Y7/4		ヨコナデ後ナデ、ヨ コナデ ヨコナデ		貼付高台
26	35	36	上段 土石流堆積土	土師器	皿	(6.8)	4.2	1.0	やや 粗	不良	褐色 5YR7/8 褐色 5YR7/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
27	35	36	上段 土石流堆積土	土師器	皿	(6.6)	(4.6)	(0.9)	やや 粗	不良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
28	35	36	上段西側 土石流堆積土	土師器	杯	(11.3)	(5.0)	3.6	やや 粗	良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
29	35	36	上段 土石流堆積土	土師器	杯	-	(5.3)	(2.0)	やや 粗	良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
30	35	36	上段 土石流堆積土	土師器	杯	(11.0)	-	(3.7)	やや 精良	良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		
31	35	36	上段西側 土石流堆積土	土師器	杯	(11.8)	5.6	(4.3)	やや 粗	良	褐色 7.5YR7/6 褐色 7.5YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		2片を覆上復元 底部回転系切り ロクロ右回転
32	35	36	上～中段斜面 土石流堆積土	土師器	杯	-	(4.9)	(2.4)	やや 精良	良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
33	35	36	上段 土石流堆積土	土師器	杯	-	(6.0)	(1.3)	やや 精良	良	褐色 2.5YR6/8 褐色 2.5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
34	35	36	上段西側 土石流堆積土	土師器	杯	-	(5.6)	(2.3)	精良	不良	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
35	35	36	中段南 土石流堆積土 Po.13	土師器	皿	(5.9)	(5.6)	1.0	精良	良	褐色 7.5YR6/6 にぶい褐色 7.5YR5/4		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
36	35	36	中段南 トレッチ3	土師器	皿	6.5	4.5	1.2	粗	やや 良	褐色 5YR6/8 ～にぶい褐色 5YR6/4 褐色 5YR6/8 ～にぶい褐色 5YR6/4		回転ナデ 回転ナデ、底部中央 に板目		底部回転系切り ロクロ右回転
37	35	36	中段南 土石流堆積土	土師器	皿	(5.9)	(5.2)	0.9	やや 粗	良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ後、底部ナ デ 回転ナデ、底部中央 に板目		底部回転系切り ロクロ右回転

第7表 土器・陶磁器観察表(3)

No	棟号	図版	出土場所	種別	器種	法量 (cm)			土質	焼成	色調	(内) (外)	主な調整	(内) (外)	備 考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)							
38	35	36	中段南 土石流堆積土	土師器	皿	(6.3)	(5.7)	0.9	やや 精良	やや 良	褐色 5YR7/8 褐色 5YR7/8		回転ナデ、ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
39	35	36	中段南 土石流堆積土	土師器	皿	(6.2)	(6.1)	0.8	やや 粗	やや 良	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい褐色 5YR6/4		回転ナデ後、底部ナ デ 回転ナデ、底部に板 目		底部回転系切り ロクロ右回転
40	35	36	中段南 土石流堆積土	土師器	皿	(6.6)	(5.6)	0.9	粗	やや 良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
41	35	36	中段南	土師器	皿	(6.7)	(6.1)	0.9	やや 粗	やや 良	褐色 5Y6/6 褐色 5Y6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転 内外面に横溝が 多く付着
42	35	36	中段南 腐食土	土師器	皿	(9.3)	(7.0)	1.6	精良	良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR6/4		回転ナデ 回転ナデ、底部不明		
43	35	37	中段基壇西側 土石流堆積土	土師器	杯	(10.8)	(5.5)	4.0	やや 粗	やや 良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
44	35	37	中段基壇西側 土石流堆積土	土師器	杯	11.3	5.7	3.8	やや 精良	やや 良	褐色 2.5YR6/8 褐色 2.5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
45	35	37	中段基壇西側 土石流堆積土	土師器	杯	(11.5)	(5.0)	3.3	やや 精良	やや 良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
46	35	37	中段南 トレンチ5 明褐色砂質土 (薄層)	土師器	杯	(12.2)	-	(3.2)	やや 精良	不良	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3		回転ナデ 回転ナデ		ロクロ右回転
47	35	37	石段1 土石流堆積土	土師器	杯	(12.2)	-	(4.1)	やや 精良	やや 良	浅黄褐色 2.5Y7/4 浅黄褐色 2.5Y7/4		回転ナデ 回転ナデ		
48	35	37	中段北の東側 Po.26	土師器	杯	-	(4.5)	(1.3)	やや 粗	良	褐色 7.5YR7/6 明黄褐色 10YR7/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
49	35	37	石段1 腐食土	土師器	杯	-	(5.0)	(1.4)	やや 粗	やや 良	褐色 5YR6/6 にぶい黄褐色 10YR7/4		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
50	35	37	中段基壇 土石流堆積土	土師器	杯	-	(5.0)	(1.1)	やや 粗	やや 良	褐色 2.5YR6/8 にぶい黄褐色 10YR7/4		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
51	35	37	中段南	土師器	杯	-	5.4	(1.6)	やや 粗	やや 良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り ロクロ右回転
52	35	37	中段基壇前面 石積み土 腐食土 Po.2	土師器	杯	-	5.2	(1.8)	やや 粗	やや 良	褐色 5YR6/8 褐色 5YR6/8		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
53	35	37	中段南 トレンチ3	土師器	杯	-	(5.3)	(2.0)	やや 精良	やや 良	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4		回転ナデ 回転ナデ、底部に板 目		底部回転系切り 表面磨減
54	35	37	石段1 南端付近	土師器	杯	-	(6.7)	(1.5)	粗	不良	明黄褐色 10YR7/6 にぶい褐色 7.5YR7/4		ヘラナデ又はミガキ 回転ナデ後粗いナデ、 系切り後粗いナデ		底部回転系切り ロクロ左回転か?

第8表 土器・陶磁器観察表(4)

No.	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				胎土	焼成	色調	(内) (外)	主な調整	(内) (外)	備考
						口径 (復元値)	底径 (復元値)	器高 (残存値)	器径							
55	35	37	中～下段関斜面 Po.10	土師器	杯	-	(6.0)	(3.0)		精良	やや良	浅黄色 2.5YR7/4 にふい黄褐色 10YR7/4		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
56	35	37	中段南 腐食土	土師器	杯	-	(8.0)	(1.4)		やや良	やや良	浅黄色 2.5Y7/4 浅黄色 2.5Y7/4		ナデ、ヨコナデ後、 指オサエ ヨコナデ後、指オサエ		底部外面に板目圧痕
57	35	37	下段 表土	土師器	杯	-	(5.0)	(1.4)		やや粗	良	褐色 5YR6/6 褐色 5YR6/6		回転ナデ 回転ナデ		底部回転系切り
58	36	39	中段 表土	瓦質 土器	蓋	(7.6)	-	(1.9)		精良	良	灰色 5Y4/1 灰色 5Y4/1		回転ナデ 回転ナデ後ナデ		佐野焼
59	36	39	中段北の中央 土石流堆積土 Po.22	瓦質 土器	土瓶	-	-	(4.3)		精良	良	灰色 N5/ 灰色 N6/		回転ナデ 型押 (竹文)		佐野焼
60	36	38	中段南 土石流堆積土	陶器	鉢鉢	-	-	(10.8)		やや粗	良	極暗赤褐色 2.5YR2/3 極暗赤褐色 2.5YR2/3		回転ナデ、櫛目 回転ナデ、回転ヘラ ケズリ		ロクロ左回転
61	36	38	中段北 調査区南東壁 土石流堆積土	土師器	甕	47cm 前後	-	(13.8)		粗	不良	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2		タタキ、ハケ、一部 ナデ 粗いナデ		佐野焼

第9表 瓦・土製品観察表

No.	種別	図版	出土場所	種類	器種	法量 (cm)				胎土	焼成	色調	(内) (外)	主な調整	(内) (外)	備考
						長さ (残存値)	幅 (残存値)	最大厚	外径 (復元値)							
62	36	39	中段南 土石流堆積土	瓦 (瓦質)	平瓦	(10.6)	(10.1)	2.0	-	やや粗	やや良	青灰色 5B5/1 青灰色 5B5/1		凹面：ヘラナデ、 端部付着をヘラ による面取り 凸面：コピキ後、 離れ砂		
63	36	40	中段南	土製品	輪郭口	(8.9)	-	3.2	(9.0)	粗	不良	褐色 5YR6/6 にふい黄褐色 10YR6/4				先端が溶解、発泡 する (即方向)
64	36	40	上段 土石流堆積土	土製品	輪郭口	(3.5)	-	2.8	(8.7)	粗	良	褐色 10YR5/1 にふい褐色 7.5YR7/4				外周部が焼き締まる

第10表 金属製品観察表(1)

No.	種別	図版	出土場所	名称	法量 (cm)				重さ (g)	備考
					長さ (残存値)	最大幅	最大厚	頸部長 (残存値)		
65	36	40	中段基壇土 土石流堆積土	椀形 銅治洋	-	10.8	3.3	-	約 390	
66	37	41	中段基壇土 灰褐色砂礫土	鉄釘	(6.2)	0.6	0.8	(0.8)	13.0	和釘。 67と錯簡
67	37	41	中段基壇土 灰褐色砂礫土	鉄釘	(3.0)	0.7	-	-	同上	66と錯簡

第11表 金属製品観察表(2)

No	持国	図版	出土場所	名称	法 量 (cm)				重さ (g)	備 考
					長さ (残存値)	最大幅	最大厚	頭部長 (残存値)		
68	37	41	中段基壇上面 南東隅	鉄釘	(6.3)	0.5	0.5	0.8	3.0	和釘。脚は歪み曲がる 頭部幅と脚幅がほぼ同じ
69	37	41	中段基壇上 灰褐色砂礫土	鉄釘	(3.9)	0.9	0.5	(0.6)	5.0	和釘。頭部を鋭き延ばす 頭部幅は脚幅より広い
70	37	41	中段基壇 灰褐色砂礫土	鉄釘	(5.3)	0.6	0.5	-	10.0	和釘。71 と隣着 頭部が残存する
71	37	41	中段基壇 灰褐色砂礫土	鉄釘	(3.7)	0.4	0.4	-	同上	和釘。70 と隣着
72	37	41	中段基壇西側 面落ち直上	鉄釘	(5.0)	0.6	0.5	-	5.0	和釘。天地不明 全体に歪み曲がる 一部本貫か
73	37	41	中段基壇北東隅の外側 灰褐色砂礫土	鉄釘	(4.8)	0.5	0.5	-	8.0	和釘。天地不明 やや歪む
74	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(10.4)	0.9	0.6	1.0	12.0	和釘。頭部を鋭き延ばす 脚下半がねじれる
75	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(8.0)	0.5	0.6	-	14.0	和釘。76 と隣着 頭部を鋭き延ばす
76	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(4.6)	0.4	0.5	-	同上	和釘。75 と隣着 頭部を鋭き延ばす
77	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(7.3)	1.0	0.6	(1.0)	8.0	和釘。頭部を鋭き延ばす 全体にM字状に歪み曲がる
78	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(6.0)	1.0	0.6	(1.2)	10.0	和釘。頭部を鋭き延ばす 脚下半が歪み曲がる
79	37	41	中段火葬遺構 骨付近	鉄釘	(5.0)	0.5	0.6	0.8	5.0	和釘。著しく歪み曲がる
80	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(5.4)	0.9	0.6	0.9	10.0	和釘。頭部を鋭き延ばす 脚下半がやや歪み曲がる 頭部幅は脚幅より広い
81	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(7.0)	0.6	0.5	-	6.0	和釘。天地不明 全体に歪み曲がる
82	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(4.6)	0.6	0.6	-	6.0	和釘。歪み曲がる
83	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(3.5)	0.5	0.5	-	2.0	和釘。天地及び正面不明
84	37	41	中段火葬遺構 図層下層 (棺台横)	鉄釘	(4.4)	0.5	0.4	-	2.0	和釘。脚先端は歪み曲がる
85	37	41	中段火葬遺構 骨1の横	鉄釘	(3.3)	0.4	0.4	-	2.0	和釘。歪み曲がる 脚先端に木炭または鉄片が隣着
86	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(5.2)	0.9	0.4	0.7	8.0	和釘。頭部を鋭き延ばす 歪み曲がる
87	37	41	中段火葬遺構	鉄釘	(2.0)	0.5	0.4	-	2.0	和釘。正面不明 歪み曲がる
88	37	39	中段南 土石流埋積土 (墓土中)	銅銭	-	2.5	-	-	2.6	「天聖元宝」

IV 自然科学分析

1 阿弥陀寺出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

(1) はじめに

山口県防府市の阿弥陀寺から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、火葬遺構から出土した炭化材 2 点（試料 No.1: PLD-34335、試料 No.2: PLD-34336）と、基壇をもつ礎石建物の基壇上面礫敷中から出土した炭化材 1 点（試料 No.3: PLD-34337）の、計 3 点である。いずれの試料も最終形成年輪が残っていた。火葬遺構および基壇をもつ礎石建物は、いずれも 13 世紀後葉～14 世紀初頭の遺構と考えられている。測定試料の情報、調製データは第 12 表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 12 表 測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34335	試料 No.1 遺構: 火葬遺構	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34336	試料 No.2 遺構: 火葬遺構	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34337	試料 No.3 遺構: 基壇上面礫敷中 遺物 No.F	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

(3) 結果

第 13 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、暦年較正結果を、第 38 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正には OxCal4.3 (校正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

第 13 表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-34335 試料 No.1 火葬遺構	-27.74 ± 0.19	738 ± 19	740 ± 20	1265-1280 cal AD (68.2%)	1257-1288 cal AD (95.4%)
PLD-34336 試料 No.2 火葬遺構	-26.97 ± 0.15	716 ± 20	715 ± 20	1272-1287 cal AD (68.2%)	1263-1294 cal AD (95.4%)
PLD-34337 試料 No.3 基壇上面礫敷中	-26.50 ± 0.17	695 ± 19	695 ± 20	1277-1294 cal AD (68.2%)	1271-1300 cal AD (86.6%) 1368-1382 cal AD (8.8%)

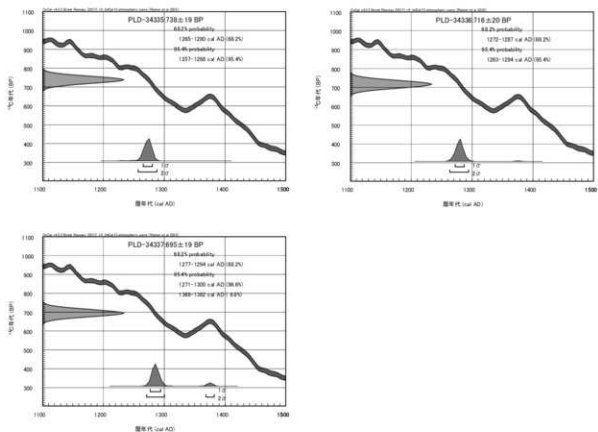
(4) 考 察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。

火葬遺構から出土した試料 No.1 (PLD-34335) は 1257-1288 cal AD (95.4%)、試料 No.2 (PLD-34336) は 1263-1294 cal AD (95.4%) で、13 世紀中頃～末の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。なお、試料にはいずれも最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示している。

基壇をもつ礎石建物の基壇上面礫敷中から出土した炭化材 (試料 No.3: PLD-34337) は、1271-1300 cal AD (86.6%) および 1368-1382 cal AD (8.8%) で、13 世紀後半～末および 14 世紀後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代および室町時代に相当する。なお、試料には最終形成年輪が残っており、測定結果は枯死もしくは伐採年代に相当する。

火葬遺構および基壇をもつ礎石建物は、いずれも 13 世紀後葉～14 世紀初頭の遺構と考えられており、測定結果は、出土遺物等による推定時期に対して整合的である。



第 38 図 暦年較正結果

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

2 阿弥陀寺出土炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

山口県防府市の大平山西側斜面に立地する阿弥陀寺から出土した炭化材の樹種同定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、火葬遺構から出土した炭化材3点と、基壇をもつ礎石建物の基壇上面礫敷中から出土した炭化材2点の、計5点である。火葬遺構および基壇をもつ礎石建物は、いずれも13世紀後葉～14世紀初頭の遺構と考えられている。

残存率の良い試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で切断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 製 JYE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、広葉樹のサクラ属とコナラ属アカガシ亜属（以下アカガシ亜属と呼ぶ）、サカキの3分類群が確認された。火葬遺構の試料はサクラ属が2点とアカガシ亜属が1点、基壇上の試料は2点ともサカキであった。

第14表 阿弥陀寺出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	遺構	遺物 No.	種類	樹種	本取り	残存半径 (cm)	残存 年輪数	復元直径 (cm)	時期
1	火葬遺構		炭化材	コナラ属アカガシ亜属	みかん割り	3.3	10	9.0	13世紀後葉 14世紀初頭
2	火葬遺構		炭化材	サクラ属	みかん割り	1.2	9	3.0	13世紀後葉 14世紀初頭
3	火葬遺構		炭化材	サクラ属	みかん割り	1.7	14	6.0	13世紀後葉 14世紀初頭
4	基壇上	炭 13	炭化材	サカキ	割れ	1.2	52	-	13世紀後葉 14世紀初頭
5	基壇上	炭 7	炭化材	サカキ	割れ	0.8	31	-	13世紀後葉 14世紀初頭

復元直径は、試料 No.1 が 9.0cm、試料 No.2 が 3.0cm、試料 No.3 が 6.0cm であった。年輪数は、試料 No.4 のサカキで残存半径 1.2cm 中に 52 年輪みられたように、サカキは年輪が詰まっていたが、それ以外の樹種では年輪幅は広がった。同定結果を第 14 表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第 39 図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

①サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 第 39 図 1a-1c (No.3)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、1～5 列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別ができないため、広義のサクラ属はモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

②コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第 39 図 2a-2c (No.1)

厚壁で大きい大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靱で、耐水性があり、切削加工は困難である。

③サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モッコク科 第 39 図 3a-3c (No.4)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は 20～40 段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端 1～4 列が直立する異性で、単列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靱、堅硬で、切削加工は困難である。

(4) 考 察

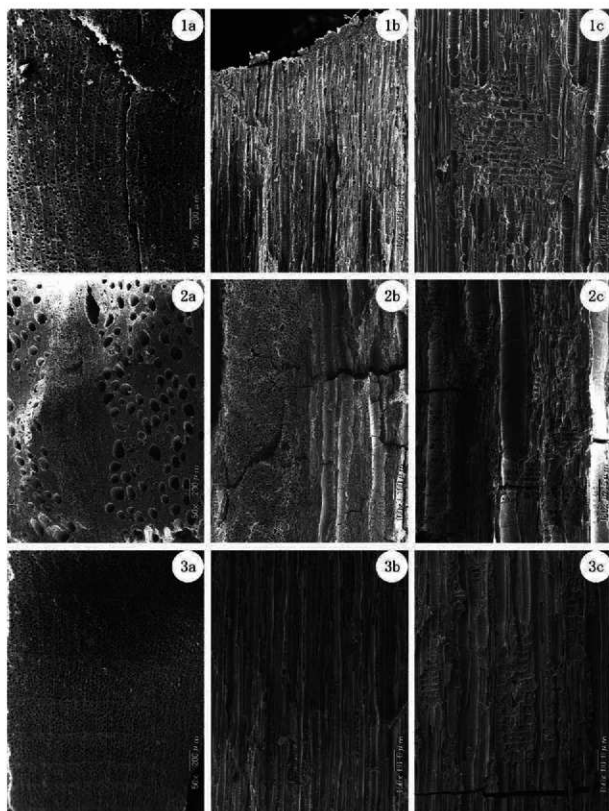
火葬遺構ではサクラ属が 2 点とアカガシ亜属が 1 点みられた。サクラ属とアカガシ亜属は薪炭材として多く利用される樹種である(伊東ほか, 2011)。

試料の木取りは、いずれもみかん割り状であった。ただし、試料の肉眼観察では明確な加工痕等は確認できなかったため、薪炭材に割材をした木材が利用されていたかどうかは不明である。

基壇上の試料は、2 点ともサカキであった。試料は基壇の造成土の中から出土しており、用途は不明である。サカキは薪炭材としても多く利用されている樹種である(伊東ほか, 2011)。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社。



第 39 図 阿弥陀寺出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. サクラ属 (No. 3)、2a-2c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 1)、3a-3c. サカキ (No. 4)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

3 阿弥陀寺出土の火葬骨について

高椋浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

（1）はじめに

山口県埋蔵文化財センターによる山口県防府市に所在する阿弥陀寺の発掘調査において、中世に該当する火葬遺構から火葬骨が出土した。出土した火葬骨は山口県埋蔵文化財センターにより調査現場において取り上げ作業がおこなわれ、その後土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに搬入され、整理作業をおこなった。

出土した火葬骨は保存状態が悪く、人骨の形態観察は難しかったが、後述するように火葬骨については表面観察から被熱温度をある程度推測できるため、当時の火葬方法についての情報を得ることができる。以下に、出土した火葬骨についての観察結果を報告する。

（2）出土した人骨について

〔人骨の部位について〕

出土した人骨のうち部位を特定できたものはなかったものの、多くの破片は長管骨の破片で、頭蓋片や歯牙は全く確認できなかった。また、人骨の部位の特定が困難であったため、出土した人骨の体数も不明であり、性別や年齢についての情報も得ることができなかった。

〔人骨表面の状態について〕

火葬骨については骨の表面観察から被熱温度をある程度推測することができる。出土した人骨の表面を観察すると、多くの骨に亀裂が入り、色は灰白色を呈するものが大半である（写真）。

Thompson（2004）によると、骨が被熱により亀裂が入り、破片化するのは100℃から600℃であること、そして骨の色が変色し始めるのは300℃以上であることを指摘している。Holdenら（1995a,b）は、約600℃の熱を受けた骨は灰色に変色し、800℃以上になると白色に変化することを指摘している。

出土した火葬骨の大半は、灰色を呈するため少なくとも被熱温度は300℃から600℃と推測される。また、火を受けた骨の表面上の変化として結晶化することが知られており、その温度はおおよそ600℃以上であるとされている（Holden et al, 1995a,b）。今回、出土した人骨の破片をすべて観察したところ、表面が結晶化したものは全く確認できなかったことから、被熱温度は600℃以下であると推測される。

以上をまとめると、出土した人骨の表面観察から推定される被熱温度は300℃から600℃前後であったことがわかる。



写真 出土した火葬骨*

*出土した火葬骨のうち比較的大きな破片を示している。これら以外にも、細かな破片が残存している。

(3) おわりに

阿弥陀寺から出土した人骨について、保存状態の制約から部位の特定や性別、年齢などの情報を得ることができなかったが、人骨表面の観察から被熱温度をある程度推定することができた。今後、こうした火葬骨から得られる情報を蓄積し、出土状況や出土遺構等の考古学的情報を統合することで、中世における火葬の実態について詳細に検討していく必要がある。

謝辞

本資料を報告するにあたり山口県埋蔵文化財センターの岡田裕之氏には、遺跡や人骨の出土状態等の考古学的情報を提供いただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- Holden, J.L., P.P. Phaky and J.G. Clement. 1995a. Scanning electron microscope observation of incinerated human femoral bone: a case study. *Forensic Science International*, 74:17-28.
- Holden, J.L., P.P. Phaky and J.G. Clement. 1995b. Scanning electron microscope observation on heat-treated human femoral bone: a case study. *Forensic Science International*, 74:29-45.
- Thompson, T.J.U. 2004. Recent advances in the study of burned bone and their implications for forensic anthropology. *Forensic Science International*, 146:203-205.
- Scott I. Fairgrieve. 2008. *Forensic Cremation. Recovery and Analysis*. CRC Press.

V 総 括

1 礎石建物の平面形式と建築計画

(1) 礎石配置からみた建物の平面形式 (第40～43図)

礎石建物は、現存する礎石のみから復原すると、桁行7間、梁行4間の規模である。この場合には、建物の左右・背面から基壇の端までが等間隔(1.3m)であるのに対して、建物正面のみ基壇地覆石との間隔が3.2mと広くなる。このため、建物正面と基壇地覆石との間に存在する空間をどのように理解するかが問題となる。こうした点を踏まえ、京都大学大学院工学研究科 山岸常人教授に調査指導を頂き、以下の①・②の御教示を得た。

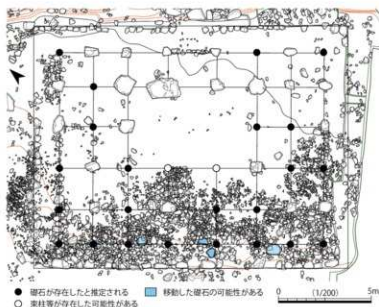
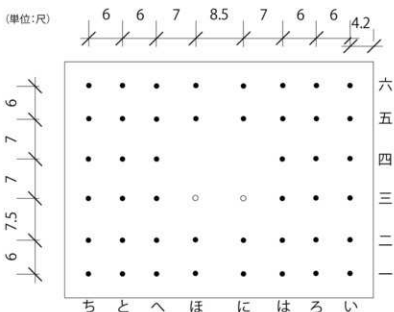
(単位:尺)

①建物の平面形式について

平面形式 1尺31cmで、桁行7間、梁行5間の平面形式と考えることが妥当である(第40図)。建物最前列とした礎石(一通り)については、並ぶ確証はないが、礎石列が存在したと考えるのが自然である。第40図(下)の青塗りした石は、本来の位置から移動した礎石の可能性がある。

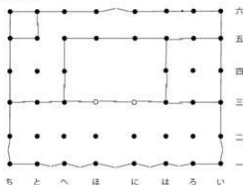
柱間寸法 上の平面形式では、桁方向の中央柱間(一へほ通り)を8.5尺とし、そこから左右両側に向かって、いずれも7尺・6尺・6尺の柱間となる。これに対して、梁方向では、正面側の第一間(一～二通り)から、順に6尺・7.5尺・7尺・7尺・6尺の柱間を想定すれば、側柱筋からの基壇の出がいずれも4.2尺となり整合的である。

建物の復元案 この平面形式から復元できるのは、梁間の正

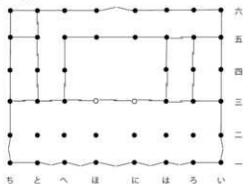


第40図 礎石建物の礎石配置平面図 (山岸氏の原案をもとに作成)
上: 礎石番付と礎石間隔、下: 礎石配置平面

〔A1案〕



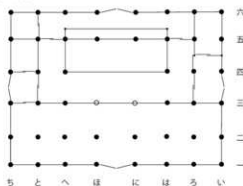
〔A2案〕



第41図 礎石建物平面案（A1・2案）

※道成寺本堂のプランにもとづく

〔B案〕



第42図 礎石建物平面案（B案）

※善水寺本堂のプランにもとづく

面側2間分（一〜二通り、二〜三通り）を礼堂（外陣）とし、後方の3間分（三〜四通り、四〜五通り、五〜六通り）を内陣・後戸とする建物の構造で、礼堂と内陣は間仕切りで仕切られる。そして、内陣前方中央の2間×3間の区画（は三、へ三、へ五、は五を四隅とする範囲）が須弥壇の位置で、その中央の柱2本（に四、は四）は本来なかったものと考えられる（第41図A1案）。

また、須弥壇の左右両側の1間分を通路とし、通路と建物左右壁との間に1間四方等に仕切られた脇陣または局とよぶ小部屋を左右両側に配していた可能性もある（第41図A2案）。

建物の床 建物背面の中央間（に六〜ほ六）にある石列を扉装置に関わるものとみれば、後戸および内陣は土間であった可能性がある。ただし、礼堂については床下が礫敷きであることから土間ではなく板床であったと考えられる。

大石の役割 基壇正面にある大石は、向拝に関わるもの、あるいは灯籠設置に関わるものの可能性もある。

建物の類例 推定される建物の平面形式に最も近いのが和歌山県道成寺本堂〔1357（承平12）年建立〕である（第43図、次頁写真）。ただし、道成寺の場合は、梁行の正面側1間分（一〜二通り）の間隔を広くとる点で阿弥陀寺と異なる。道成寺本堂正面側の隅木は振れ隅となる一方、阿弥陀寺は真隅となるが、この時期の建物はいずれも野小屋構造であったと考えてよい。その他、滋賀県善水寺本堂〔1366（貞治5）年再建〕も参考となる（第42図B案）。

なお、中世の仏堂には、大仏様や禅宗様、それらの折衷様等があり建築様式が多様であるため、平面形式

の類似をもって建物構造の類似を言及するのは適切ではない。同様に、平面形式から技術系譜等を論じることはできない。

②建物の時期・性格等について

建物の時期 礎石建物は、出土遺物から考える13世紀後葉〜14世紀初頭の建立とみて、建築史的にも問題はない。

建物の性格 建物の平面形式や立派な礎石等からみて、僧坊ではなく本堂形式の仏堂と考えるのが妥

当である。

門について 阿弥陀寺調査地の門は薬医門とみてよいが、礎石建物の規模からみて、やや簡素な印象である。同等の現存建築の場合、楼門を伴う例が多い。

間面記法について 阿弥陀寺文書の「在庁官人等庁宣棟札銘」〔1200（正治2）年〕に「浄土堂壹宇七間四面」「薬師堂壹宇同」の記載があるが、この頃になると間面記法は使われなくなるのが一般的であり、もし「七間四間」等であれば、礎石建物が「浄土堂」や「薬師堂」等に相当する可能性もある。

（2）阿弥陀寺の現存諸堂について（第44・45図）

礎石建物との比較検討のため、現存する主要建築について略測を行なった（第44図）。諸堂の来歴等は以下のとおりである。

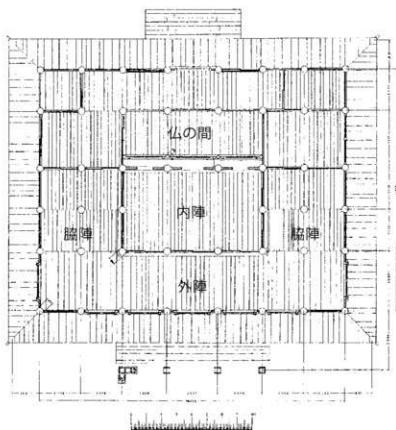
本堂 創建時期不詳。弘安4年（1281）史料に初出。文明16年（1484）焼失か。享保16年（1731）再興。阿弥陀寺に現存する最大の堂宇。かつては本堂東側に隣接して庫裏が所在したが、昭和初期に現在地に移転している。なお、明治期の絵画資料に描かれた庫裏と現在の庫裏とは、棟方向・規模ともに異なる。

開山堂（御影堂） 創建時期不詳。文明16年（1484）焼失、翌年再建。宝永6年（1709）再興、弘化3年（1846）再建。かつては重源上人像・鉄宝塔等が納められていた。

護摩堂（薬師堂） 正治2年（1200）の文書に「薬師堂」の記載があり、七間四面であったとされ

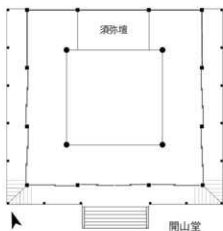
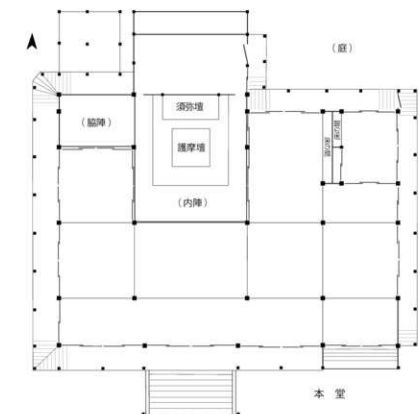


和歌山県道成寺本堂



第43図 和歌山県道成寺本堂平面図（S=1/250）

（『重要文化財道成寺本堂・仁王門修理工事報告書』に加筆）



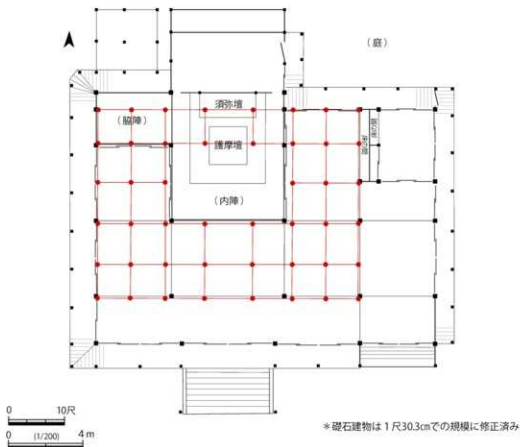
第 44 図 阿弥陀寺現存建物略測図

る。文明 16 年 (1484) 焼失、享保 16 年 (1731) 再興。
念仏堂 (浄土堂) 建久 8 年 (1197) 段階で存在。正治 2 年 (1200) の文書に「浄土堂壱字七間四面」の記載。文明 16 年 (1484) 焼失か。元禄 6 年 (1693) 再興。その後大破、弘化 3 年 (1846) 再建。明治 35 年 (1902) 焼失、同年再建。明治期の絵画資料では、縁が四圍ないし前面三方に描かれる。

経堂 (経蔵) 建久 8 年 (1197) 段階で「経蔵」が存在。文明 16 年 (1484) 焼失、享保 4 年 (1719) 再興。現存礎石および明治期の絵画資料から、縁は四圍に廻っていたと考えられる。

以上の諸堂の略測図を検討したところ、礎石建物と本堂の類似点が明らかになった。本堂のうち、内陣とその左右の間及びこれらの前面の部分は、礎石建物の平面と多くの部分で重なり合う。さらに、1 尺 31cm で設計されている礎石建物の平面形式を本堂再建期の尺度 (1 尺 30.3cm) に置き換えるなら、全体規模や主要な柱の位置の多くがほぼ一致する (第 45 図)。

したがって、本堂の中核部分は、礎石建物の建築プランに若干の変更を加え、尺度を



第45図 本堂と礎石建物の比較（赤線が礎石建物）

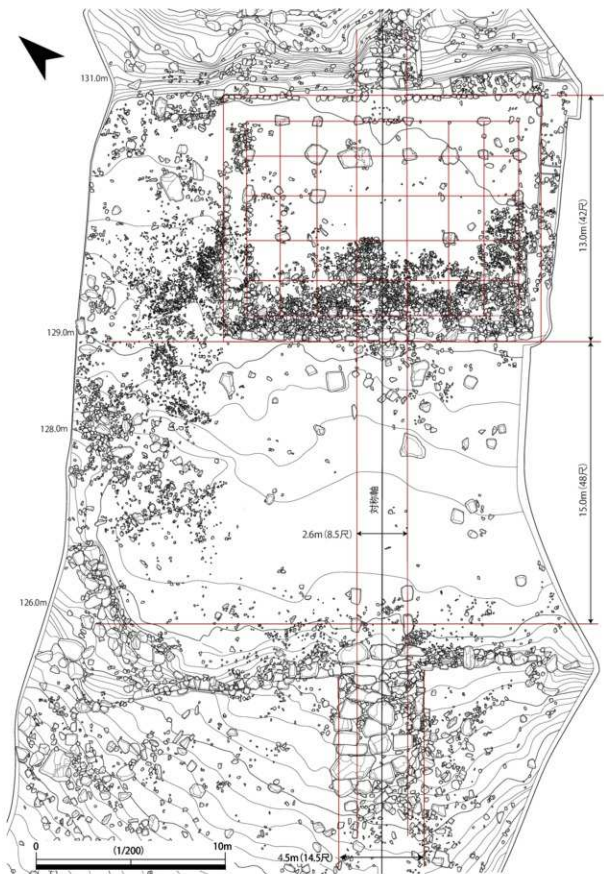
変えて設計されたものであり、その南・東・北西に部屋を付加して現在の本堂となったと理解できる。言い換えれば、部分的にとはいえ13世紀後葉～14世紀初頭の礎石建物のプランが現在まで引き継がれていることになる。

これに加え、本堂と護摩堂、念仏堂の類似性も指摘できる。現護摩堂は、本堂内陣部分とほぼ同規模であり、念仏堂は護摩堂の須弥壇以外の部分と一致する。3者に共通するのは約6m（20尺）四方の平面であり、護摩堂の須弥壇が壁体構造等からみて明らかに後補であることを考慮すれば、本堂内陣も同様に拡張されたものである可能性が高い。

（3）建物の計画的配置（第46図）

中段の遺構は計画性をもって構築されており、石段1、門、礎石建物、石段2の中央を結ぶ線を軸として左右対称に配置される。この軸線は北東－南西方向（N 48° E）であり、東西・南北を志向しない。寺域前面には防府平野東部の眺望が広がり、軸線の延長上約3.5kmには周防国府が存在することから、周防国府を強く意識して構築された可能性が高い。

礎石建物中央の柱間と門の柱間を同長（8.5尺）とし、軸線に対して門および基壇・礎石建物の主軸を直交させる。また、門の本柱と基壇地覆石前面の距離を15.0m（48尺）、石段1の幅を4.5m（14.5尺）とするなど、整然とした設計である。



第 46 図 阿弥陀寺調査地の建築計画

2 基壇及び平坦面の造成について

(1) 調査地の自然地形 (第 47 図)

調査地の各所に設定したトレンチ及び土層断面等の観察をもとに、本調査地における基壇及び平坦面造成時の自然地形について考えてみよう。

まず、調査地の縦断面(北東-南西)をみると、中段では、基壇に設定したトレンチ 7 (第 24 図) 北東隅の標高 129.8 m 付近、同トレンチ南西隅の標高 128.7 m 付近において、大石や中小の礫を含む堆積がみられ、トレンチの北東隅から南西隅にかけて緩やかに傾斜する。この堆積は、土層 C (第 7 図) でも確認した堆積層で、調査地東側の谷部からの緩やかな自然堆積と考える。

これに対して、石垣西側に直交するよう設定した土層 D (第 11 図) では、標高 126.0 m から 126.4 m 付近にかけて緩やかな傾斜をなす旧地表面の上層に、造成土を盛って平坦面を形成する状況を確認した。この旧地表面は、調査地造成より前の土石流堆積によって形成されたと考える。先述のように、基壇とその周辺では谷堆積層が広がることから、中段南側のどこかで旧地表面と谷堆積層との境界が存在すると推測する。

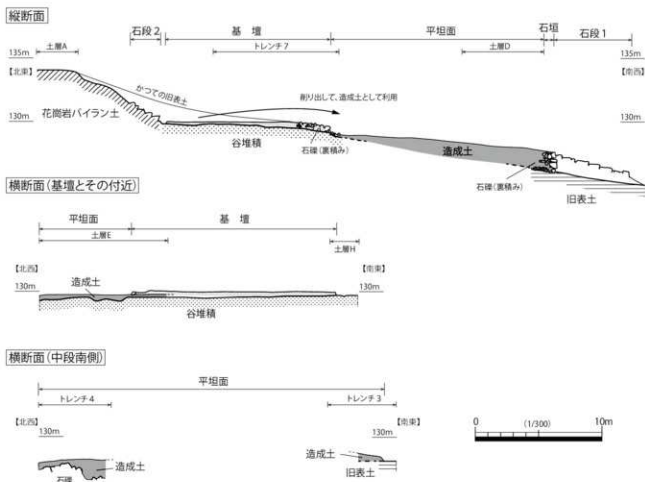
一方、調査地上段、及び中段から上段にかけての斜面をみると、上段の土層 A (第 7 図) では、標高 134.0 m 付近から南西斜面にかけて基盤となる花崗岩バイラン土を確認でき、その上層に厚い土石流が堆積していた。同様に、石段 2 の最上段の踏石より上、標高 131.5 m 付近で花崗岩バイラン土が露出することから、この斜面では、尾根を基盤層まで削り出し石段 2 を築いたと考える。これは、土層 D で確認した石垣付近の旧地表面と、トレンチ 7 で確認した基壇部分の基盤層の勾配がいずれも約 10° となる一方、石段 2 のある斜面の勾配が約 30° となり、後者の勾配が急上昇することからも指摘できる。すなわち、石段 2 を含む基壇及びその周辺は、尾根を削り出して築かれたと考える。

次に、横断面(北西-南東)をみると、基壇北西辺付近から基壇の外側にかけて設定した土層 E (第 24 図) では、基壇上面から約 70cm 下の標高 129.5 m 付近で基盤層となる谷堆積を確認でき、基壇より北西側は平坦面を造成していた。同様に、基壇南東辺の土層 H や土層 I (第 25 図) では、標高 130.0 m 付近でこの堆積層を確認した。すなわち、中段の基壇部分では、基盤となる谷堆積層が東側から西側にかけて緩やかに傾斜する。

以上から、本調査地における当時の自然地形を復元すると、基盤層となる花崗岩バイラン土の上層を土石流由来土が覆い、尾根の旧地表面を形成するのが通常であったが、基壇及びその周辺は東側谷部からの堆積によって基盤層が形成される。本来、基壇や石段 2 が位置する基盤層の上層にも、土石流由来の旧地表面が形成されていたが、境内を築造する際に削られたと考える。

(2) 基壇及び平坦面の造成方法 (第 47・48 図)

中段北西辺に設定したトレンチ 4 (第 10 図) の北西半分では、大石や礫を集中的に積み上げ、その上に造成土を盛っていく状況を確認した。同様に、土層 D やトレンチ 5・6 (第 12・13 図) では、石垣の背後に裏詰めまたは裏積み状に大石や礫を積み上げる状況を確認した。これらの石積みは、平坦面を造成する際に、造成土が流れ出さないようにする土留めの役割を果たしたと考える。中段北西



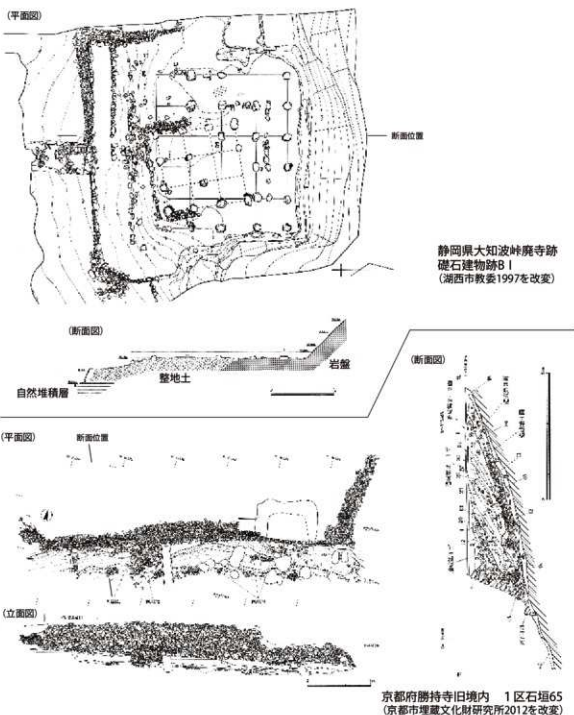
第 47 図 調査地の断面模式図

辺(トレンチ4)では、石積みを行った後、厚さ20～30cm程度ずつ造成土を盛っていくのに対して、石垣の裏側(土層D)では、石積みの基底部分を積んだ後、厚さ10～40cmずつ造成土を盛り、ある程度の高さになると、また石積みを行うというふうに、盛り土と石積みをくり返し行って裏積みした上で、石垣を築いたと考える。土層Dでは、平坦面の高さまで造成土を盛るのに、少なくとも3回に分けて裏積みが行われたことを確認した。

基壇の造成においても同様な方法が確認できる。基壇正面(トレンチ7)では、外装の石積みの際に、裏積みを行い土留めとし、その上から造成土を盛っている。これに対して、基壇北西辺や南東辺では、石列を並べるのみである。

このような平坦面の造成には、裏積みや土留めに利用した大石や礫、造成土が必要となる。とくに、中段南側の平坦面の大部分は造成されたと思われるので、相当量の石や土が利用されたと考える。そして、基壇造成土は谷堆積由来の砂礫土、平坦面造成土は土石流由来土であり、石は周辺で採れる花崗岩や片岩を主体とする。このことから、中段の基壇及びその周辺の平坦面を造成する際、尾根斜面を削り出して生じた排土や石を使用したとみるのが、労力等の面を勘案しても効率的であろう。

発掘調査によって造成方法を把握した事例として、静岡県湖西市大知波峠摩寺跡や京都府京都市勝持寺旧境内が挙げられる。前者では、10世紀中頃の仏堂に比定される礎石建物を築く際、岩塊の斜面を削って平坦面とし、その際に削り出された土や礫を前方に押し出し整地土とし、砂礫が流れな



第 48 図 山寺における平坦面造成の例

いよう石垣を築く状況が確認されている。後者では、15 世紀後半の石垣構築を伴う平坦面の造成にあたり、先に列石及び石垣を構築して土留めとした上で、その部分に礫敷や造成土を入れた状況が確認されている。このように、本調査地における基壇及び平坦面の造成方法は、当時の山林に寺院を築造する際の方法として、一般的なものともてよいだろう。

参考文献

- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2012『勝持寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-5
湖西市教育委員会 1997『大知波峠麻寺跡確認調査報告書 平成 8 年度』湖西市文化財調査報告第 37 集

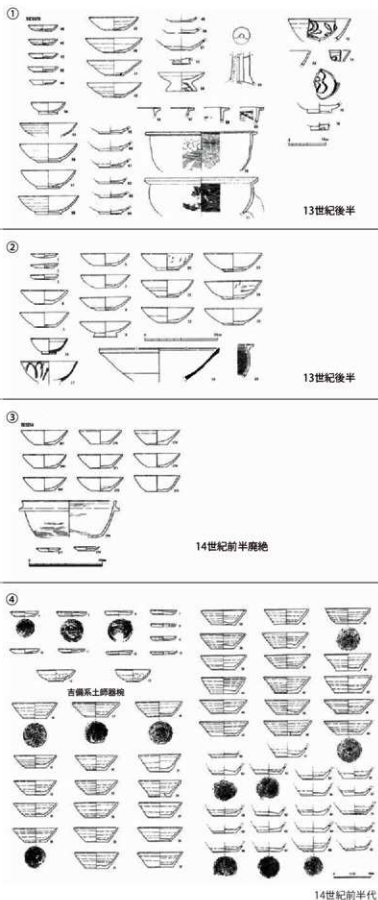
3 出土遺物の年代 (第 49～50 図)

出土遺物で問題となるのは、基壇直上または土流堆積土最下層出土の土師器の年代推定である。基壇直上の資料のうち図化可能な個体(第 34 図 1～7)はいずれも底部片であるため、詳細な検討には耐えない。しかし、底部径でみれば 5.2cm 前後のものと 6.3cm 前後のものがあり、前者は土流堆積土最下層出土の資料(第 34 図 8～11)の中に同様の個体が見出せる。また、両資料の土師器は器厚や体部下半の形状も類似する。このため、ここでは第 34 図 8～10 の年代を検討することで基壇の構築年代を考えたい。

土師器杯の年代を考える上で比較検討の対象とするのは以下の 4 遺構出土資料である(第 49 図)。

①周防国府跡 SE6578(周防国府跡調査会他 1998) 13 世紀後半に位置付けられる資料である。土師器皿・杯・碗、瓦質土器羽釜・足銅等がある。転載した資料のほかに瓦や窯道具を含む。

②周防国府跡 SE9172(防府市教委 2008) 13 世紀後半に位置付けられる資料である。土師器皿・杯・碗、青磁碗、東播系須恵器鉢・足銅等がある。杯・碗は①に比べ小型化する傾向にあることから 13



第 49 図 年代検討のための比較資料

世紀後半という年代幅の内でも後よりの年代が想定される。

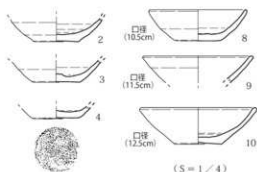
- ③周防国府跡 SE3254 (防府市教委 2015) 14 世紀前半に廃絶した遺構の資料である。土師器皿・杯・羽釜ほかがある。碗が失われ、杯はさらに小型化する。②より後出する資料と考えられる。

- ④中津居館跡 SK100310 (岩国市教委 2012) 土師器皿・杯・碗の一括廃棄土坑の資料であり、14 世紀前半代の資料である。体部の立ち上がりは直線的で、ロクロ目が顕著である。前 3 者と比較した場合、口径

に比して底径がやや大きい。共存する吉備系土師器碗 (14・15) の年代観は「14 世紀第一四半期から第二四半期」とされる。阿弥陀寺基壇の土器がもつ形態的特徴は、内湾気味の体部と丸みのある口縁端部にあり、④はこの特徴を有しない。また口径 10.5 ～ 12.4 (いずれも推定値) cm という法量を考慮するなら、①はこの範囲を超えている。残る②と③を比較した場合、より形態的に近似するのは③である。したがって、基壇に伴う土器の年代は 13 世紀後半の後よりの時期、すなわち 13 世紀後葉ないし 14 世紀初頭の所産とみるのが妥当であろう。

挿図出典

- ①周防国府跡調査会・防府市教育委員会 1998『周防国府跡 第 99 次発掘調査概要 (SK - CC・CD)』
 ②防府市教育委員会 2008『周防国府跡第 157 次調査 (SK - PV)』『平成 18 年度 防府市内遺跡発掘調査概要』
 ③防府市教育委員会 2015『周防国府跡発掘調査報告 4 - 国府南限域の調査 -』
 ④岩国市教育委員会 2012『中津居館跡 (旧加陽和泉寺居館跡)』

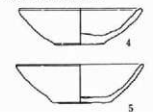


第 50 図 阿弥陀寺出土の土師器杯

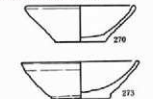
- ①周防国府跡 SE6578



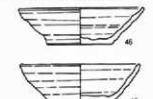
- ②周防国府跡 SE9172



- ③周防国府跡 SE3254



- ④中津居館跡 SK100310



第 51 図 土師器杯比較資料
(第 49 図より抜粋)

4 火葬遺構の評価（第15表、第52～56図）

今回検出した火葬遺構は、基壇盛土中に埋め込まれており、基本的に火葬直後の状況を保つと考えられる。この火葬遺構において、石で囲まれた空間は、最大で長さ100cm、幅40cm、高さ30cm程度と考えられるが、側面の石が外傾して据えられているため、空間下部での幅は最大35cm程度であり、底面に据えられた石の上面レベルも一定ではない。以上の点から、この火葬遺構はあくまで燃焼のための施設であり、棺は土坑の上にわたされた木材に載せられて茶毘に付されたとみられる。これは側面の石の上面が被熱により赤化することとも整合する。こうした例は12世紀末～13世紀初に比定される京都府西陣町遺跡SX13001でも指摘されている。その場合、阿弥陀寺の火葬遺構内に据えられた石は棺の安置ではなく、通風確保や防湿による燃焼効率向上を意図したものと理解される。

火葬遺構を覆う礫敷きは、基壇前面の礫敷きとは構築法、上面レベル等に違いがないことから、両者に大きな時期差は想定できない。したがって、火葬遺構の構築は基壇構築時ないしその直前と考えられる。なお、放射性炭素年代測定（AMS法）の結果、火葬遺構の年代は13世紀中頃～末を示していた。そして、出土人骨の部位は長管骨が多いほか、300～600℃の温度で焼かれたことも判明しており、炭化材として残る木材（サクラ属やアカガシ亜属）でも十分焼骨可能であることがわかった。

第15表及び第52～56図に山口県内の火葬遺構を集成した。調査報告書ではいずれも墓として扱われているが、拾骨を完全に否定できる例はないため、火葬遺構とすることが妥当と判断した。吉母浜遺跡では、ほぼ全身の部位が確認できる例の多い「火葬墓」19基すべてで第2頸椎（のど仏）が残されていないことが指摘されており、逆に、10世紀代の岩国市上久宗遺跡ST-1では骨蔵器に納められた火葬骨は第2頸椎を含むものであった。



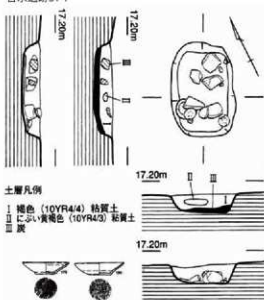
第52図 山口県内の火葬遺構の分布

第15表 山口県内の火葬遺構一覧

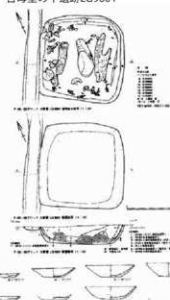
	遺跡名	遺構名	時 期	棺台 鉄釘	備 考
1	吉永遺跡	ST1	15世紀後半	○	
2	吉母堂の下遺跡	LG9601	14世紀(後半)	○ ○	棺台は石と半截丸太材。火葬後に土師器供献
3	吉母浜遺跡	LG6	室町時代	○ ○	火葬後に土師器供献
4	吉母浜遺跡	LG7	室町時代	○ ○	
5	吉母浜遺跡	LG8	室町時代	○ ○	
6	吉母浜遺跡	LG11	室町時代	○	
7	吉母浜遺跡	LG12	室町時代	○	
8	吉母浜遺跡	LG13	室町時代	○	火葬後に土師器供献
9	吉母浜遺跡	LG14	室町時代	○	
10	吉母浜遺跡	LG15	室町時代	○ ○	火葬後に土師器供献
11	吉母浜遺跡	LG18	室町時代	○ ○	
12	吉母浜遺跡	LG23	室町時代	○	
13	吉母浜遺跡	LG25	室町時代	○	火葬後に土師器供献
14	吉母浜遺跡	LG26	室町時代	○ ○	
15	吉母浜遺跡	LG27	室町時代	○	火葬後にアワビ殻・土師器供献
16	吉母浜遺跡	LG28	室町時代	○ ○	
17	吉母浜遺跡	LG66	室町時代	○ ○	
18	吉母浜遺跡	LG118	室町時代	○ ○	
19	吉母浜遺跡	LG119	室町時代	○ ○	
20	吉母浜遺跡	LG120	室町時代	○ ○	
21	吉母浜遺跡	LG121	室町時代	○ ○	
22	綾羅木郷台地遺跡(明神地区)	ST-1	?		
23	綾羅木郷台地遺跡(明神地区)	ST-2	室町時代か	○	環状鉄製品2
24	朝田墳墓群第Ⅲ地区	火葬墓43号	中世		
25	朝田墳墓群第Ⅲ地区	火葬墓64号	中世		
26	朝田墳墓群第Ⅲ地区	火葬墓71号	中世	○	
27	朝田墳墓群第Ⅲ地区	火葬墓81号	中世	○	
28	赤市原遺跡第Ⅰ地区	P-3	?		人骨なし。棺台撤去か
29	上り熊遺跡Ⅰ地区	ST109	?		
31	上り熊遺跡Ⅲ地区	ST302	?		人骨なし
31	上り熊遺跡Ⅴ地区	ST501	?		人骨なし
32	上り熊遺跡Ⅲ地区	ST302			
33	上り熊遺跡Ⅵ地区	ST613			火葬後に土師器供献
34	上り熊遺跡Ⅵ地区	ST614	?		火葬後に土師器供献
35	岩瀬遺跡	ST-2	14世紀前半		土坑内面に貼石。人骨なし。火葬後に土師器供献
36	奥正権寺遺跡	ST-1	?	○ ○	
37	下田遺跡第Ⅴ地区	BP-1	?	○	
38	阿弥陀寺	火葬遺構(SX02)	13世紀後半~14世紀初	○ ○	
39	梅ノ木原遺跡Ⅲ地区	7号土壇	?		
40	梅ノ木原遺跡Ⅲ地区	8号土壇	?		
41	上石田A遺跡	ST01	?	○	

*土坑底面の石については、調査報告書にしたがって棺台と表記する

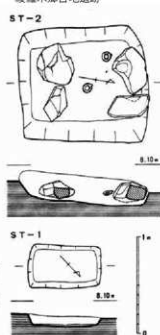
吉永遺跡ST1



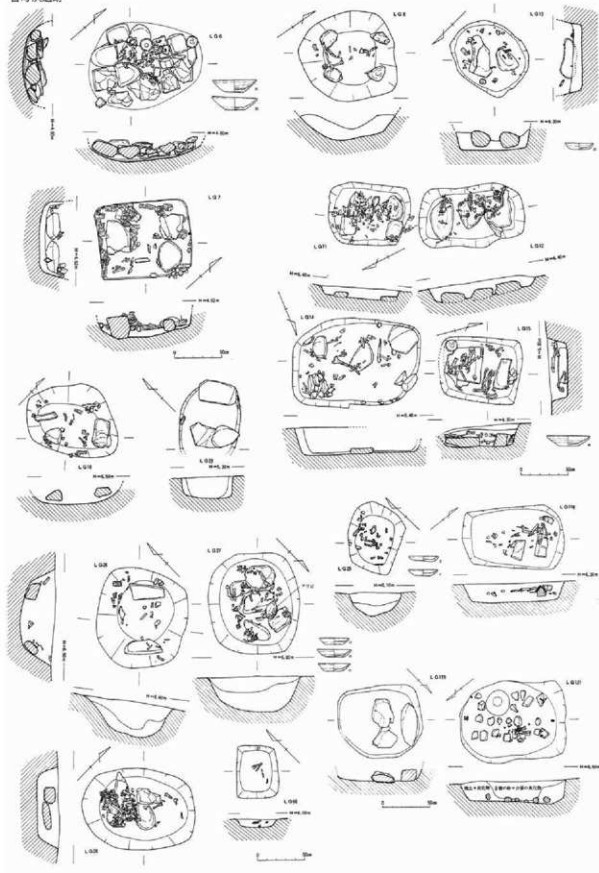
吉母堂の下遺跡LG9601



綾羅木郷台地遺跡

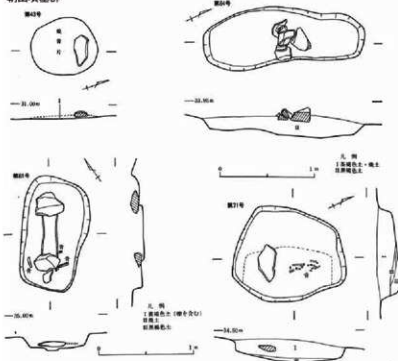


第53図 山口県内の火葬遺構(1)

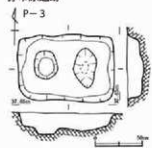


第 54 図 山口県内の火葬遺構 (2)

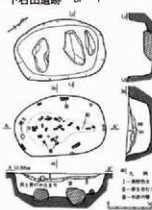
朝田墳墓群



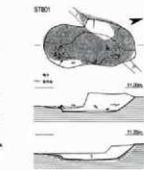
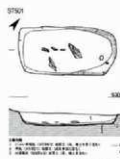
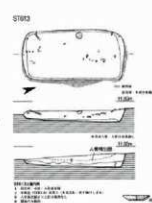
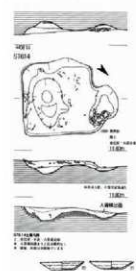
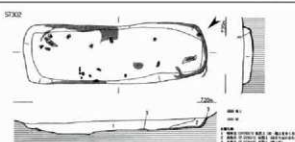
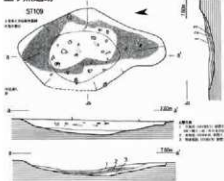
弥市原遺跡



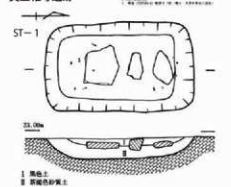
下右田遺跡 BP-1



上り熊遺跡



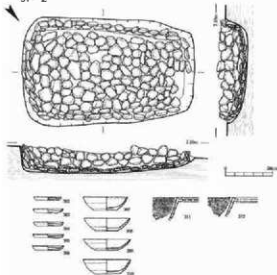
奥正権寺遺跡



第 55 図 山口県内の火葬遺構 (3)

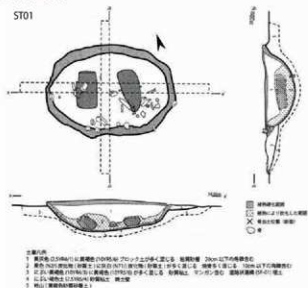
岩淵遺跡

ST-2



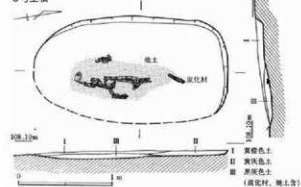
上石田A遺跡

ST01

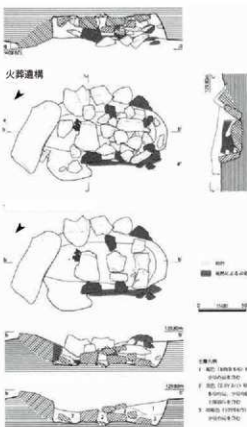


梅ノ木原遺跡

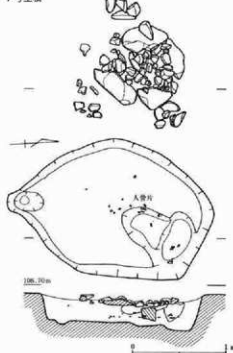
8号土壇



阿弥陀寺



7号土壇



第 56 図 山口県内の火葬遺構 (4)

山口県では 13 遺跡 41 例の火葬遺構が確認されている。土坑の形状、「棺台」の有無、規模の大小等で分類が可能であるが、ここでは割愛する。供献品を伴うものは 8 例あり、火葬後の供献とみられる土師器杯・皿が基本である。山口県の火葬遺構では鉄釘が出土する例が比較的多く、41 例中 14 例 (34%) にのぼる。さらに「棺台」をもつ 25 例中 13 例 (52%) が鉄釘を伴う。逆に「棺台」のない例で鉄釘が出土するのは 1 例のみである。

阿弥陀寺の火葬遺構の特徴は、「棺台」に加えて土坑壁面へも石を配する点であり、県内には近似する例がない。ただし、配する石の大きさと密度の差を度外視すれば、ほぼ同時期の岩淵遺跡 ST-2 との共通点が指摘できる。両者は山口県における最古段階の火葬遺構であり、この段階から異なる系統の火葬遺構が防府の地で並存したことがわかる。

出典

- (財)山口県教育財団・山口県教育委員会 1988『綾羅木郷台地遺跡(明神地区)一昭和 62 年度県営園地整備事業に伴う発掘調査報告一』山口県埋蔵文化財調査報告第 112 集
- 下関市教育委員会 2002『吉母宮の下遺跡 山口県下関市大字吉母宮の下地内吉母宮の下遺跡発掘調査報告書』下関市埋蔵文化財調査報告書 61
- 下関市教育委員会 1985『吉母浜遺跡』
- (財)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 1999『吉永遺跡(Ⅲ-東地区)一平成 10 年度県営園地整備事業に伴う発掘調査報告一』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 10 集
- 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1977『朝田墳墓群Ⅱ・浦ノ峰 1 号墳』山口県埋蔵文化財調査報告第 33 集
- 建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1982『弥市原・東禅寺』山口県埋蔵文化財調査報告第 63 集
- (財)山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター 2008『上り熊遺跡Ⅰ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 66 集
- (財)山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター 2009『上り熊遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 70 集
- (財)山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター 2010『上り熊遺跡Ⅲ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 73 集
- (財)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 2001『岩淵遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 24 集
- 山口県教育委員会・山陽工業株式会社 1984『奥正権寺遺跡Ⅰ』山口県埋蔵文化財調査報告第 77 集
- 日本道路公団・建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1978『下右田遺跡 第 1・2 次調査概報』山口県埋蔵文化財調査報告第 43 集
- 日本道路公団広島建設局徳山工事事務所・山口県教育委員会 1987『梅ノ木原遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第 98 集
- 田布施町教育委員会 2014『上石田 A 遺跡・上石田 B 遺跡・重長 A 遺跡発掘調査報告書』田布施町埋蔵文化財調査報告書第 5 集
- 周東町・山口県埋蔵文化財センター 1995『上久宗遺跡一久宗工業団地造成工事に伴う発掘調査一』山口県埋蔵文化財調査報告第 174 集
- 狭川真一 2011『中世墓の考古学』高志書院
- 中世墓資料集成研究会 2004『中世墓資料集成一九州・沖縄編(1)一』、『中世墓資料集成一九州・沖縄編(2)一』、『中世墓資料集成一四国編一』
- 中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成一中国編一』
- 中世墓資料集成研究会 2006『中世墓資料集成一近畿編(1)一』、『中世墓資料集成一近畿編(2)一』
- (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1985『第 2 章 長岡京跡右京第 130 次(7ANKNC 地区)調査概要一右京五条三坊十四町・西陣町遺跡一』長岡京市埋蔵文化財調査報告書第 2 集

5 礎石建物及び旧境内の歴史的位置

(1) 礎石建物及び旧境内の性格について (第57図)

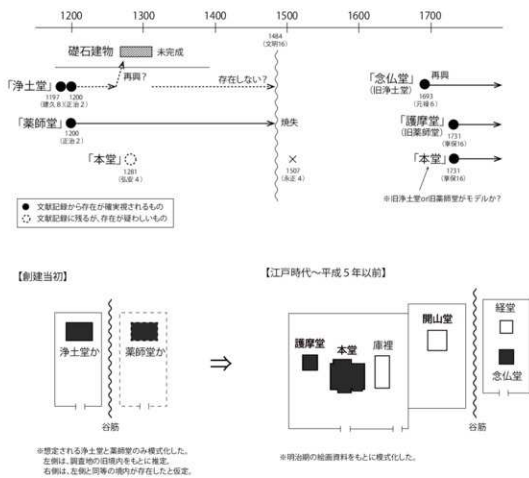
本調査地で確認された基壇をもつ礎石建物は、建物や礎石の規模、堂内を内陣と外陣に分ける構造的特徴等から、本堂形式の仏堂と推定できる。そして創建年代は、土器の年代や自然科学分析の結果から13世紀後葉～14世紀初頭に比定した。阿弥陀寺関連の文献に記載のある堂宇のうち、本堂形式に相当する可能性があるものとして、「本堂」、「浄土堂」(現念仏堂)、「薬師堂」(現護摩堂)の3字が挙げられる。本堂は1281(弘安4)年(「大政官牒」)、浄土堂は1197(建久8)年(「鉄塔銘」)、薬師堂は1200(正治2)年(「在庁官人等庁宣棟札銘」)の記録が初見であり、浄土堂と薬師堂はほぼ創建時期の記録とみてよいが、本堂に関する記録は創建時期を直接示す内容とはいえない。

一方、1484(文明16)年には、堂塔のすべてを焼失したとの記録がある(「御影堂棟札銘」他)。同記録には、伽藍を構成する堂宇及び僧坊の名が列挙されるにもかかわらず、3字の堂については、「薬師堂」の名が記されるのみで、「本堂」と「浄土堂」は登場しない。しかし、火災後の1507(永正4)年には本堂の再興を願う記録(「間田弘胤奉書」)があり、1693(元禄6)年には念仏堂(旧浄土堂)が修理され、1731(享保16)年には本堂が再興したとする記録(いずれも「護摩堂本堂棟札」)があることから、2字の堂が火災時か、その前後に失われたとみるのが穏当であろう。とはいえ、3字の堂のうち、火災の時期まで存続していたことが確実とみられるのは薬師堂のみである。

今回の調査で確認した礎石建物及び旧境内からは、創建年代と異なる時期の遺物が直接遺構に伴って出土しておらず、その存続期間は創建年代の幅に収まるほど短期間と考える。この礎石建物が、当時の阿弥陀寺境内を構成する堂宇の一つであったとすれば、その創建時にすでに存在していた薬師堂は、礎石建物の候補として少なくとも除外される。これに対して、礎石建物の創建時まで存続していたことがはっきりしない本堂と浄土堂は候補として挙げられる。このうち、「本堂」が登場する1281(弘安4)年の記録は、先述のとおり、直接的にその創建時期を示すものではない。そうすると、阿弥陀寺の創建時期に近い記録の中に、確実に本堂といえるものは認められないこととなる。それに加えて、本堂と薬師堂・浄土堂とが併記された記録もみられない。この記録に登場する「本堂」は、浄土堂のことを指す可能性があらう。

さらに、先述の1200(正治2)年の記録には、薬師堂と浄土堂について「七間四面」の建物と記されており、間口七間の「七間堂」に相当する2字の堂が二棟一対として存在していた可能性がある。たとえば、兵庫県小野市浄土寺は、建久年間に重源によって創建された寺院であるが、西に浄土堂(阿弥陀堂)、東に薬師堂(本堂)を配す、二棟一対の配置をとる。これは、西側を阿弥陀如来の住む西方極楽浄土、東側を薬師如来が住む東方淨瑠璃世界に擬えたことによる。今回の礎石建物も間口七間であることから、「浄土堂」とみることが可能である。ただし、当時の「薬師堂」が現在の境内に存在したとすれば、西に薬師堂、東に浄土堂という配置となり整合しない。伝承どおり、現念仏堂を浄土堂とし、礎石建物を薬師堂と比定すれば整合するが、礎石建物に火災痕跡はないことから、文明年間の火災時の薬師堂は、今回の礎石建物の場所ではない。

さて、今回の礎石建物を「浄土堂」と考えるには、他に2つの問題点がある。第1に、文献記録上の「浄



第57図 主要堂宇の変遷（上）とその配置（下）模式図

土堂」の創建時期に当たる12世紀末と、今回の礎石建物の創建時期である13世紀後葉～14世紀初頭との間に100年近い空白期間があること、第2に、江戸時代の1756（宝暦6）年の記録（「周防佐波郡牟礼村華宮山阿弥陀寺略縁起」）。以下「縁起」と呼ぶ）には、「本堂」と「念仏堂」（旧浄土堂）が併記され、この時の呼称が現在まで用いられていることである。

第1の点について、今回の礎石建物が創建される13世紀後葉～14世紀初頭までに、浄土堂は一度破壊もしくは消失しており、本調査地に再興しようとしていたのではないだろうか。しかし、今回の調査の結果が示すように、出土遺物や生活痕跡が少ないこと、建物の礎石の欠落の仕方が不規則であり柱痕跡も残らないこと、石段2が途中までしか築かれていないこと、山門に附属すべき築地塀や杭列等、境内を圍繞する施設の存在が確認できないことから、礎石建物及び旧境内は、基壇及び礎石の一部と石段・石垣のみを築き、何らかの事情で未完成に終わり再興されないままだった可能性がある。そう考えると、文明年間の火災の際に、「本堂」及び「浄土堂」の名称が記載されていないことも首肯できる。

第2の点について、江戸時代の「縁起」は、阿弥陀寺の堂塔が焼失してから、300年近く経過して書かれたものであり、阿弥陀寺創建当時の様子をそのまま伝えていないか、恣意的に書き換えられた可能性がある。創建時期に近い1197（建久8）年の記録（「鉄塔銘」）には、阿弥陀寺を構成する堂塔について、まず「浄土堂」が挙げられ、そこに「阿彌陀丈六像一體」を奉安するとあり、本堂の

記載はない。「薬師堂」が併記されるのは、3年後の記録（『在庁官人等庁宣棟札銘』）を待たなければならぬが、創建当初は浄土堂と薬師堂が重視されていたことをうかがわせる。

これに対して、「縁起」には、はじめて「本堂」の詳細が記されるほか、浄土堂や薬師堂についても江戸時代の堂名である「念仏堂」や「護摩堂」に書き換えられている。「縁起」は、過去の記録を参考として記されたものであるが、記録と異なる堂宇を加えたり、江戸時代の堂名を過去の堂宇にそのまま使用する等、脚色がみられる。一方、今回の礎石建物と現在の本堂とは平面形式が類似するが、念仏堂と護摩堂は本堂の内陣部分の平面形式を取り入れた可能性がある（第Ⅴ章1参照）。すなわち、創建当初の浄土堂と薬師堂の平面形式である「七間堂」とはならず、新たな建物として再興されている。

このように、阿弥陀寺創建当初は、浄土堂と薬師堂を主体とする境内構成であったが、江戸時代に現在の本堂を主体とする境内へと改変し再興するに当たって、新たに創建する念仏堂と護摩堂については、かつての浄土堂と薬師堂の役割を果たす堂宇として再解釈したものとする。

（2）阿弥陀寺の空間構成と周辺寺院との関係

調査前、創建当初の阿弥陀寺境内は、現在の仁王門及び湯屋から、念仏堂や鐘楼のある一画に至る参道を含む東側の尾根筋に、その主要部分があつたと想定されていたが、今回の礎石建物の発見により、さらに東側の尾根まで寺域が広がっていたことを確認できた。今回の礎石建物が、先述のとおり、浄土堂に相当するのであれば、それに対応して薬師堂も存在するはずである。その位置が、現在の境内の位置に存在したのかどうかは不明であるが、浄土堂を西側に、薬師堂を東側に配する原則に従えば、さらに東側に寺域が広がる可能性が高い。実際、今回の調査地から谷筋を一つ挟んだ東側の尾根にも平坦面が確認されている。

そして、今回みつかった旧境内は、尾根を単位として広範な平坦面を築き、そこに本堂形式の一字の堂を建立している。すなわち、谷筋によって境内を分け、尾根を単位として1～2宇の堂を配置し、その下方の谷筋の両側に僧坊を配するという空間構成を採った可能性がある。これは、現在の境内の空間構成にも踏襲されているとみられる。同様な例は多いが、その一つとして福岡県首羅山遺跡が挙げられる。同遺跡では、谷筋を参道とし、その最高所に伽藍域となる平坦面を築き、谷筋の両側に複数の坊院群と推定する平坦面を配するという空間構成をとる点で類似する（久山町教委2012）。しかし、一箇所の平坦面に複数の主要な堂宇を配して、伽藍空間とする点は、阿弥陀寺と異なっている。

さて、阿弥陀寺は、山の斜面に築かれることからみて、「山寺」として認識された寺院といえる。その立地から、里山の中腹や山麓、丘陵、あるいは谷や沢の奥等に立地する「里山系寺院」（牛山2012）の一種と考える。阿弥陀寺から見下ろせる防府平野には、周防国分寺等の平地寺院があり、これらの平地寺院に対する山の寺という認識であっただろう。ただ、阿弥陀寺は東大寺別所として周防国の国務が委ねられ、歴代の住職は国司の任に当たるなど、国庁寺とも呼べる性格をもつ。これに対して、阿弥陀寺創建当時の国分寺は、西大寺の末寺となりようやく再興を果たすという状況であり、阿弥陀寺の勢力が強大であったと想定される。両者の関係や、阿弥陀寺西方の敷山に建立された密教系寺院である駿観寺等、周辺寺院との関係については、立地や空間構成の面も踏まえて検討していく必要がある。

今回の調査で明らかとなった礎石建物及び旧境内は、出土遺物が少なく、未完成の可能性もあることから、不明な点が多い。今後、調査地周辺の平坦面の把握から、阿彌陀寺旧境内の空間構成を紐解く等、今回の礎石建物の位置づけがより詳らかになることを期待したい。

さいごに、今回の発掘調査の成果について、旧境内に関するものを中心にまとめておく。

- ①出土土器や年代測定の結果から、基壇をもつ礎石建物及び石段や石垣等、旧境内を構成する遺構の年代は、13世紀後葉～14世紀初頭に比定できる。この年代は、礎石建物の平面形式等、建築史的にみても齟齬がない。
- ②基壇をもつ礎石建物は、桁行7間、梁行5間の平面形式と考えられる。この平面形式や立派な礎石等からみて、本堂形式の仏堂と考えるのが妥当である。
- ③礎石建物に伴う瓦類は出土していないことから、檜皮葺や板葺等の屋根であったと想定される。ただし、瓦を葺く前に、建物の築造を取り止めた可能性もある。
- ④平坦面の造成にあたっては、尾根斜面を削り出し、その際の排土や石礫を利用したと考える。すなわち、平坦面の正面には裏積み及び石垣、側辺には大石を積んで土留めとした上で、造成土を盛っていくことを確認した。基壇の造成も同様な方法による。
- ⑤基壇造成土中から火葬遺構を検出しており、構築時期は基壇構築時ないしその直前と考えられる。この火葬遺構は、山口県内でも最古段階に位置づけられる。
- ⑥出土遺物や生活痕跡が少ないこと等から、礎石建物を中心とする旧境内は未完成であった可能性が高い。

参考文献

- 牛山佳幸 2012「山寺の概念」『季刊考古学』第121号、雄山閣出版
- 久山町教育委員会 2012『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町文化財調査報告第16集
- 防府市教育委員会 1979『阿彌陀寺文書』防府史料第28集
- 防府市史編纂委員会 2004『防府市史』通史Ⅰ、原始・古代・中世



第58図 遺構配置図 (オルソ画像)



第59図 石段1平面図・立面図 (オルソ画像)

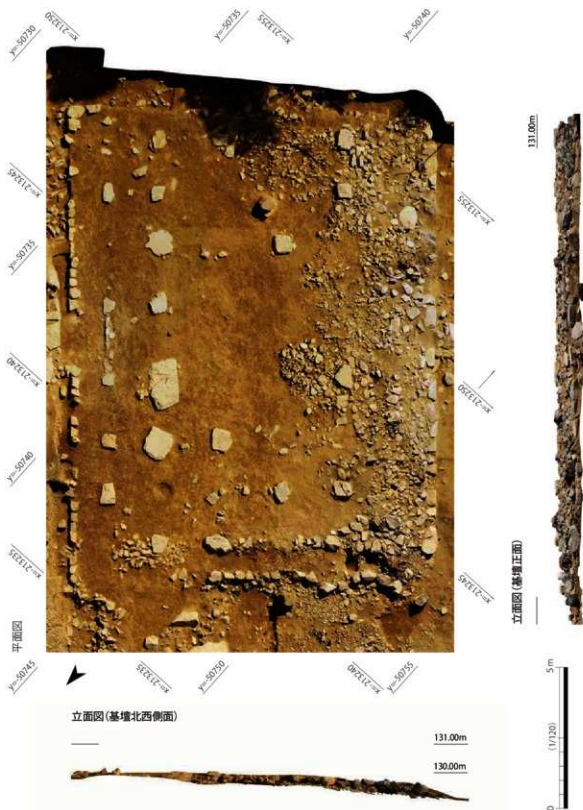


平面図 (正面)

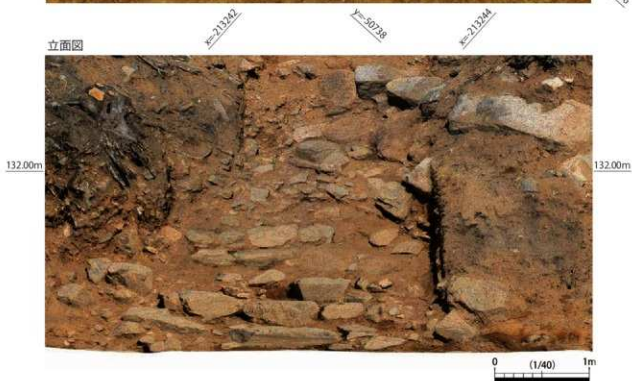
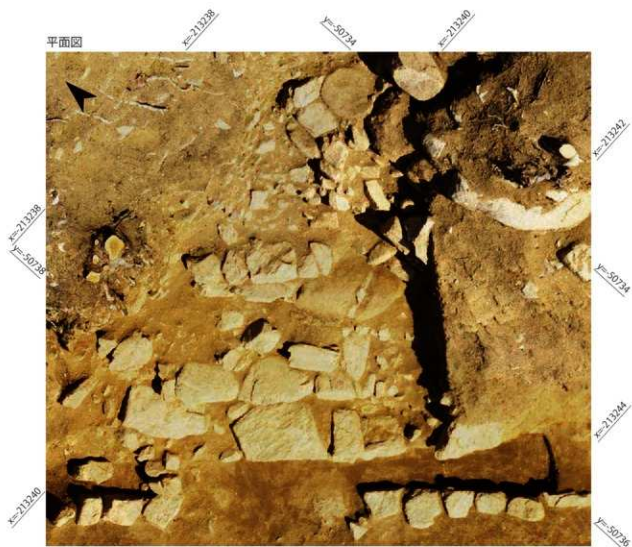
128.00m



第60図 石段1及び石垣平面図・立面図 (オルソン画像)



第61図 基壇をもつ礎石建物平面図・立面図 (オルソン画像)



第 62 図 石段 2 平面図・立面図（オルソ画像）

図 版



図版 1



1 調査地遠景（北西から）



2 現在の阿弥陀寺境内（左）と調査地（右）（南西から）



1 調査地全景（上が北東）

図版 3



1 上段南東壁土層（土層A。西から）



2 中段北 南東壁土層①（土層B。西から）



3 中段北 南東壁土層②（土層B。北西から）



4 中段北東隅土層（土層C。南西から）



5 トレンチ3掘下げ状況（北西から）



6 トレンチ3土層断面（北から）



7 トレンチ1掘下げ状況（北から）



8 トレンチ2掘下げ状況（南西から）



1 中段南西隅（北から）



2 中段南西隅（北東から）



3 トレンチ4掘下げ状況（南東から）



4 トレンチ4土層断面（北東から）



5 土層D確認トレンチ掘下げ状況（南西から）



6 土層D断面（西から）



7 トレンチ5掘下げ状況（北東から）



8 トレンチ5土層断面（南東から）



1 石段1と石垣（南西から）



2 石段1（南西から）



1 石段1と石垣（西から）



2 石段1（西から）



1 石段1と石垣の結合状況（南西から）



2 石段1と石垣の結合状況（南東から）



1 石段1 踏石除去後（西から）



2 石段1 構築状況（西から）



1 石段1断面（西から）



2 石段1最上段及び門礎石構築状況（北西から）



1 石垣西側全景（南西から）



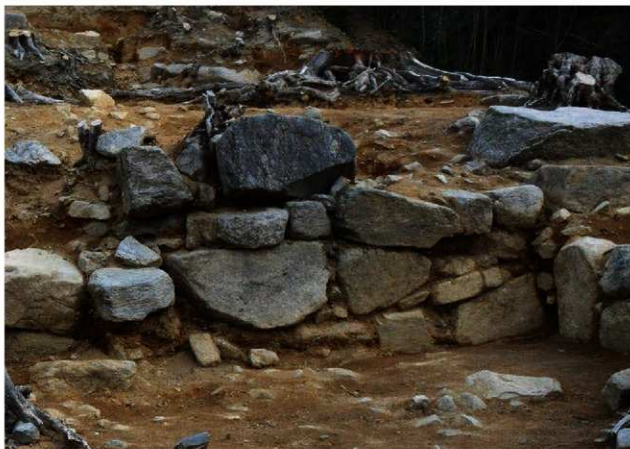
2 石垣東側全景（南西から）



1 石垣西側① (西から)



2 石垣西側② (南西から)



1 石垣西側③（南西から）



2 石垣西側断ち割り状況（北西から）



1 石垣西側構築状況（北から）



2 石垣西側構築状況（南東から）



1 石垣東側（南西から）



2 石垣東側構築状況（南東から）



1 門（礎石）検出状況（北東から）



2 門（礎石）検出状況（南東から）



1 門（礎石）西側据付状況（南西から）



2 立方体状石（西から）



1 基壇をもつ礎石建物全景（上が北東）



1 基壇正面（南西から）



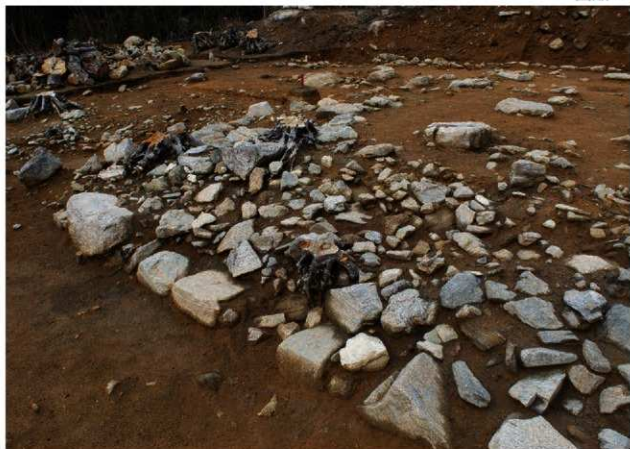
2 基壇（西から）



1 基壇西辺（北西から）



2 基壇東辺（南東から）



1 基壇南西隅（南から）



2 土層F確認トレンチ掘下げ状況（北から）



3 礎石8・9周辺掘下げ状況（西から）



4 トレンチ7掘下げ状況（北東から）



1 トレンチ7土層断面（北から）



2 土層E断面（南西から）



3 土層G断面（北東から）



4 土層I断面（北東から）



5 土層H断面（南西から）



6 基壇土器出土状況（北から）



7 基壇整地土上層土器出土状況（東から）



8 基壇西辺付近土器出土状況（北から）

1 基壇正面石積み検出状況
(南東から)



2 基壇正面石積み検出状況
(西から)



3 基壇正面石積み検出状況
(南西から)





1 礎石建物全景（北東から）



2 礎石建物全景（北から）



1 礎石建物全景（北東から）



2 礎石 6 据付状況（南西から）



3 礎石 6 及び周辺集石検出状況（北西から）



4 礎石 7 据付状況（南西から）



5 礎石 2－7 間土層断面(手前。北西から)



1 礎石 8 及び周辺集石検出状況①（南東から）



2 礎石 8 及び周辺集石検出状況②（北東から）



3 礎石 3 - 8 間土層断面（北西から）



4 礎石 8 持上げ風景（北から）



5 礎石 14 検出状況（南西から）



1 礎石 12 据付状況（北東から）



2 礎石 9 据付状況（南西から）



3 礎石 9 除去後①（北西から）



4 礎石 9 除去後②（北から）



5 礎石 10 周辺掘下げ状況（南東から）



1 石段 2 検出状況① (南西から)



2 石段 2 検出状況② (南西から)



1 火葬遺構検出状況（北東から）



2 火葬遺構検出状況（東から）



3 火葬遺構上部礫敷き断面（北西から）



4 火葬遺構下部遺構検出状況（北西から）



5 火葬遺構下部遺構検出状況（北東から）

図版 29



1 火葬遺構半裁状況（北西から）



2 火葬遺構配石検出状況（北西から）



3 火葬遺構配石検出状況（南から）



4 火葬遺構骨出土状況①（東から）



5 火葬遺構骨出土状況②（東から）



1 火葬遺構棺台検出状況（北西から）



2 火葬遺構棺台検出状況（南西から）



3 火葬遺構棺台除去後（北西から）



4 火葬遺構棺台除去後（南西から）



5 火葬遺構完掘状況（南西から）



1 方形石組検出状況（南西から）



2 方形石組検出状況（東から）

1 方形石組 石組除去状況①
(南西から)



2 方形石組 石組除去状況②
(南東から)



3 方形石組 立石検出状況
(南西から)





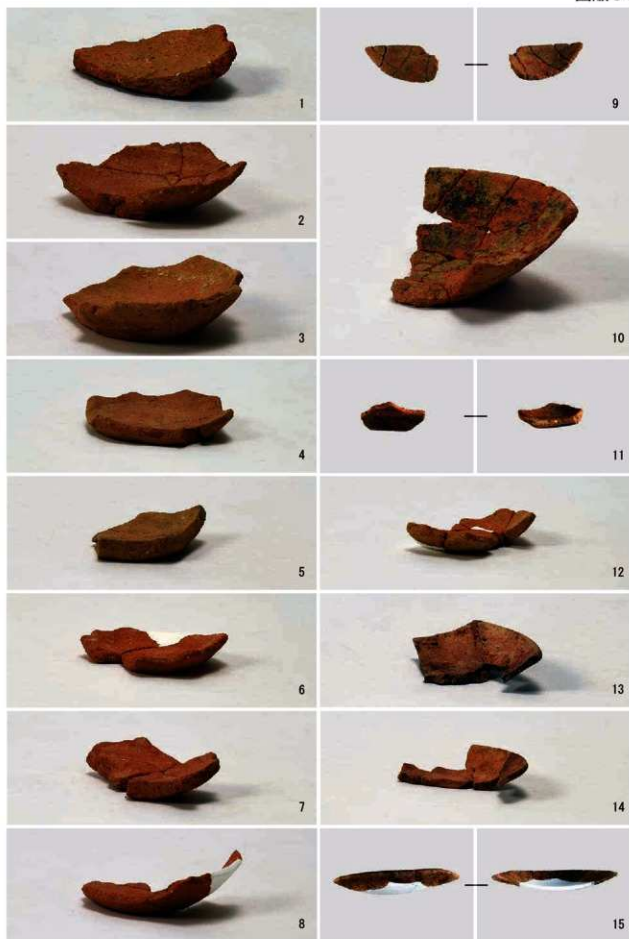
1 方形石組完掘状況
(南西から)



2 方形石組完掘状況
(北東から)

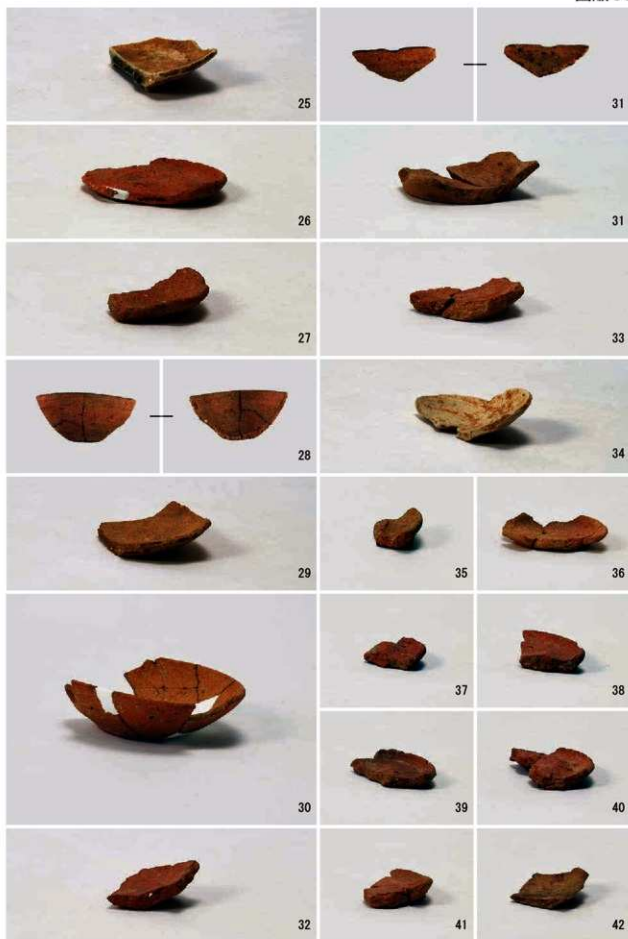


3 方形石組付近羽口出土状況
(南から)

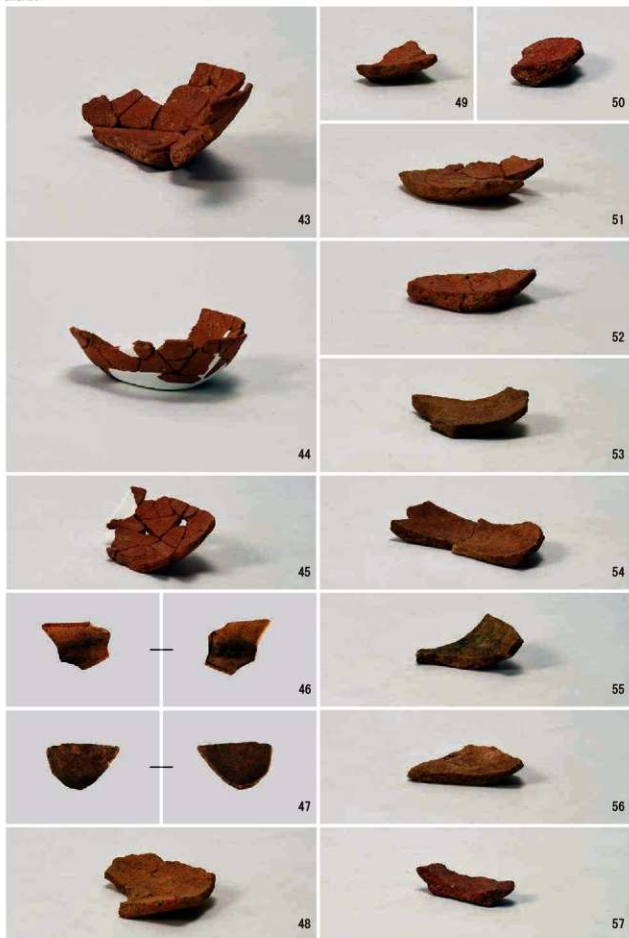


出土遺物 (1)





出土遺物 (3)

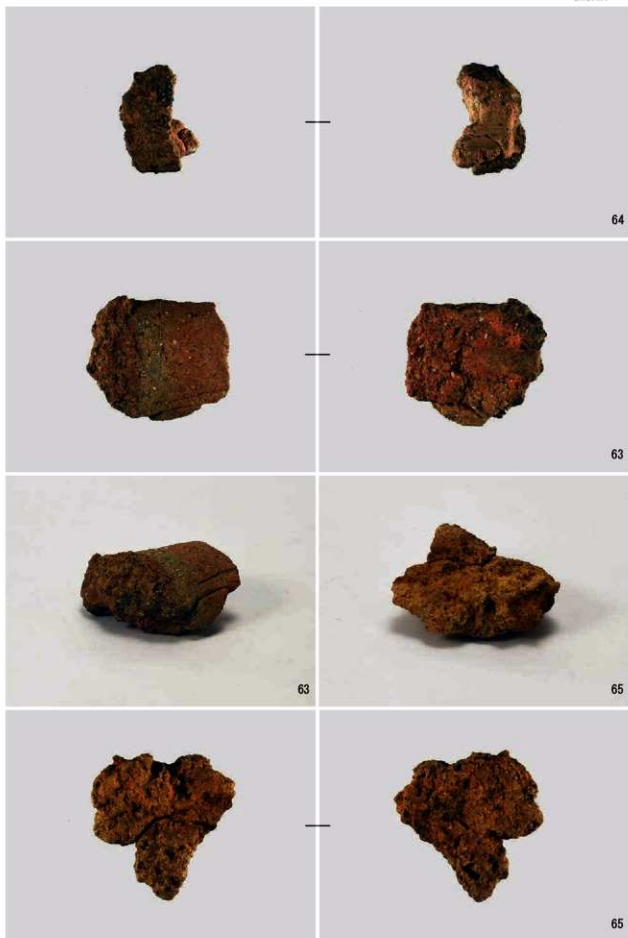




出土遺物 (5)



出土遺物 (6)



出土遺物 (7)



出土遺物 (8)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あみだじ
書 名	阿弥陀寺
副 書 名	上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査
巻 次	
シ リ ーズ 名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シ リ ーズ 番号	第 100 集
編 著 者 名	岡田裕之 岩崎仁志 小河泰史 河村美沙 高橋浩史
編 集 機 関	山口県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 753-0073 山口県山口市春日町 3 番 22 号 TEL 083-923-1060
発 行 年 月 日	西暦 2018 年 2 月 28 日 (平成 30 年 2 月 28 日)

ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あ み だ じ 阿弥陀寺	やまぐちけん 山口県 防府市 牟礼	352063		34° 04' 35"	131° 37' 00"	20161003 } 20170317	1,500	砂防堰堤 工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物	特記事項
阿弥陀寺	寺院跡	中 世 近 世	基壇をもつ礎石建物 1 棟 石 段 2 箇所 石 垣 1 箇所 門 (礎石) 1 箇所 火葬遺構 1 基 方形石組 1 基	土師器 須恵器 佐野焼 平 瓦 輪羽口 椀形滓 鉄 釘 銅 銭	多くの遺物は 土石流堆積土中 から出土しており、 基壇には、 少量の土師器が 伴うのみである。 火葬遺構中か らは、鉄釘及び 木炭が出土した。

要 約	阿弥陀寺は、山口県防府市牟礼地内に所在し、防府平野の北東縁にある大平山の西側斜面に立地する。今回の調査地は、現在の阿弥陀寺の中心伽藍より東側に約 100 m の地点にある、標高 121 ～ 135 m の尾根上を対象とした。 調査の結果、尾根の斜面を造成した平坦面上に、基壇をもつ礎石建物 1 棟を確認した。建物の中央間から前面に延びる延長線上に、門 (礎石) と石段及び石垣が計画的に配置され、建物の背面にも、平坦面の上方へ続く石段を確認した。さらに、基壇造成土中に火葬遺構 1 基、基壇の南西側の平坦面上に方形石組 1 基を確認した。 出土した土師器や年代測定等の結果から、礎石建物をはじめ旧境内を構成する遺構の年代は、13 世紀後葉～14 世紀初頭と考えられる。方形石組は、近世後期の囲炉裏等の基礎の可能性もある。基壇をもつ礎石建物は、その規模や平面形式、付属する石段や石垣の荘厳さ等からみて、本堂形式の仏堂と考えられる。ただし、出土遺物や生活痕跡の少ない点から、未完成の可能性が高い。
-----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第100集

阿弥陀寺

—上坂本東大川防安・通常砂防工事に伴う埋蔵文化財調査—

2018年2月28日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 大村印刷株式会社

〒747-8588 山口県防府市西仁井令1丁目21番55号